ところえ廊下に足音がして、女中のお秀がはいつてきたが、
『奥さま！　アノ、番町の高木さまが……旦那さまわお留守だと思しましたら、それなら奥さまにお目にかゝりたいとおつしやつて、もうお座敷えおとうりあそばしてございます。そうして、これわお嬢さまのお見舞にツて、このお花をくださいました。』
と、いゝながら出したのを見ると、これわ大輪のぼたんの花、しかも眞赤な燃えるようなのです。
『まア珍らしい、室で咲かしたのでしよう！』
と、思わず雪枝わいゝましたが、
『きつと寒ぼたんだろうよ。……なんにしても、それでわお目にかゝつて來よう。』
母わはや立ちかゝります。
『それでわお禮をよろしく云つてちようだい！』
『アイヨ。』
徳子の出ていつた後で、お秀わそのぼたんの花を、さも恐そうにもちながら、
『このお花をどう致しましよう？』
『そうだねエ……そこえ一しよに生からないかエ？』
『でもせつかく生かつとりますのに……』
『いゝよ、その梅や寒菊わ、なにか他の物にいけて、かわりにそれを生けとくれ！　せつかくお見舞にいたゞいたんだから。』
『左様でございますねエ、それでわそういたしましよせう。』
お秀わ花瓶を次の間まで持ちだし、中の梅と寒菊とを今の寒ぼたんにさしかえて、元の床の間にすえますと、
『それでわ裏だよ。よくこちらをむけとくれ！』
『こうでございますか。』
『まだ横むいてるねエ。』
『でわこういたしましよう。』
『アラ、まだいけないワ。』
と、臥ながら雪枝わ小言をいつています。いつもわ何事も人まかせなのに、この時ばかりわ妙にむづかしい事をいう。それも病氣のせいかと思うので、お秀もいゝなり次第に花瓶をかゝえて、あちらえ向け、こちらえ寄せして、やつと氣にいつたところえ來たので、それをしおに、やがてこの室を出て行きました。
あとにわ雪枝たゞ一人、頭わ枕におきながら、
『まアほんとに好い花だこと！』
と、さも心を奪われたように、ウツトリ花にみとれていましたが、その中に目が疲れたとみえて、

いつかまぶたが閉じられてしまひました。一間の中わ、シンと靜まつて、何の音もきこえません。たゞ隣りの屋敷の方で、のどかな羽子のはずむ聲がするばかり。

すると、やがて床の間のぼたんが、風もないのに搖ぎだしました。そしてその花の心から、まるで焔のもえるように、紅い煙がたつたと思うと、それが千筋の糸のようになつて、次第に雪枝の枕元えのび、はてわ無心で寢ている顏を、三度ほどなでたかと思うと、その糸がまた自然にちゞまつて、もとの花の心におさまり、あとわ又少しも動きません。

ところえ以前のお秀わ、また急いでやつて來ました。お秀わなにかうれしそうに、臥ている雪枝の枕もとに手をついて、

『お嬢さま！　……お嬢さま！』

と、二聲までかけましたけれども、返事がありませんので、少し高くまた呼んで、

『お寢みなのでございますか？』

と、きいた時、はじめて雪枝わ眼をあけましたが、

『なんだねエ、やかましい！　さつきから起きてるぢやないか。』

と、さも不興そうにいゝます。けれども、お秀わ氣にかけず、

『アノ、吉住さまのお嬢さまが、……かおるさまがいらつしいましたよ。』

と、自分からまづうれしそうにいつて、さぞ雪枝が喜ぶだろうと思うと、これわしたりその顏にわはや八の字が寄せられて、

『なんだねエうるさい！　病氣だつてことわつておしまいな。』

『アレ、あの仲好しのかおるさまを？』

お秀の眼わ、圓くなりました。

『そうだよ。』

雪枝の眼わ、角立つています。

二　天神まいり

いつにない雪枝の不機嫌、お秀わたゞあきれるばかりで、急にその場をたちかねましたが、その中にもう廊下の方てわ、

『雪枝さん！　いかゞ？』

と、可愛らしい聲がして、心安いなかのかおるわもうそこまできた樣子ですから、こうしていられないと、あわてゝ又座敷を出て、今しもいれちがいにはいろうとする、かおるの手をとつて押し戻すようにしながら、

『少々お待ち遊ばして……！』

と、いかにも急きこんだようにいゝます。かおるわまだ左程にわ思いませんから、

『どうしたの？　お醫者さまがいらつしやるの？　……そんなら待つてゝもよくつてよ。』

『いゝえ、そうぢやないんでございますよ……あの……やつぱり御病氣のせいでございましょう？　どうも御機嫌が悪うございまして……』

『それわそうだわ。熱があると誰でも氣分の悪いものだよ。』

『ところが……それがたゞの御機嫌の悪いのたア違いますので……私わお幼い時分からおつき申しておりますが、ついに一度あんな事ツて、あつた事わないんでございますよ。』

『まア……そんなゝの……どうしたんでしようねエ。』

『それがほんとうに不思議なんでございまして……實わさきほど……後親類からお見舞だといつて見事な寒ぼたんをお貰い遊ばしたんです。すると、そのお花をいける時分から、そろ〳〵氣むづかしくおなり遊ばして……そのまゝ一と寢入なさいましたから、好い鹽梅だと存じとりますと、お目がさめてからツていうものわ、まるでうまれ變りでもなすつたか……それともなにかゞ乘り移つたとでも申すように、すつかり御樣子が變つてしまいましたんでございます……』

と、初わ二人ともヒソ〳〵と、小聲で話しあつていましたが、いつしかだん〳〵調子づいて、聲の高くなつたのも氣がつきませんでした。

すると、それが障子越しにきこえたものか、中からかん走つた聲で、

『やかましい〳〵、やかましいつたらそんなとこで……！』

と、恐ろしい勢です。

『アレ、あのとうりでございますもの。』

と、お秀わ首をすくめて眉をよせます。

『まアどうしたんだろう？』

と、さすがにかおるも眼を圓くしました。

けれども常から大の仲好し、いかに御機嫌が悪かろうとも、この顏を見せたなら、また虫の居所もおさまろうと、今わ少して猶豫せず、なお心元無さにとめようとするお秀にわ、目もくれないでいそ〳〵と居間えはいつて行き、

『雪枝さん、私だワ！　……どうしたのよウ。』

と、わざと常よりもなれ〳〵しく、すぐ枕元えすりよつて、かいまきの袖に輕く手をかけながら、ニツコリとのぞきこみました。

こうすれば病人の方も、うれしそうに笑をかえして、その手をとるのがあたりまえです。

ところが今日の雪枝わ昨日までの雪枝でわありません。せつかくにこやかにのぞきこまれた大の仲好しの友達を、さも憎そうににらみつけて、結んだ口わ容易に開かないのです。

かおるわ少し勝手がちがいましたが、なお試みに搖りうごかしながら、

『なにをそんなに恐い顏してるの？』

と、更に顔を近くよせて、子供をあやすようにしました、すると、雪枝わ手を出して、かおるの肩をつきもどし、

『いやだわこの人わ！　そんな事して苦しいぢやありませんか。私押し潰されちまうわ。』

と、つぶやく。

『まア、これわ私悪かつたことねエ。』

と、かおるわ少し身をよけながら、

『けども雪枝さん！　せつかく私お見舞にきたんだから、そんなに怒りつけないでくださいな！』

『私なにも怒りやしないわ。たゞ苦しいから苦しいというんだワ。』

『ですから、そりや私が悪かつたんですから、今あやまつたぢやありませんか。……まアそんな事どうでもいゝから、雪枝さん又いつものように、なにか面白いお話してあげましよう。ネ。それがいゝでしよう。』

『いゝえ澤山！　私お話大きらい。』

『アラ……そんなら本を讀んだげましよう？』

『本なんぞもう澤山！』

『まア……そんならなんでもあなたの好きな事……』

『私好きな事なにもありまん。』

聞けば聞くほど雪枝の機嫌わ、ます〳〵悪くなつてきて、言葉に角がたつばかりです。けれどもかおるわ友達がいに、なんでもこの機嫌をなおそうと、又少しすりよつて、

『でも雪枝さん！　ちよつとお見せなさい！　熱でもひどく出てるんぢやなくつて！』

と、手をのばして、その額をみようとすると、雪枝わその手をふれさせもあえず、まるで電氣でもかゝつたように、いきなりはねおきて身をふるわせ、側にあつた雑誌を取るがはやいか、

『畜生！　々々！　この畜生！　彼方え行け、しツ！　しツ！』

と、云いながらかおるに投げつけ、かおるが驚いて身を退けるはずみに、袖がさわつて床の間の、さつきの寒ぼたんの花びらを、二片三片落としたと思うと、さもその身をうたれたように、

『アツ、痛た、痛た、痛た。ひどい〳〵ひどいかおるさんだ！』

と、いゝながら雪枝わ、すぐかいまきをかぶつて、床の中えもぐりこんでしまいました。

あまりのことにかおるわ、言葉も出せずに立ちすくみますと、さつきからの様子を氣づかつて、障子の外に控えていたお秀わ、急いでとんで出てかおるの手をとり、

『だからやつぱりいけないんでございますよ。さ、さ、いつそお歸り遊ばした方が……』

と、介抱するように誘いだして、まだ煙にまかれているかおるを、玄關のところまで連れ出してしまいました。

せつかく見舞にきたのに、かえつて病人の不興をつのらせた、かおるの本意なさ、心外さわ、實

に一とうりでわありません。かおるわぼんやり門口にたつて、ホット太息をつきましたが、そのうちにふと思いついたのわ、雪枝の病氣わ只事でわないが、あれわ氣が違つたのだ、きつとそれに違いないという事です。

でいよ〳〵、氣が違つたとすれば、ちようど好い事があると、つゞいて思い出したのわ、この町の町はづれにある、梅山の天神さまわ、狂人をなおすご利益があると、つねから母に聞いていた事でした。そこでかおるわ、その足で家えわ歸らず、すぐ梅山の天神えとでかけました。

三　花屋の仰天

梅山の天神さまといふのわ、町はづれの小高い岡の上にあるので、その岡にわ、梅が澤山植わつていて、毎年の春の花盛りにわ、まるで白い巾でつゝんだように、それわ〳〵綺麗ながめです。

天神さまのお社わ、ちようどその梅林の中にあるので、そのお社におまいりをして、そこに一時間もいると、すつかり梅の香がうつゝて、家え歸つてからも、着物に好い香がするというくらいですが、それだけまた天神さまにも、不思議なご利益があるという事で、昔から大そうはやる神さまになつていました。

で、かおるわ、雪枝の家をでますと、すぐこの天神さまえ來ましたが、その時わもう日が暮れかかつて、おまいりの人もありませんでしたから、すぐに拜殿えきまして鈴をガラ〳〵とならし、それから手をポンポンとうつて、

『どうぞお友達の雪枝さんの病氣が、早くなおりますように！　どうぞ大好きの雪枝さんのきげんが元のとうり好くなりますように！』

と、一心に拜んでおねがいをしました。

その間およそ三十分ばかり、傍目もふらず一心になつて、この事ばかりお願いをして、それからやつと立ちあがり、はじめて四邊を見まわしますと、いつか日がすつかり暮れて、もう足元まで暗くなつております。

『まア遲くなつたこと！　お母さんがさぞ心配していらつしやるだろう。ドレ、早く歸りましよう。』

と、いゝながら急いで歸ろうとしますと、誰もいないと思つたのに、

『かおる！　かおる！』

と、どこかで呼ばれるような聲がします。

『誰？　どなた？』

と、云いながらまた見まわしますと、いつの間にか拜殿の上に、可愛らしいお稚兒さまがいて、自分に話をしかけるようですから、さてわ天神さまのおつかわしめかと驚いてその前に手をつかえ、

『ハイ、なんでございます？』

と、きゝました。すると、そのお稚兒さまの言葉にわ、

『お前のお友達の病氣を案じて、早く癒したいと思うなら、まづあの床の間にいけてある、ぼたんの正體をみるがよい。』

『ヘツ、床の間のぼたんの正體……？　オゝ、そういえば雪枝さんの居間に、ぼたんの花が活かつておりました。それでその正體とおつしやいますのわ？』

『それわお前が見ればわかる。』

『でもさつきちよつと見ましたが、たゞの花のようでございました。』

『イヤ、それが只の花でわない。まアその魔物のつくつた花、世にも恐ろしい怪ぼたんというものだ。』

『まア……それわどうしてわかりましよう？』

『サ、それを見せてあげよう。一しよにお出で！』

と、いゝながら手をさしのべますから、その手に引かれて行つて見ますと、どこをどう歩いたとも知れず、廣い綺麗な花擅え來ました。

見ると、その花壇にわぼたんが一面に咲いておりますが、その咲いておる花壇の中にわ一人のおばあさんがいて、しきりに水をやつております、お稚兒さまわ、そのおばあさんを指さして、

『あのばゞのする事をこゝでよく見るがよい。またゝきもせず見るがよい。よいか〳〵、かおる！

よいか。』

と、いうかと思うとその姿わ、霧のように消えてしまいました。

變な事だと思いましたが、かおるわそのまゝまたゝきもせず、じつとばあさんの様子を見ていますと、不思議な事にわその顔が、こちらを見る時わ優しい人間ですが、あちらを向くと恐ろしい鬼ばゝになるのです。

またその上にこのばあさんわ、ぼたんの花に水をやるとき、ズツと口をさしよせて、花の心に息を吐きかけますが、その息をはきかけられると、花わさも勢好く、パツと音でもさせるように、皆唉ききつてしまうのです。

かおるわ夢でも見るような氣で、われを忘れて見とれておりますと、やがてそのばあさんわ、花壇中のぼたんの花に、大方息をかけてしまつて、さもくたびれたという風に、腰をのばしてちよつと休みましたが、そのまゝどこえか行つてしまいました。

かおるわこゝまで見届けまして、さてわぼたんの正體とわ、今の事かと思いながら、まだわからない事がありますから、その側の垣根の蔭で、そつと様子を見ておりました。

すると、今度わ足音がして、誰か來るように思いますから、見つかつてわ悪かろうと、小さくなつておりますと、やがてそこえ來ましたのわ、平生から顔を知つている、同じ町の花屋の亭主です。

『まア、あの人わ知つてる人だよ。』

と、心の中にわ思いましたが、またじつと隠れておりますと、花屋わ少しもそんな事わ知らず、なんだか四邊を見まわしながら、花壇の方えと忍んでゆきます。

さてわ花を取りに來たのかと、かおるわ目も放さずにおりますと、今度わまた花壇の方で、なんだかザワ〳〵と話し聲がきこえます。

『オヤ、また誰か出てきたのか？』

と、思いながらそつちを見ようとしますと、その途端にさつきの花屋わ、なにゝ驚いたかキヤツというと、まるではずんだまりのように、飛びあがつてこちらえ逃げて來ました。

その聲があまりけたゝましいので、かおるも思わず飛び出しますと、出あい頭に二度びつくりをして、花屋わその場にしりもちをつきましたが、

『わアア、大、大、大變、大變だ！』

と、あわてかえつて逃げようとして、逃げる事もできないくらいです。

なにが何やらわかりませんで、かおるわまづ花屋をおこして、

『モシ、お前さん、どうしたの？』

と、いゝながら尋ねますと、花屋わようやう胸を撫でながら、

『オウ、お、お前さんわほんとうの人間ですか。』

と、まだふるえがとまりません。

四　ぼたんの行方

かおるわおかしさをこらえながら、

『ぜんたい花屋さんどうしたの？　なにをそんなに恐がつてるの？』

と、聞きますと、花屋わまだ氣味悪そうに、後の方を振りむきながら、

『どうしたつて、お前さん！　あんなところ見ちやアたまりやしません。まアお聞きなさい、こうなんです。——ついちやア自分の悪い事から、白狀してかゝらなくつちやなりませんが、實わ私わご存じのとうり、花屋を商賣にしてるんですが、なんしろこの頃わ時候が悪くて、まだ好い花がないんです。ところがお前さん！　あのばあさんとこにやア、どうしてあゝ巧く作るか、この寒いのにぼたんの花が、見事にさいてるぢやアありませんか。そこで私わ賴みこんで、この間から二三本づゝ、毎日わけて貰つちやア、店で賣るようにしてたんですが、なんしろ一々錢を出していちやア、もうけもあんまりありませんから、つい悪い氣を出して、今夜月のないのをさいわい、そつと花壇え忍びこんで、花を盜もうと思つたんです。』

『まアひどい……』

『だからほんとに悪い事アできません。で、私がはいつていくと、なんだか話聲がするぢやアありませんか。なんだと思つてよく見ると、どうでしようお前さん、あのぼたんが皆人間になつて……

ちようどお前さん見たような、可愛い女の子になつて、泣き出すやら、怒るやら、いろんな事をいつてるのです。花の精という事ア、ずいぶん本や話ぢやア、見たりきいたりしたことがありますが、本物を見るのわ今夜がはじめて、私アもう肝潰しちやツて、夢中になつて飛んできたんです。……アヽほんとに恐かつた。アレ〳〵、まだなんだかきこえます。取つつかれると大變だから、行きましよう、〳〵！』

と、かおるの手を取つて逃げようとします。かおるも氣味が惡くなつて、花屋と一緒に駈け出しましたが、今の話やさつきの事をかれこれ思い合せて見ると、何だか思いあたるような氣になり。

『アヽ！　それぢやア花屋さん……あの雪枝さんところえ、お見舞に來たぼたんの花わ、やつぱりお前さんところで買つたんですネ？』

『なんだか知りませんが、御病人の御見舞だといつて、一本好いのを買いに來た方がありますよ。』

『まア、そう、そんならそのぼたんの花も、きつと化ける花なのねエ。』

『私やアちつとも知らずに賣りましたが、それぢやアやつぱり化けるのかもしれませんネ。』

『それでわかつた、すつかりわかつた事よ。』

『なにがお前さんわかつたんです？』

『なんでもいゝワ、こつちの事よ。私ちつと急ぐから、こゝから一人で歸ることよ。左樣なら！』

と、いう中に、かおるわもう花屋にわかれて、ひとりまた梅山の、天神さまの前えと來ました。

そして社殿に額づいて、

『アヽ、ありがとうございます。おかげさまでお友達の、機嫌の惡いわけもわかりました。いづれ雪枝さんがなおりましたら、一しよにお禮にまいりますが、ちよつとお禮を申しあげます。』

と、いつてまた立ちあがり、それからまた暗い途を、急いで雪枝の家えときました。

けれどももう夜ふけですから、門わ堅くしまつております。

『ご免なさい。』ドン〳〵〳〵！

『明けてください！』

ドン〳〵〳〵と、可愛い聲で呼びながら、頻りに戸をたゝきましたが、容易にあけてくれません。

『アヽ、困つた、どうしよう！　明日になると遲くなるのに……』

と、かおるわ氣が氣でありませんから、なおも戸をたゝきながら、ふと上を見ますと、何だかボウツと屋根の上に、薄い光り物が見えました。

なにかと思つてよくみると、それわ灰色をした一叢の雲で、その中程の古綿のようなところわ、氣のせいかぼたんの花のようにも見えます。

『まアいやらしい、なんだろう？』

と、一そうひとみをこらして見ますと、その雲わまた二つにわれて、途端に花片のような物が、屋根の中え降りこんだと思う間に、雲わ消えてしまいました。

その時ちようど人が來て、門わ内からあきました。ヤレ嬉しやと中えはいれば、中の人わ驚いて、

『まアかおるさま今頃に？』

と、いうのわ例のお秀です。

『急にご用ができたから、それで今頃來たんです。それにしても雪枝さんわ、あれから又惡かアなくツて？』

『ほんとに困るんでございますよ。只御機嫌の惡いばかりなら、まだ宜しいんでございますが、夜分になりましたらお熱がでゝ、今しがたわまたどう遊ばしたんですか、さもお苦しそうになされて…』

と、皆まで聞かず、

『それでわいよ〳〵そうに違いないワ。ぢやア早く連れてつてください！』

『でも又先程のようで御座いますと……』

『イエもう大丈夫よ。私好い事を知つてるのだから。』

と、はや先に行こうとします。

『アレ、お待ち遊ばせ！　そちらわお暗うございますから、失禮ですがこちらから！』

と、お秀わかい〳〵しく勝手口の方えと、先にたつて案内しますその後について行きます

と、やがて納屋の蔭から、ごみ函の側を通りかゝりました。するとその側に可愛らしい女の兒が二人で泣いているようですから、オヤと思つてよく見ると、それわ女の兒でわなく、ちようどごみ函

のふたが明いていて、中から寒菊と梅との枝が、半分見えているのでした。

かおるわそれを見ると、立ちどまつてその花を、兩方とも取りだして、

『可哀そうにお前たちわ、ぼたんのお蔭で棄てられちやつたんだネ。でもよくしぼまずにいておくれだつた。』

と、いゝながら、袖でかばつて、そのまゝ又お秀に追いつき、やがて雪枝の居間にとうりました。

居間にわ母親の德子も、まだ寢ずに枕元にいて、さも心配そうに看病しております。雪枝わまた床の中で、さも苦しそうにうなつております。

さて床の間わと見ると、例の大きなぼたんの花が、勢よく咲きほこつていますが、かおるの眼にわその花が、さつき花壇で毒氣をはきかけていた、あの魔女の顏とより見えません。かおるわギヨツとしながらも、元より友達思いですから、なんで今更ためらいましよう。いきなりそこえ走りよつて、ぼたんの花を取るが早いか、疊の上え投げつけて、かわりに今拾つて來た、梅の花と寒菊とを、花瓶の中えいけました。

かおるわまづこうしておいて、初めて雪枝の母親に會釋し、それから枕元え來て、

『雪枝さん今晩わ？』

と、やさしく聲をかけました。すると雪枝わ、今まで苦しそうにうなつていたのを、まるで忘れてしまつたように、ニツコリ笑顏を見せながら、

『まアかおるさん、よく來てくだすつたねエ……』

と、いう聲さえもさえ〴〵して、さもうれしそうに起き返りながら、かおるの手を握りました。

お秀わむしろあきれたように、

『まアお嬢さま！　御機嫌がなおつたんでございますか？』

と、云つて顏を見つめますと、雪枝わヤオラ起きなおつて、

『私ほんとに……いやな夢を見てたのよ。かおるさんが來てくだされなかつたら、どんなに苦しかつたか知れない事よ。』

『まア……恐い夢つて、どんな夢？』

『私……なんでも恐い〳〵、いやな〳〵おばあさんに、えりかみをつかんで連れてかられて、大きなぼたん畑の中で、もう殺されようとするところだつたのよ。……アゝほんとに恐かつた。私もうぼたんの花、大嫌いになつちやつたワ。』

と、いゝながら氣になるように、床の間の方を見かえりますから、

『もう大丈夫よ雪枝さん！　あのぼたんわ取つてやつたワ。』

と、かおるわ立ちあがつて、さつきすてたぼたんの花を、念のために拾つて見ようとしますと、これわしたり！　いつ誰が持つて行つたか、もう影も形もありませんでした。

五葉の松子

五

葉の山といふのがありました。それわ遠くから見ると、ちようど五葉の松の盆栽のようですから、それでこういふ名があるのだといゝますが、實わその山の頂きにわ、峰が五つにわかれていて、その五つの峰にわ、高山でなければないといふ、一種の這い松がおいしげつているのでした。

またこの山のふもとに、五家の莊といふところがありました。それもむかし平家の落武者が、源氏に迫われて逃げこんだところで、その頃五人の武士が、はじめて住家をこしらえたので、それから、こういふ名ができたのですが、今でわおよそ五百軒ばかりある、いたつて平和な村になつております。

さてこの五家の莊村に、五年前から移つてきた人で、五島とい

ふのがありまして、その家にわ二人の娘があつて、姉わ松子といゝ、妹わ藤子とよばれていました。

この松子わ、いたつて利發で、しかも容貌好しでありましたが、それにひきかえて妹の藤子の方わ、どうしたものかうまれつきのおしで、もう十一になりますのに、耳もきこえなければ、口が少しもきかないのです。

兩親わ悲しがつて、いろ〳〵に手を盡してみましたが、どうしてもなおすことができません。それも都であるなら、盲唖學校えでもいれて、それ相應の教育もできますが、なにしろこんな片田舎でわ、それも及ばぬことゝあきらめ、一生の厄介者とおもつておりました。

けれども姉の松子わ、かたわの妹ほど不憫が增し、かあいさがつのりますので、毎日その相手になつて、手まねや目の働きで、きげんをとつて遊んでやつたり、また物を教えたりしますのに、口がまるできけないだけ、腦もやはり鈍いと見えて、時にわ猿にもおよばないほど、物のわからない事がありますから、なんといふ情ない事だろう、とはてわ涙にくれることもあります。

けれどもおなじ人間わ人間、ことに自分の妹であるからわ、この姉の一心で、眞人間にわなれないまでも、せめてわ今少し聞きわけのできるようにと、してできない事わあるまいと、自分の用わそつち退けにして、朝から晩まで側に附きそい、なにくれとなく世話を燒くばかりか、夜になつて妹が寢ると、自分ばかり庭えでゝ、靜かな小山の上えきて、天に向つて一心に、

『どうぞ私の妹の、口がきけるようになりますように！　どうぞ私の妹に智惠を授けてくださいますように！　――それで私が片耳を失い、また片目をとられましても、あの妹が人間らしい滿足な者になりますなら、こんなうれしいことわございません。』

と、毎晩のように祈つておりました。

けれどもまた天の神さまゝで、やはりつんぼかおしと見えて、それほど一心に祈るのに、少しも願いをおきゝにならず、相變らず藤子わかたわで、耳も口もきかないばかりか、時にわ拍子外れに叫びたつて、家中をさわぎまわるところなぞわ、とても人間とわ思われないくらいです。

こうなるとさすがの兩親も、今わ世間の手前を恥じて、側に置くこともできないようになりましたから、松子と相談をして、いつそのことこの藤子を、どこか遠くえやつてしまおうとしました。

松子わ聞いて驚くまいことか！　なるほど昔噺の中にわ、ばあさんをすてたといふ事も讀んだし、また子を捨てるやぶと云うことわざも、聞いた事わありますが、現在自分の妹を、たといかたわであるにもせよ、遠いところえやつてしまうなどわ、なんたる酷い事でしようと、松子わどうしてもきゝません。

『それといふのも、自分の信心がたらぬため、一念がまだ屆かないからだ。その一念の屆かないのも、つまりわこんな家の庭の、低い山でお祈りをするから。……天の神さまにお願いするなら、天に昇る事こそできざれ、天に一番近いところえ行つて、お祈りをするほかわない。――その天に近いところ、高いところというからわ、あの五葉山の頂邊えいつて聲を限りにお願いしたら、神さま

のお耳にはいらぬまでも、雲が取次いでくれぬ事わあるまい。オ、そうだ、それが一番だ。』

と、こう思いたちますと、もとより氣丈な松子わ、その夜藤子の寢つくのを待つて、供さえつれずたゞ一人、そつと裏口からぬけ出して、幸いの月の光を力に、五葉山えとのぼつて行きました。

一たいこの五葉山わ、海拔五千五百尺、五ケ所に道がついていますが、いづれもふもとから五合目までこそ、人も馬も通いもすれ、後わ獸も踏みすべるほどの、いたつて險しい岩山です。

それを松子わ事ともせず、道をたどつて行きましたが、その中に夜もふけて、月も西山に沈んでしまいますと、もう方角さえわからなくなりましたから、仕方がなしに切株のところで、少し休んで夜のあけるのを、心細くも待つておりますと、そのうちに東が白んで、朝の五時ごろになつてきました。

で。また立ちあがつて、なおも頂上えと志ざしますのに、もうその邊わ一面の小岩で、その間にやせた灌木が、艸にまじつてはえているばかり、道らしい道わありません。

すると、これも今までその邊に、野宿でもしていたものか、肩から採集カバンをさげて、旅仕度に身をかためた、若い男が二人ばかりでゝきて、松子を見ると目を圓くしながら、

『モシ〳〵、お前さんわどこえ行くんです？』

と、きゝます。松子わちよつと會釋して、

『ハイ、五葉山えのぼります。』

『五葉山といやアこの山ぢやないか。この上登るところがあるもんか。』

『でもまだ、頂上えまいりません。』

『ばかなことをいゝなさんな！　私達わこのとうり、高山植物を採集にまわつてるもので、この五葉山の這い松を取ろうと思つて、この間から來てるんだが、それでもこの五合目からわ、どうしてものぼる事ができないので、もう歸ろうと思つてるくらいだ。』

と、一人がいえば、また一人が、

『それにお前さんわ女の身で、ろくに支度もせずに登ろうとわ、向見ずにも程がある。惡い事わ云わないから、私と一しよに歸んなさい！　そこまで送つてあげようぢやないか。』

と、さも親切そうに云います。けれども松子わ頭をふつて、

『いゝえ、私わ植物採集なんて、そんなのんきな事でのぼるんぢやありません。なんでも頂上まで行かなけりやならない、大切な用があるんですから、道がなくつてもかまいません。ぜひ頂上までまいります。』

と、いゝすてゝ、又行こうとしますと、

『オイ〳〵、お前さんわ植物採集を、のんきな事だとお云いだが、まだこゝよりも高いところや、嶮しいところを分けのぼつて、世界に珍らしい高山植物を、とつてくるのが私たちの役目だ。』

『その蠻勇の僕達でさえ、この山ばかりわ閉口して、登山どころか降參をして、これから下山しよ

うというのに、そんなかよわい女の體で、どうして頂上え行けるものか。だめなことだから止しなさい！』

と、交る〳〵止めようとします。それをまた振りきつて、

『御親切に云つてくださいますのわ、まことにありがとうございますが、なんでも行かなけりやならんのですから、わたしわまいります。』

と、どうしてもきかばこそ、

『それわ命知らずというものだ。』

『もとより命がけですもの。』

『なんてエ強情な女だろう！』

『思いたつたら退きません。』

と、はてわ二人のあきれている間に、松子わ岩をふみ艸をわけて、どん〳〵歩いて來てしまいました。

が、その間わ道こそなけれ、別に苦しいとも思えませんのに、あの人達わ男の身で、どうしてこれが登れないのだろう。と、思うとそれが不思議でならぬくらいです。

すると、やがて前の方に、葉の短い松のような木の、一面に茂つた山がみえました。

『さてわもう頂上に近い。今の人の這い松といつたのわ、大方この事であろう。』

と、思いながら攀じようとしますと、どこからともなく聲がして、

『コレ、待て！』

と、呼びとめられました。

しかもその聲が、凉しい中にもりんとした、女の聲のようですから、松子わ立ちどまつてあたりを見ますと、ちようど岩の鼻のところえ、さし出た松の枝の上に、よく畵て見る天人のような、神神しい女神が掛けていまして、こちらをさし招いておりますから、思わずそこに手をついて、

『ハイ。』

と、すなおに辭儀をしますと、女神わ更に語をついで、

『お前わ一たいどこえ行く？』

『頂上までまいります。』

『頂上えわなにしに行く？』

『天の神さまにお祈りをしに！』

『それわまたなにを祈りに？』

『妹のかたわのなおりますように！』

『シテお前の名わなんという？』

『松子と申します。』

と、言葉もよどまず答えました。

それを聞くと松の上の女神わ、たちまち眼の前え下りてきまして、

『オヽ、松子とわ頼もしい。妹のためとわ云え、よくもこの山え登つてきた。それなら頂上えのぼらずとも、また天に祈らずとも、その妹わなおしてやるぞよ。』

と、うれしいことを言いますから、松子わ我知らず進みよつて、

『エヽ、あの妹がなおりますか？』

『オヽ、なおるとも〳〵！　私のあげる薬をのめば、すぐとりつばになおるのぢや。』

と、いゝながら袖の蔭から、小さなびんを出してくれましたが、中にわなにもはいつていません。

『これがお薬？　まだ空でわございませんか。』

『その不審わもつともだが、薬わこれから與えるのぢや。——一たいこの五葉山の松わ、およそ世界も廣しといえど、こゝの他にわない名木ぢや。さればこそその名を聞いて、時々採集に來る者もあるが、落ち葉一本拾つてさえ、すぐに霧に封じこめられて、一歩も動けぬようになる。この山靈の威徳によつて、今までに誰一人、これを下界え持ちだした者わない。しかしお前わ妹のためにかゝるけわしさをものともせず、頂上までも登ろうという、その奇特の志にめでゝ、今こそ稀代の薬をとらせるぞ。——してその薬と云うわ、他でもないこの山の、五つの峰においい茂る、五ケ所の松の葉末の露！　それをそのびんにうけて、かたわの妹に飲ませて見よ！』

と、いうかと思うと女神の姿わ、そのまゝ霧のように消えて、さつき貰つたびんばかり、正しく手に残りました。

松子わびんをおしいたゞいて、さてよく見ますと、ちようど普通の薬びんのように！　横に五本の線があつて、五オンスはいるようになつております。

『それでわこれから五つの峯の、五ケ所の松のしづくをば、このびんに一オンスづゝ、受けて行けばそれでよいのか。アヽ、うれしい、ありがたい！』

と、こおどりしながら立ちあがつて、まづ一番近くにある、一の峯え來てみますと、なる程そこの松の葉から、さながら夕立の後のように、しづくが落ちております。

じつと受けておりますと、やがて一オンスの線にみちました。

すると、どこからかさつきの女神が、

『一の峯の松のしづくわ、命を延ぶる薬の水！』

と、歌います。

それから二の峯え行つて、そこの松の木末から、清水のように落ちるしづくを、二オンスの線まで受けますと、又女神の聲がして、

『二の峯の松のしづくわ、柔和を守る薬の水！』

と、いゝます。

次に三の峯え來て、松の葉のこぼれて來る、時雨のようなしづくをうけて、三オンスまで滿たしますと、

『三の峯の松のしづくわ、才智を與うる藥の水！』

と、女神の聲がきこえました。

四へんめに四の峯に來て、松の葉越に降るしづくを、びんの口に受けいれて、これで首尾よく五オンスまで、すつかり一ぱいに滿たしましたら、また女神わ高らかに、

『四の峯の、松のしづくわ親愛添うる藥の水！』

と、歌うのが又きこえます。

さて最後に五の峯え來て、五葉の松の葉末から、水玉のように出るしづくを、びんの口に受けいれて、これで首尾よく五オンスまで、すつかり一ぱいに滿たしましたら、また女神わ高らかに、

『五の峯の松のしづくわ、五體調のうる藥の水！』

と、歌いながら又現われましたから、松子わその前に頭をさげて、

『ありがとうございます。おかげさまでお藥ができました。これからさつそく歸りまして、妹に飲ませますでございます。』

『オヽ、それがよい〳〵！』

と、いゝながら松子の手を取つて、もと來た道を案内してきましたが、ちようど一の峯のところまで來ますと、

『それでわ、松子、さようなら！』

と、いうかと思うともう見えなくなりました。

けれども正しく松の精わ、あの峯え歸つたに違いないと、松子わちよつとびんをおいて、兩手をあわせて山の方を拜み、さていよ〳〵歸ろうと思つて、今のびんを持とうとしますと、こわいかに！おいたところにありません。

『オヤ、今まであつたもの！　……誰も持つて行くはずわないが。』

と、眼を圓くして探しましたが、どうしても……見つからないのです。

松子わひどく困りました。せつかく松の精に教わつて、苦心してとつてきた藥を、今失つてわなんの役にも立たない。

『あゝどうしたら可いだろう？』

と、途方に暮れはてゝ、泣きそうになつて立つておりました。

ところえまたもあらわれたのわ、さつき見たとわまるで變つた、恐い顏をした女の魔神です。魔女わ松子を見て、ニツコと笑いながら、

『どうぢや、これが欲しいか？』

と、いうのを見ると、その手にびんを持つて居ります。松子わ手を出して取ろうとしますと、魔女わ頭をふりながら、

『イヤ、只わやられない。私わこの上の岩の精だが、誰にも今まで踏まれぬところを、お前にさん〴〵踏まれたから、その遺趣晴らしにびんを取つた。しかしこつちにわ要らぬものぢや。欲しけりや岩に頭をすりつけて、五へん辭儀をするがよい！』

と、云います。松子わびんを取り返したさに、岩に頭をすりつけて、ていねいに五へん辭儀をしますと、そのじき一つに一つづゝうなづいて、

『一の辭儀にわ、命を縮めよ！　二の辭儀にわ柔和を捨てよ！　三の辭儀にわ、才智を奪わん！四の辭儀にわ、親愛を破れ！　五の辭儀にわ五體損ねん。』

と、しわがれた聲で言つて、ようやくびんを渡したまゝ、どこえか行つてしまいました。

そこで又松子わ、びんを受け取つて行きかけましたが、なぜか體が急に疲れて、もう足もあるけなくなりました。

すると又さつきの女神が、

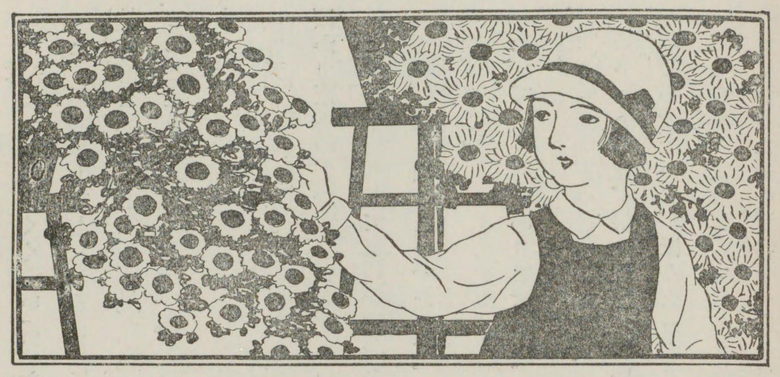
『許す〳〵！　その水飲めや！』

と、どこかで教えてくれましたから、そのまゝびんの口を取つて、一口飲んで見ましたら、にわかに元氣が百倍して來ました。

そこで急いで家え歸つて、妹の藤子にこれを飲ますと、不思議やたちまち口も利ければ、ものもよくわかるようになりました。

野菊物語

上　墓參のかえり



墓參のかえり

『多根子や！　もうお仕度ができたら、そろ〳〵出かけましようかネ。』

と、障子の外から聲をかけたのわ、母の繼子でありました。

繼子わ四十を越したばかりですが、髪わもう切り下げにした、品のよい未亡人です。細かい縞セルの單衣の上に、黒の紋羽二重の被布をきて、手にわ小さな珠數をかけております。

多根子と聲をかけられた娘わ、

『ハイ、只今……』

と、返事わしましたが、まだ姿わ見せません。

『お墓まいりにゆくくらいに、おめかしをしないだつて可いぢやないかネ。』

と、母わ少したしなめるようにいつて、待ち遠そうに室をのぞくと、とたんに多根子わようやく鏡の前を立ちましたが、見れば顔わ書いたようにぬられて、リボンも切りたての巾廣、着物もあれこれと選つた證據わ、たんすのひきだしが三ケ所もあけてあつて、帯も二本ばかり出しかけてあります。

『まア、園遊會えでも行くようだねエ。あつちの帯にすりやアいゝのに……そりやアこの間できたばかりだもの、お墓まいりぐらいにもつたいないじぢないか。』

と、繼子わ又しても眉を寄せようとしますが、多根子わかえつてくちびるをそらして。

『アラ、そんなこといつたつて、お墓まいりだからわざとこれをしたんですワ。』

『なぜエ！』

『だつてそうぢやありませんか。この帯わ父さま御存じないんでしよう。だから私お目にかけに行くの。』

『ホ、、、、まア好い理窟がついたねエ。』

『理窟ぢやないワ、ほんとうのことだワ。』

『でもお前のように、できると側から着てしまつちやア、いくらあつたつて追付かないねエ。』

『でも着るための着物ぢやありませんか。着物わ人間の着るためのもの、決してたんすの詰め物ぢやないことよ。』

『またきまりがはじまつたよ。理窟ぢやアかなわない。よけりやアさア行こうぢやないか。』

『ハア、もうとうにいゝんだワ。』

と、多根子わ勝ちほこつた軍鶏のように、ツンとして室をでましたが、又思いだしたか引きかえして、戸棚の中から新調の洋傘をとりだし、そのくせ唐紙もたんすも閉めず、もう一度鏡の前に立つて、くるりとまわつて帯の結び目まであらためて、さてようやく母の側え來ました。

親子わ連れだつて家を出て、途中で花を買いましたが、はじめそれを持つた多根子わ、着物を汚すのが氣遣わしさに、それさえ母に持たせてしまいます。

墓所わ町外れの大寺の境内、そこにわ父も眠つておれば、三つの歳に先だゝれた兄や、わらの上でわかれた妹が、石になつているのでした。

繼子わそれ等の石の前に、一々花を供えてわ、手をあわせて念じております。多根子もまた同じように、一々禮拜わしましたが、裾が地に敷きかけるのを見てわ、届めた膝をすぐ立てゝしまい、垣によせかけた洋傘が、バタリと倒れた音をきいてわ、下げた頭をふりむけてしまいます。

やがておまいりがすみますと、母わ、まだ少し時間があるから、ちよつと方丈さんにあつてゆこうかといゝましたが、娘わ、そんな暇があるなる、歸りに公園を散歩しましようといゝ出して、つ

て、二人わ境内をぬけて、裏の小川の岸を、しづかに公園の方えとたどりました。
公園というのわ舊城内の事で、春わ櫻の名所ですが、秋わ紅葉をほこる前に、また萩といふ呼び物があるのです。
『私わほんとに萩が好きだよ。しおらしくて好い花ぢやないか。』
と、母わやさしく話しかけますが、多根子わすげなくうち消して、
『だつて萩わ陰氣ぢやありませんか。おんなし秋咲くものなら、私菊の方がよつぽど好いと思うワ。』
『それわ菊とわくらべものにやアなるまいよ。だがおなし菊でも、私やアいろ〳〵に作つたのより野菊の方が可愛くつて好きだよ。』
『野菊？　……あれもなんだか陰氣ですわネ。でも私きらいぢやないワ。』
と、こんな事を話しながら行く中に、路ばたのちがやの間から、ヒヨロ〳〵とのびた野菊が、ちようど一輪花を咲かせていました。
見ると多根子わ立ちどまつて、
『アラ、おつかさんの好きな花が！』
と、いつてもう手を出しました。繼子もつゞいてそれを見つけて、
『ア、ほんに……だがお前少しお待ち！　せつかく咲いてるんだから、取らずにそのまゝにしておき置きな！』
『でも、お母さんが好きぢやありませんか。』
『私わちようどそういうところに、そういう風に咲いたところが、一番好いと思うんだよ。』
『ぢやアこのまゝにしておいて、毎日こゝえ見に來ようと云うの？』
『まさかそうでもないけども……』
と、しばらく眺めたばかりで、そのまゝ行き過ぎようとすると、まだ三足とも進まない中に、後から聲がして、
『もしツ！』
と、呼ぶ者があります。
驚いて振りむきましたら、これわまだ十五六の、ちようど多根子とおなじくらいな小娘。——たゞしみなりもみすぼらしければ、顏もひどくやつれたのが、しよんぼり立つているのでした。
『まアいやだ！　乞食なのよ。』
と、多根子わ母の袂をひいて、先えとうながしましたけれども、繼子わかえつてその小娘の方え、歩みよつて聲をかけ、
『オヽ、よく來ておくれだつたねエ。』
と、なにもかものみこみ顏です。が、多根子にわさつぱりわかりません。

『お母さん！　なんなの、あれ？』

と、小聲で聞くと、繼子わ手みじかに、

『わけわ家えかえつてから話すよ。この娘わお前のお相手に、今日から家え來てもらうのだよ。』

『だつて、きたならしいぢやありませんか。』

『それわ心配する事わない。』

と、母わどこまでもひとり承知して、さて公園に來ましたが、今日を晴れと着かざつた、令嬢姿の多根子の後から、塵塚からでも引出したような、ぼろずくめの田舍びた小娘、あまりつり合が不思議なので、往來の者が立止まつてわ見ます。それが又多根子にわ、少からず興をそぐので、はてわ遊山も好いほどにして、急いで家えかえりました。

ところが家えかえつてから、まづ風呂にいれて、髪もすかせ、さてその着物まで改めさせて見ると、こわいかにさつきの田舍娘わ、まるで別人と思われるくらい、上品で、美しい、りつぱな小娘になりました。

『それ御覽、これならお前のお友達にしても、けしてはづかしいこともないだろう。』

と、母わさも得意そうに云います。

『えゝ、すつかり變りましたことねエ。』

と、多根子もやゝ滿足そうに見えます。けれどもまた心の中にわ、どうやら不安の念がうかびました。

中窓の聲

墓まいりの歸りから親子の連れてかえつてきた、みすぼらしい田舍の小娘わ、一たいどこの何者でしよう？　母の繼子わ萬事を承知しているようですが、娘の多根子にわ一向譯がわからないので す。で、多根子わ、母にそつと聞いて見ますと、

『ナニあれわネ、かねく〳〵ある人から頼まれていたので、それで家え引き取つてやるんだよ。名わお露というんだが、親もない、親類もない、ほんとに氣の毒な子なのだから、お前もよく可愛がつておやり、そうして年頃もちようど好し、容貌も悪くわないんだから、お前のお相手にわ持つてこいぢやないか。』

と、云います。多根子わようやくふにおちまして、

『まア、そんなら孤兒なんですネ。可哀そうなのねエ。でも、そういう身分の者にわ、よく氣のひがんだのや、手くせの悪いのがあるから、よく氣をつけなけりやいけないつて、この間も修身の時間に、先生がおつしやいましてよ。』

『あら、それわそういう事があるかも知れない。しかしよしんばそういう子でも、一たん引き取つてやつた以上わ、こちらでよく教育して、悪いくせならなおしてもやり、善いところわなお引きた

てゝやるようにすれば可いぢやないか。』

『えゝ、……それわそうですけれども……それぢやアかえつてこつちから、お相手になつてつとめてやるようなものネ？』

『それもそうか知れないけども、『人のふり見てわがふりなおせ！』と、いふ事もあるから、そうして相手になつていて、先方の氣をつけてやるという事が、またこつちのためになるんだよ。

『まア……そんなら仕方がないけども……』

と、はてわ多根子もだまつてしまいましたが、顔にわまだ落ちつかない色が見えて、せつかくの母の心盡しも、腹の底にわ不平らしい様子です。

それというのも、このお露が、途中で見た時の汚さにひきかえて、家え入れてからの美しさが、常からたのんでいる自分の容貌より、どうやらまさつて見えるからで、それを又母の、まるで自分の手柄のように、誇りもすれば吹聽もするのが、いよ〳〵娘の氣に入らないのです。

が、當人のお露もいつこうそれ等に無頓着で、たゞ自分の身を救われた、その恩返しと思つてか、主人大切にたち働き、多根子にもまめに仕えるので、さすがの多根子も面と向つてわ、これに苦い顏わ見せられませんでした。

ところがちようど半月目のことです。多根子わ同窓會の催しがあつて、ある邸の園遊會えでました。いつもなら母と一しよに、むしろ母をお供のようにして、伊達をほこりに出るのですが、今わお露という小間使もできたので、今度わそれを連れていつたのです。

友染の小袖に、錦の帶、厚化粧に、大巾のリボン！　いわゆる滿艦飾に着かざつた、この日の多根子のいでたちわ、築山の紅葉、花壇の菊より、正に人目をひくべく見えました。いや、自分でもそれを期していたのでしょう。

それにまたどうしたものか、來る程の者、會う程の人が、多根子にあいさつをする側から、視線わ常にその後の、お露の上にのみ注ぎかけて、行き過ぎてまでも見送つてわ、

『まアほんとに好い娘だこと！』

と、感嘆の聲をもらすのが、一度ならず二度三度、多根子の耳にはいります。

多根子わ面白くありません。いつそ離れていた方がと、用にかこつけてお露を遠ざけ、又わ自分から避けるように、間をへだてゝ身をおくと、人わ皆お露の方ばかり見て、たま〳〵自分を追うて來る者も、

『ねエ多根子さん！　あの小間使どこから來たの、ほんとにかわいゝワねエ。綺麗ですわねエ。だからあなたも御自慢に、わざ〳〵連れていらつしたんでしよう。』

などゝ、當てこするような事を云つて、又しても苦笑いをさせるのです。

多根子わもうたまりかねて、まだ面白い餘興のあるのを、中途から切りあげて家えかえり、母にわ少し氣分が悪いといつて、自分の居間えはいつたきり、じつと考え込んでしまいました。母が案

じてようすを見に來ても、
『いゝえ、何でもないのです。しばらくじつとしていりや可いんです。だからうつちやつておいて下ださい。』
と、云つて早く出てもらい、お露が氣をもんで尋ねに來れば、
『用があれば呼ぶからいゝよ。』
と、すげなく追い戻してしまいます。
その中にふと思いつきましたのわ、世にも恐ろしいたくみでした。
『なにゝしてもあのお露の、容貌のよすぎるのがいま〳〵しい。それにわどうしてもあの女の、急に相の變わるような、よい工夫わあるまいか。……それにわいつぞや聞いたこともある。支那のなんとかいふ國でわ、むかし王昭君という美人を出したところが、かえつてその美人が薄命だつたので、その後この國の女にうまれたものわ、皆美人にならないように、幼い時分にその顏を、燒ごて燒くとかいう話だ。……顏の相を變えるのにわ、火傷をさせるのが一番だ。さうだ、それでわ今夜の中に……』
と、こう考えた多根子わ、わざと宵の間わきげんをなおして、さあらぬていに見せておき、やがて皆の寢しづまつた頃、そつと床をぬけ出して、お露の寢間えと忍んで行きました。
もとよりその手にわ、手工の時に使うこてが、そつと隱して持たれております。

多根子わ息を殺して、お露の寢顏をのぞいて見ますと、たゞさえつみのないお露わ、そうした恐ろしいのろいの鬼が、自分の枕元にせまるとも知らず、星のような目を閉じて、じつと深くねむつております。
『ちようど好い、今の間に……』
と、多根子わありあわせた火鉢を引きよせ、埋み火の中にこてを埋めて、十分燒きのまわつたのを、そつと引き出して膝をすりよせ、今しも花を欺くばかりの、お露のほうえ押しあてようとするとも、なにを夢みたかお露の眉わ、ビリ〳〵と輕く動いて、目わなお閉じたまゝ、ふと寢返りをうちました。
たゞさえ心のとがめて、胸わ速鐘をうつていた多根子、このようすにギヨツとして、急いでこてを後えかくすと、それがまたどう狂つたか、我と我が右の足の、小指のさきをヂリ〳〵と燒き、
『ア、ア、熱い〳〵！』
思わず口に出かけるのを、あわてゝ自分で口をおさえ、そのまゝ部屋え逃げこんで、机に取りついてホツト一息、足の指をさすりながら、
『ア、いま〳〵しい。』
と、つぶやいて、まだ熱のあるこてを、疊の上に投げすてますと、途端に窓がスウとあいて、
『お嬢さん！　それぢやアだめだ。私が好い事教えてあげましよう。』

と、思いがけない聲がしました。

下逆の鏡

窓の外からかけられた聲に、多根子わびつくりしてふりむきますと、これわ又思いもかけず、どこの誰ともわからない、ばあさんが一人のぞきながら、ニヤリ〳〵笑つております。多根子わ氣味が悪くなつて、急いで逃げ出そうとしますと、ばあさんわ又呼びとめて、

『コレ〳〵、なにも逃げだす事わない。逃げずに一しよに來るならば、好い事を教えてあげますよ。』

と、云つてわ手で招きます。招かれると、不思議なもので、初めわいやだと思つたばあさんが、妙に懐かしく思われて、われ知らずその側えすゝみより、

『好いことツて、どんなこと？』

と、聲さえやさしく尋ねました。するとばあさんわ、もう多根子の手を取つて、

『あなたを日本一の容貌好しにしてあげましょう。』

と、いう中にもう自分の體わ、いつか室から脫けだして、しばらくちうを飛んだように思うと、やがて見事な御殿の前え出ました。ばあさんわ見かえつて、

『多根子さん！　こゝが私の家ですよ。遠慮せずにはいつてください！』

と、云いながら、なお手を引きますから、引かれるまゝにはいつて行きますと、間もなくりつぱな廣間え來ました。ばあさんわ立ちどまつて、

『さ、あれを御覽なさい！　あそこにあるのわ日本中の、女の容貌の鏡です。中でお氣にいつたのを、あなたに一面あげましよう。その鏡さえ持つておれば、あなたわ一生容貌よし、日本一の容貌よし、衣通姫でも小町でも、けつして及ぶことでわない。ましてあのお露などわ、ぼたんの前の野菊も同然、さらに見る影もありません。』

と、云われるともう多根子わ、うれしさにゾク〳〵しながら、今ばあさんの指さす方を見ますと、むこうの壁の右から左え、同じような圓い鏡が、ずつと一列にかけてあつて、その鏡の下にわ、『家內一』『親類一』『學校一』『町內一』『郡內一』『國內一』はてわ『日本一。』と、それ〴〵札がついております。

これわ云うまでもありません。その鏡にうつる顏の、容貌の度合を示した札で、家內一というのわ、家內中での一番の美人、學校一とあるのわ、學校中での一番の容貌と、だん〴〵容貌が進んできて、日本一の美しさまで、ちやんと順をおつてかけてあるのです。

と、多根子も悟りましたから、まづ試みに一番はしの『家內一』のところえ來て、自分の顏をうつして見ました。

すると、またどうしたものか、自分の顏わ少しもうつらず、かえつて憎いお露の顏と、野菊の花

が一輪、さもあり〳〵と見えますから、ハツト思つてそこを退いて、急いで次の、『親類一』のところへ行ろえ來て、もう一度のぞいて見ましたら、こゝにわぼたんが咲いている側に、自分の平生の顔が、そつくり面にうつりました。

さてわ私わ親類一か。そんなら學校でも一番であるはずと、次の『學校一』の鏡えきますと、この鏡にも自分の姿わ、ぼたんの花と一しよに、寸分たがわずうつります。

これにやゝ力を得て、更に『町内一』の前に立ちますと、これにも顏わ鮮かにうつり、つゞいて『郡内一』『國内一』まで、試しに一度づゝのぞいて見ますのに、自分の顏をうつす度に、鏡の中にあらわれますから、さすがにまた得意になつて、最後の『日本一』の鏡の前に、大膽にもヌツと立つて見ました。

ところがまたこの鏡にわ、さつきのお露の顏がうつゝて、そして野菊の花ばかり！　自分の影わさらにうつりません。と見るとまた多根子わ、ねたましさが燃えたつて、思わず鏡をうとうとする時、後からばあさんが來て、

『コレ〳〵、またしてもそのように、短氣をおこすからいけません。なにもあのお露の顏に、きずをつけて見たところが、あなたの容貌が好くなるでわなし、つまらん事でわありませんか。』

『でもやつぱり日本一わ、あのお露だから私いやだワ。』

『いかにもお露が日本一です。それにまた家内一、あなたがそのまゝでいる間わ、日本一わ愚なこと、家にいてさえあのお露に、一の容貌を取られてしまうのです。そのかわりこうしてあげれば、ソレ、もうあなたが日本一！　家にいても家内一です。試しにもう一度見て御覽なさい。』

と、いゝながらばあさんわ、しわだらけの手でもつて、多根子の顏を下の方から、逆にサラリと撫でまして、また鏡の前え押しやりました。

その顏を撫でられる時、多根子わなんともいわれない、いやな臭氣をかゞされて、グツと息も止まるように思いましたが、鏡を見ろといわれたので、急いでその前え來て見ますと、こわいかに、今度わ日本一の鏡の面に、我ながら見とれるような、綺麗な女がうつゝていて、それが又よく見ると、自分に違いありません。

『まアこれが私なの？』

と、半ばわ疑いながら聞きますと、ばあさんわニヤリと笑いながら、しきりに頭をうなづかせております。

『アラうれしい！　ほんとにそうなの？』

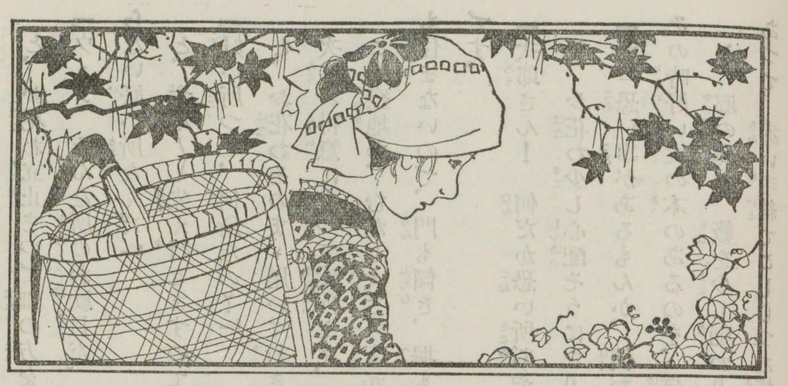
と、次に國内一を見ますと、こゝでわかえつてお露の顏がうつゝて、さつきと少しもかわりわありませんが、どうやら今度わ野菊もしおれて、大分見劣りがするようです。

そこで、郡内一から、親類一まで、一々のぞいて見ますのに、ちようどさつきとわ反對で、これらにわ皆お露の顏が、多根子の代りに寫つていて、そのかわりにわ最後の一面『家内一』のところ

え來て、『日本一』とおなじ姿に、多根子がちやんとうつりました。
『どうですお嬢さん！　それでお露に勝ちましたろう。』
『エヽ、勝つたワ〳〵、勝ちましたワ。これで私も安心だワ。』
『そんならもうあのお露を、ねたんだり憎んだりせず、可愛がつておやんなさい！』
『エヽ、もうなにも憎むことわないワ。』
『さ、そう聞けば私も安心！　ドレ、それでわ約束どうり、この鏡をあげましようネ。』
と、ばあさんわ手をのばして、『日本一』の鏡をはづし。これを多根子に渡しますと、多根子わ喜んで受けとりましたが、とてもの事に家内一の方も、ついでに貰つて行こうと思つて、
『おばあさんこの方も頂戴な！』
と、云いますと、ばあさんわ眞顏になつて、
『日本一になつていれば、家内一わ云わずとしれてるぢやありませんか。』
『でもお露の居る間わ、あれがないと負けますから……。』
と、みなまで聞かずばあさんわ、
『まだそんな事いゝますか。』
と、さつきとわ打つて變つた、恐い眼をしてにらめつけました。
にらまれると、多根子の眼わ、たちまちフラ〳〵とくらんでしまつて、しばらくわ正氣もないよ

うでしたが、やつとの事で我にかえると、いつの間にか自分の身わ、もとの自分の居間にいて、窓わちやんとしまつて居ります。さてわ夢かと、氣がつきましたが、それにしても氣になりますので急いで自分の鏡をだして、それにうつして見ましたら、こわいかに自分の顏わ、いつの間にかすつかり變つて、今わ二タ目と見られないくらい……日本一わ日本一でも、それわしりからのことになつてしまいました。
『あゝ、どうしよう。悔しい〳〵。私　魔物にだまされた。』
と、大聲に泣きたてますと、その聲をきゝつけて、母もお露もかけてきまして、
『コレ、多根や！　どうしたのだ？』
『おぢようさま、どう遊ばしました？』
と、右左からなぐさめながら、その顏をのぞきこみましたが、別に驚くようすもありません。けれども多根子わ氣づかわしさに、
『私、こんな顏にされちやつて……。』
と、云うのをかえつていぶかりながら、
『どんな顏にもなつてわいない。常のお前のようぢやないか。ねエお露！』
『ほんとにさようでございますとも、まあこれで御覽遊ばせ！』
と、お露が取つて渡してくれた時、恐々ながらもゝう一度見ましたら、今度わ少しも變りのない、

自分の顔わうつりましたが、たゞ不思議なのわその側にわ、牡丹のかわりに野菊がうつゝていました。そして更に不思議な事にわ、この野菊の花をみると、自分わまるでうまれ變つたように、すつかり心が清々として、もう容貌の事なぞわ氣にせず、心底から母にわすなおに、お露にわ優しくする氣になりました。



桃の古井戸

三

月の溫い日の事でした。お花わお節句の花を取りに出ようと思つて、弟の次郎をさそいました。

お節句の花と云えば桃です。その桃わ裏の畑え行くと咲いて居るのです。

『次郎さん！　桃取りに行かないか？』

『行こう〳〵！　僕わ好い所知つてるんだ。』

と、二人わ家を出ましたが、次郎わ元氣よく先に立つて、表の方え行きますから、

『次郎さん！　花わ此方よ。』

と、お花わ立止まつて畑の方をさしましたが、
『ウヽン、そんな所のわ駄目だ。もつと好い〳〵花があるんだよ。僕、昨日見といたんだ。誰も知らない好い所なんだ。』
と、ずん〳〵先え行きますので、
『好い所つて、何所なの？』
と、お花わそのまゝ尾いて行きました。
次郎わ得意になつて案内して、やがてやつて来ましたのわ、廣い空地の草原でした。
この空地わ、むかし大きな家があつたのですが、それが取拂いになつてしまつてから、今だに誰も住まないので、門も傾き、塀も倒れて、邸中わ草の生え放題、ひどく荒れたまゝに成つて居るのです。
『次郎さん！　何だか恐い所ぢやないの。』
と、お花わ少し心配そうになりましたが、次郎わ頭を振つて、
『ナニ恐い事があるもんか。僕わ昨日お友達と來たんだ。球投したり、鬼事したり面白かつたぜ。その時好い桃の木のあるのを、僕ちやんと見といたんだ。此方にあるんだ。おいでよ〳〵！』
と、邸の奥の、籔を少し廻わりますと、なるほどその籔の端の、古井戸の側に、大きな桃の木があつて、赤い毛絲でこしらつた様な大輪の花が、見事に咲いて居る所え出ました。

『まア綺麗だ！』
と、後に居るお花も、思わず口走りますと、
『ネ、綺麗だろう。』
と、先に立つた次郎わ、さも自分の物の様に、自慢して指さしました。
『まア、私そんな花わ見た事無いワ。やつぱり桃でしようか？』
『桃だとも、〳〵！』
『でも、取つたら悪いんぢやないの？』
『なアに關うもんか。どうせ空地なんだもの。ぬしなんか無いんだから關うもんか。』
『そんなら取つて行きましよう。』
とわ云いましたが、生憎木が大きいので、花わ皆高い所に咲いて居て、子供にわ手が届きません。
『困るワねエ。私にや取れないワ。』
お花が當惑して云いますと、次郎わ無造作に、
『なアに姉さん！　譯わ無いよ。此所に乗りや直ぐ届くぢやないか。』
と、もう井桁に足をかけようとします。
なるほどその古井戸の桁わ、丁度桃の木の下にあつて、踏臺にわ持つて來いですが、何しろ古くなつて腐つて居ますから、一寸踏んでも崩れそうなので、危くてとても乗れません。

『駄目よ、次郎さん！　そんな所え乗つて落ちたら大變よ。』
『大丈夫なんだよ。井戸の中ア埋まつてるんだから、落ちたつて直ぐあがれるんだ？』
「どれ？」
と、心元無さそうに覗き込みますと、なるほど井戸にわ水も無くなつて居て、その底も淺く、木の葉や竹の葉が一杯つまつて居ますから、お花も少々安心しまして、
『ア、これなら落ちても大丈夫だワねエ。けれども怪我するといけない事よ。』
「なアに、怪我なんかするもんか。」
と、次郎わとう〳〵井桁に乗りました。
乗ると手わ樂に屆きますから、
『姉さん！　何の枝？』
と、聞きます。
『その此方え出てる枝よ？　それが丁度好いぢやないの。』
「よし、それ折つてやろう。」
と、次郎わ手をその枝にかけて、今にもへし折ろうとしますと、何所でか急に大人の聲がして、
『誰だア！』
と、叱る者があります。

中

お花わ自分の井戸え落ちたより驚きました。そして自分の頭から水でも浴びせられた様に、ゾウツとして立ちすくみました。
けれども默つて居る所でわありません。
やがて大きな聲をあげて、
『大變だア〳〵！　誰か來てくださいよう！』
と、呼びました。
すると、それにわ誰も來てくれませんが、かえつて井戸の底の方で、
『オ、よく來た、よく來た、よく來ておくれだ。』
と、女の聲で云うのが聞えます。
お花わ不思議に思いまして、じつと底を見込みますと、今まで眞闇だつた所が、急に又明るくな不意を食つて次郎わ、思わず手を放しますと、その機みにまた足がすべつて、グシヤリと崩れた井桁と一所に、古井戸の中え眞逆様！
はツと思つてお花わ、驚いて中を覗きますと、こわ如何に！　先刻わ手も屆きそうだつた底が、深く深く成つてしまつて、今落ちたばかりの次郎の姿が、少しも見えないでわありませんか。

つて來ましたが、その時見ると井戸の中が、すつかり立派な御殿に成つて居て、そしてこの御殿の中から、まるで龍宮の乙姫樣の樣な、綺麗な女が大勢出て來て、たつた一人の次郎を取りまいて、さも嬉しそうに話しかけて居るのが、まるで活動寫眞の樣に見えます。

『まア次郎さん！』

と、思わず上から聲をかけました。

けれども次郎にわ聞えないかして、少しも此方をふりむかず、その女の方を向いて、何か話して居る樣子が、自分もさも面白そうです。

『次郎さん！　次郎さん！　其所わ一體何所なのよう？』

と、聞いても一向返事わしません。

『どうしてそんな所え行つたのよう？』

と、尋ねてもまだ答えません。

その中に次郎わ、その大勢の女に取りまかれ、双方の手を取られながら、段々奥の方え行つてしまいましたが、そのまゝ又暗くなつて、やがて見えなくなつてしまいました。

『まア何うしたんだろう？』

と、見送つて居ると、何所からか音樂の聲が聞えて來て、一旦暗くなつた所が、また段々明るくなつたかと思うと、今度わ御殿の大廣間が見えて來て、其所に次郎わ、まるで御客樣の樣に、上座に坐えられて居ると、其前にわ御馳走が山の樣に出て居て、下物にわ大勢の少女が、長い袖をひるがえして舞をまつて居る所が、またあり〳〵と見えて來ました。

それを見たお花わ、もう羨ましくてなりません。何うかして、自分も、はやく其所え行き度くなりました。

で、また聲をかけて、

『次郎さアん！　私も其所え行つてもよくつて？』

と、聞きましたが、まだ何とも返事がありません。

けれども別に悪いと云つて、止める者も無い樣ですから、お花わとう〳〵思いきつて、自分も井戸の中え飛び込もうとしました。

が、又氣がついて見ると、井戸側わ古く腐つて居ます。こんな汚らしい井戸の中に、あんな立派な御殿があろうとわ、何うしても思われませんから、さてわ夢でも見て居るのでわ無いかと、念の爲めに四邊を見まわしましたが、四邊の景色わ以前の通りで、側の大輪の桃の花わ、先刻の所に咲いて居ります。

さてわやつぱり夢でも無いかと、もう一度井戸の底を覗きますと、底にわ又弟の次郎が、さも面白そうに浮かれ出して、少女と一所に躍つて居るでわありませんか。

お花わもうたまらなくなつて、

『次郎さん、待つといで！』

と、云うが速いか、いきなり其所え飛び込みました。

……暫らくわ夢中でした。

所がふと氣がついて見ますと、自分も其の御殿の中に居ますから、さア次郎さんの所えと思いますのに、その次郎さんわつい目の前に居ながら、何うしたものだか足が進みません。仕方が無いから聲をかけて呼んでも、まだそれが聞えないと見えて、先方でわ少しも氣が付かない様です。

やつとの事で居去りよつて、其側え行こうとすると、忽ちゴツンと頭を打つ者があります。けれども誰も居ない様ですから、ハテ變だと思いながら、手を出してさすつて見ましたら、こわ如何に！　自分と次郎との間に、大きな硝子が立てきつてありました。

下

目にわ見えても其所えわ行かれません。大きな硝子にさえぎられたお花わ、悔しそうにその硝子を叩きますと、今度わ奥から大勢の少女が出て來て、

『さア次郎さんを胴揚げにしましよう。さアみんな手をお貸しなさい。』

と、云いながらよつてたかつて、次郎一人を抱きあげますと、まるで紙風船でも玩弄にする様に

さも輕々とつきあげるでわありませんか。

『可哀そうに、あんなにされゝば眼がまわつてしまうワ。』

と、お花わ氣が氣でわありません。

『ちよいと〳〵！　そんな酷い目にあわさないでちようだい！』

と、大聲で頼みましたが、先方えわ少しも聞えればこそ。果わトン〳〵はづませながら、面白そうに浮かれ立つて、そのまゝ奥えと連れて行つてしまいました。

『ア、何うしよう？　仕樣が無いワねエ。』

と、お花わ泣きそうになつて居ります。

と、不意に後の方で、

『モシ〳〵お嬢さん！　そんなに弟が助け度けりやア、私のお願を聞いて下さいますか。』

と、云う者があります。誰かと思つてふりむいて見ましたら、それわ一匹の蛞蝓でありました。

『オヤ、今のわお前なの？』

『エ、私です。』

と、蛞蝓わ角を長く伸ばしながら、やがて前の方え這つてまわり、

『貴嬢が私を助けて下だされば、私も貴嬢を助けてあげます。』

と、云います。

『ハア、好いとも、助けてあげるから、私も助けてあの弟に會わしておくれ！』

『でわ何卒あれを退治て下ださい。』

と、云いながら振りむいて、角で指した方を見ますと、其所にわ人間でも呑まれさうな、恐ろしく大きな墓が、大きな口をあけて構えて居て、今にも蛞蝓を吸い込もうとして居ます。

お花わギヨツとして思わず後退しました。が、又よく見直しますと、その墓の口からわ、別に白い氣が立つて居て、そしてその白い氣の中に、先刻からの御殿が建つて居る様に見えます。

何だか不思議な様子に、お花わまだ默つて居ますと、蛞蝓わにじりよつて、

『御覽なさい！　あの大墓を！　彼奴がこの古井戸の主なのです。それで蛇にわ弱いのですが、私にわまた強いので、私達の仲間の者を、此間から何遍ともなく吸い込んでわ、自分の餌食にして居るのです。それにわ私共の仲間が、あの桃の花の香に引かれて、露を吸いにのぼつて行く所を、井戸の中から又吸い込むのです。私も實わ先刻その枝に這つて居た所を、又吸い込まれてしまつたのですが、丁度その時、次郎さんも、あの桃の花を取ろうとして、一所に中え落込んだので、墓わその方に氣を取られて、今まで食べられずに居たのです。ですから何卒貴孃の力で、あの墓を退治て下ださい。そうすれば私が助かる斗りか、次郎さんも屹度出て來られます。』

と、委しく話して聞かせました。

それを聞くとお花わ、漸く合點が行きまして、さてわ次郎も桃の花に釣られて、この墓の魔力に引かれたかと、思うと急に勇氣が出ました。

が敵手わ恐ろしい大墓、うつかり手も出されませんから、しばらく逡巡つて居ましたが、流石に怜悧な子でしたので、直ぐに計略を考えました。そしていきなり進んで行つて、

『ヤイこの蛙め！　お前わ蛞蝓わいぢめても、蛇にわとてもかなうまい。所が私わ蛇の年だよ。ソレ、この指が蛇だ〳〵！』

と、蟲拳の時の様に、食指を蛇にして向いますと、流石の大墓も驚いて、アツと云いながら逃げようとします。所をいきなり捉まえて、その蛇にした食指で、ビシ〳〵叩いてやりましたら、まるで眞個の蛇に會つた様に、墓わ忽ち小さくなつて、土の中えと消え込んでしまいました。

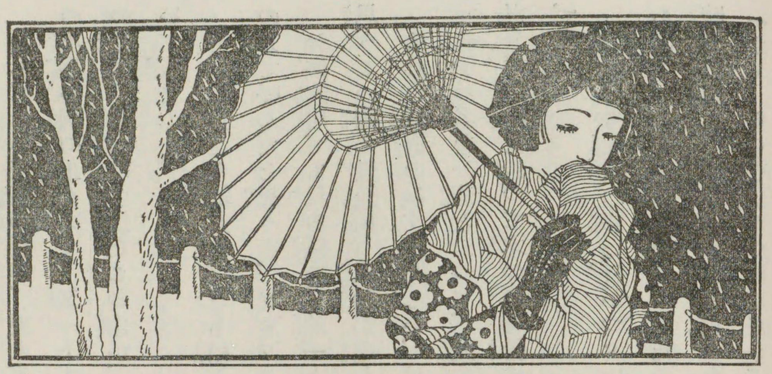
すると不思議や今迄の御殿も、同じく夢の様に消えてしまいましたが、只弟の次郎斗りわ、まるで夢のさめた人の様に、その中にボンヤリ立つて居ります。

『オイ、次郎さん！』

『ア、姉さん！』

互いに聲をかけてより添つた時わ、もう硝子も何もなく、二人わ井桁の側に立つて居ました。

念の爲めに中を覗きましたら、先刻の少女わ一人も見えませんでしたが、その代りに桃の花が、一杯散り込んで居りました。



蕾が岡

一　蝶の巴

春の神わうらゝかな袂を振つて、草木の眠を覺ましに來ました。その神の袂の中から、花瓣の様な物がハラ〳〵ハラと、三つばかりこぼれたと思つたら、それが三匹の蝶になつて、更にヒラ〳〵と空に舞い上がりました。

見ると、一匹わ白く、一匹わ黄く、そして今一匹わ赤い色をして居りました。三匹わ巴の様に、しばらく仲よく戯れ合つて居る中、いつか二匹が一所になつて、殘る一匹わ何うかすると、巴の輪から追いのけられて居ました。仲の好いのわ白と黄で、赤いのわ兎角別物になつて居るのです。

そしてこの三匹の蝶が、或わ高く、或わ低く、舞いつ狂いつ行きましたが、やがて廣い野原の中の小高い岡の上え來て、又一トまわり狂いましたら、今まで冬の神に窘められて、まるで老人の頭の様に、素枯れて居たこの山が、さつと淺い綠の色を、一刷毛かけられた様になつて、急に元氣づいて來ました。

それを見ると蝶共わ、さも嬉し氣に又一ト廻り、舞い狂つて居りましたが、其中に春の神が、山の方で呼んだと思うと、ソヨソヨと來る風に誘われて、其儘何所えか行つてしまいました。

お伽芝居でも見る様な、此一トくさりが濟んでから、凡そ二三時間經つてからの事です。晝かと思うこの岡の景色に、人物が現われました。

それわ風俗のみすぼらしい、けれども顏容のかわゆらしい、十三四の女の子でした。

此子わ名をお若と云つて、此先の村の百姓の子でしたが、いつもわこの野え來て、草の花を摘んだり、又山え行つて木の果を拾つたりして、それを町え賣りに行つてわ、生計の足しにして居たのです。

けれども此頃わ寒い日がつゞいて、野にわ草の花らしい物も見えず、山に木の果の影も殘りませんので、久しく出て來なかつたのですが、今朝丁度朝日の光が、自家の破れ障子にさした時、その障子の紙に、蝶の影が一つ寫つたのを見て、

『オヽ、もう春になつたんだネ。でわ花が咲き出すかもしれない。』

と、やがて例の花籠をもつて、この野えと出て來たのでした。

が、又思い出しまして、

『先刻障子に寫つた蝶わ、何所え行つてしまつたろう。』

と、四邊を見まわしますと、丁度自分の行く手の空に、ヒラヒラと舞つて居る者があります。而もそれわ白と黃色の、二匹の蝶々でありました。

『オヤ、あの影わ一つだつたと思つたのに、やつぱり二匹だつたのか知ら？　そんなら寫つたのわ何方だろう？　それともあの時わ一匹だつたのが、途中でお友達に會つたのか知らん？　……あゝお友達？　ほんとにお友達わ好いもんだねエ。あゝして蝶でさえ、お友達があればこそ、面白そうに飛んでまわる事が出來る。それに私わ何うだろう？　この廣い世界に、お友達つてものわ一人もありやしない。……此間まで學校え上つてたけど、私の樣な貧乏人の子とわ、誰も遊んでくれる者がないんですもの。近所に子供が居ないぢやないけども、家でわ又家のお仕事を、始終お手傳しなけりや成らないから、そんな人と遊んでる間もないんだから……。私だつて、何も遊び度いんぢやないけども、心から種々な話の出來る、お友達が欲しいと思うワ。そうしたらいくら貧乏して、毎日働いて計り居ても、どんなに張合があるか知れないものだねエ。』

と、こんな事を考えると、つい足も重くなりましたが、又氣を取り直して、

『イヤ〳〵、こんな愚痴つぽい事わ止しましよう。私にやアやつぱりお友達があるワ。あの岡え行けば花が咲いてる。林え行けば鳥が鳴いてる。その花がお友達だワ、その鳥がお友達だワ。ドレ、はやく行つてお友達に會いましよう。』

と、いそ〳〵岡え來かゝりましたが、氣になるので又先刻の蝶の、何所え行つたかを見ようとしますと、丁度その二匹が、自分の後の方え廻つたので、それにつれて振り向きましたら、其所に又人影が、同じく二つ見えました。

揃いも揃つた綺麗な小娘、綺麗な衣服に綺麗な頭飾、まるで人形が動き出した様です。お若わそれと見ると、何だか自分が恥かしくなつて、路を除けて居りますと、その側を二人わ、さも仲好さそうに話しながら來て、お若の居るにさえ氣の付かない様でした。よく見れば其一人わ、村でも一番の富豪の娘で、玉子と云うのでありましたから、お若わ丁寧に會釋して、

『お嬢様！　今日わ！』

その聲に玉子の方でも、はじめて氣がついた様に、此方を輕く見かえりましたが、

『オヤ、お若なの？』

と、云うとまた友達もふりむいて、何か小聲で囁きましたが、それわこのお若の事を、手短に話して聞かせたのでしよう。

するとその友達わ、一々點頭いて居りましたが、何故か妙に眉を皺めて、玉子の耳に口を寄せたと思うと、玉子も同じ様に顏を顰ませましたが、そのまゝ二人ともクス〳〵と笑つて、ずん〳〵行き過ぎてしまいます。

何の事だか解りませんけれども、あの玉子わ、常からお若を贔負にして、草花を持つて行つても木果を持つて行つても、いつもよく買つてくれるのでした。

それでこうして途中であつた時でも、此方でわ始終遠慮して居るのに、先方からわ馴々しく、いろ〳〵な事を話しかけてくれるので、それが又お若にわ、どんなにか嬉しく思われて居たのです。所が今日に限つて、只一言聲を掛けた計りで、その儘行き過ぎてしまいます。

これ丈の事でわありますが、妙に此時わお若の身に、淋しい様な、悲しい様な、辛い感じを與えました。で、さも心細そうに、その二人の後を見送りますと、丁度その二人の頭に、綺麗なリボンが風になぶられて、ヒラ〳〵動いて居る通りに、そのまた上にわ先刻の蝶が、二匹で樂しそうに舞いながら行きます。

只さえこの蝶を見て、羨ましく想つて居るお若わ、更に二人の睦ましさを見て、一層羨ましくてたまりません。

思わずホツと太息をつくと、何時か胸が迫つて來て、眼が妙に濕んで來ました。が、これでわ成らぬと氣を直して、お若わまた歩き出しました。けれども何となく氣が退けて、——眼わ二人を離れないながら、身わ成る丈その側にわ寄らない様にと控えめ勝に……。

するとまた二人の方でわ、時々此方をふりかえります。そして何か笑つて居ります。それがまた氣になつてなりません。

其中に二人わ、段々と岡え登つて行きました。けれどもまだ春が淺くて、花らしい物わさておき、蕾さえ一つも見えません。お若わ落膽してしまいまして行つてしまいました。

これで漸く二人の姿わ、もう見えなくなりましたが、それと一所に二匹の蝶も、もうお若の目に わ入らなくなりました。

それがまたお若にわ、結句氣樂になりましたので、お若わ空の花籠を抱えたまゝ、いつそ家え歸ろうとしますと、丁度その目の前え。又一匹の蝶が來ました。それわ先刻から一度も見えなかつた。赤い蝶であつたのです。

二　花の行方

赤い蝶！　まア珍らしいと、お若わ我知らず手を伸ばしました。それわ何も捕えようと云うのでわありません。只何となく懷かしさに、それに觸れて見たい氣がしたまでゞす。

すると蝶わ、それを厭がるでもないが、そつと立つて少し先え行き、そしてまた止まつて居ました。此方の行くのを待つて居る樣にも思えます。

こうなるとお若わ、まるでその蝶に魅入られた樣に、眼を一心にそれに計りつけて、歩くとも無く歩いて行くと、何時か家の中え來ました。而もその家わ、何の事!?　自分の家でありました。

『オヤ、私アもう歸つて來たんだもの。……妙だねエ……けども今日の樣な日にわ、いつそ出ない方が可かつたんだ。』

と、云いながら籠をおろして、緣側にそれを置くと、其まゝ圍爐裏の側え來て、冷えた手を溫めましたが、また思い出して、

『それわそうと先刻の蝶わ？』

と、四邊を見まわしますのに、もう影も形も見えません。

『變たわねエ。』

と、獨り呟きましたが、折から家にわ誰も居ませんので、蝶の行方を尋ねる事も出來ず、

『それにしても今日出たのわ、やつぱり蝶の影がさしたからだよ。蝶に誘われて家を出て、また蝶に誘われて、こうして家え歸つて來た。考えて見ると夢の樣だねエ。だが、その蝶にもいろ〳〵あつて、初め見たのわ白いのと黃色、後に見たのわ赤い蝶。蝶々にだつてあんなに色々あるんだもの、人間にも差異のある筈だ、玉子さまやあのお友達と、この私と較べると、丁度白や黃色い蝶々と、赤い蝶とちがう樣なもんだねエ。』

と、獨りでこんな事まで考え出し、

『そう云やア赤い蝶わ、たつた一匹で飛んでた様だ……あれもお友達が無いのか知ら？　そんなら私がお友達になつてやるのに、折角家まで一所に來ながら、急に居なくなつちまうなんて、あの蝶も餘程變り物だよ。』

と、恨めしそうに獨言云いながら、淋しく溜息を洩らしましたが、その中に何う云うものか、さほど疲れたとも思わないのに、急に眠氣がさして來て、果わ身も支えきれず、其場にコロリと横になつてしまいました。

すると、今まで行方を晦まして居た、先刻の赤い蝶わ、何所からかまた現われて來て、今お若の横になつて居る、側の蓙屏風の縁に止まりましたが、相變らず一匹で、淋しく羽根を休めて居ましたと思うと、段々軀が大きくなつて、果わ初より五六倍の、大きな蝶になりましたが、見るとその頭わ、可愛らしい小娘の顔になつて居ります。

そしてその赤い蝶わ、蓙屏風を離れますと、お若の顔の上の所を、三度ばかり靜に舞つて、其のまゝ縁側の方え出ました。

縁の隅にわ先刻の籠が、片寄せて置いてあるのです。

赤い蝶わ其所え行つて、

『さア皆さんいらつしやいな！』

と、可愛い聲で云いますと、

『アイ、アイ！』

と、可愛い聲が幾つも聞えて、見る〳〵中に籠の中わ、赤や黄色や紫の、花で一杯になつて來ました。

赤い蝶わ、また籠の縁に止まつて、

『オヽ、もう皆さんお揃いなのネ。』

と、云いますと、

『ハア、先刻から待つて居りましたのよ。』

と、人間の通りの聲を出しましたが、聲計りでわありません。見る〳〵中にその花わ、皆可愛らしい小娘になつて、手をつないで籠から踊り出し、

『さア蝶子さん參りましよう。』

と、ズラリ其所に列んだ所わ、まるで女學校の運動會を見る様です。

と、また赤い蝶わ、

『だが、靜にしてらつしやい！　丁度今寢た所だから、起きない様にしなけりやいけません。』

『でも可哀そうぢやありませんか、一所に連れてつてやりましようよ。』

『いえ〳〵、今わ別の方が可いの。』

『でも折角お友達に成ろうつて云うんだから、一所に行つてもいゝぢやありませんか。』

『いゝえ、今わわざと置いとく方が、却つてあの人の爲めなんです。だから目の覺めない中に、さア先え行きましよう。』

『でも、一寸見てやり度いわねエ。』

『どんな顏して寢てるのか？……』

と、花の小娘わ忍び足で、障子の陰まで歩みよつて、そつとお若の寢顏を見ました。

けれどもお若わ何も知らず、邪氣も無い顏して眠つて居ます。

『まア可愛いわねエ。』

『ほんとに好い兒ねエ。』

『私あんな人になら、どんなに摘まれても可いと思うわ。』

『それよりいつそあんな人に、始終摘まれて居たいと思うの。』

と、口々に云い合うのを、赤い蝶わ羽根で制して、

『コレ、靜になさいと云うのに……目が覺めるといけないぢやありませんか。』

『でも……あんな顏をして、どんな夢を見てるかと思うと、何だか私達も一所に見度い樣だワ。』

『それよりもその夢の中え、はやく私達が入つてやりましようよ。』

と、云う中に赤い蝶わ、もう先に立ちまして、

『さア皆さん參りましよう。』

と、云うのに何れも促がされて、さも殘り惜しそうに、お若の寢顏を見かえり見かえり、赤い蝶の後につゞきますと、蝶わまたお若の頭の上を、高く三度ほど廻つてから、

『花が欲しくば蕾が岡え！　花の香りを慕うてござれ！』

蝶の羽音を聞きながら、蝶の羽音を聞きながら。』

と、涼しい聲で歌い出しましたが、その歌の聲が次第々々に、幽かに成つて行くに連れて、蝶の姿も花の影も、何所えか消え失せてしまいました。

暫時すると、お若わ不圖目を覺ましましたが、まだうつとりした眼元で、座敷の一隅を見つめながら、

『まア不思議だ！　たしかに今お友達が來て、私を誘つてくれたんだよ。而も大勢のお友達がみんな綺麗な衣服を着て……何所え行くのつて聞いたらば、ツ……ツ……蕾が岡だつて……蕾が岡つて何所だろう？　私、そんな所聞いた事も無い……けども蕾つて云うんなら、花の蕾の事に相違無い、そんなに蕾のある所があるのか知ら？　まア好いこと、私はやく行つて見たいワ。』

と、初めてやおら立ち上つたが、また額に手をやつて、

『でもその岡わ何所なんだろう……皆さん先え入らしつちまつて、私、方角が解らなくなつちまつたワ……』

と、やがて門口まで出て見ると、遙かに唱歌の様な聲がします。耳を澄まして聞いて見ると、

『花が欲しくば蕾が岡え！
花の香りを慕うてござれ！
蝶の羽音を聞きながら、
蝶の羽音を聞きながら。』

と、云います。

『オヽ、あの唱歌わ先刻聞いたのとおんなし、まア、嬉しい、そんなら皆さんが居らつしやるんだワ。』

と、其のまゝまた家を後に、聲のする方をさして、

『花が欲しさに蕾が岡え！
花の香りを慕うてまいる、
蝶の羽音を聞きながら、
花の香を聞きながら。』

と、自分も同じ様に唱いました。否、唱う氣でわなかつたのですが、我知らず釣り込されてしまつたのでした。

三　岡の村雨

歌に浮かされたお若わ、出るとも無しに家を出て、歩くともなく道を歩いて、來るともなく來かゝつたのわ、先刻一トまづ引かえした、あの小山の麓でした。

此時見るとその小山わ、形こそ以前の儘なれ、卿の花が一面に咲いて居て、黄や、赤や、紫に、彩られたその美しさ！　お若わ夢見る人の様に、ウツトリと成つて其所に立ちましたが、

『まア……綺麗な……何うしてこんなに成つたんだろう？』

と、我知らず獨語を云いました。

すると、また山の方で、先刻の様な優しい聲で、

『花が欲しとて蕾が岡え、
花の香りを慕うて來たわ、
蝶の羽音を聞く人よ！
花の香りを聞く人よ！』

と、唱つて居るのが聞えます。

『オヽ、それでわ歌の中の蕾が岡と云うのわ、此のお山の事なのか知らん？　此所なら私以前から知つてたが、蕾が岡つて名のあるのわ、今日初めて聞いたワ。』

と、云う時ヒラリと目の前え、例の赤い蝶が出て來たが、直ぐと可愛らしい少女になつて、
『お若さん、よく入らしつたのネ。私あなたが大好きだからお友達になりに來たのよ。』
と、云う。
お若わさも喜ばしそうに、直ぐその手を取りながら、
『ほんとにまア嬉しいのねエ。そしてお前さん、何所の何誰?』
『私この蕾が岡に居る、お赤ツて云う子なのよ。お若さんにお赤名まで以て居て頼もしいわねエ。』
『ほんとにそうねエ。でわやつぱり蕾が岡つてのわこのお山の事なんですネ。』
『そうよ。このお山にわ色んな花があるの。でもみんな開かないで半分位しか咲かないから、それで蕾が岡つて云うの。それでその蕾の中でも赤い花の蕾だけわ、みんな私の勝手になるのよ。』
『まアほんとに好いんですねエ。でも此所から見てると、まるで咲いてる様ぢやありませんか。』
『そりやア蕾でも澤山が、一所になつて咲いてるから、それでみんな咲いてる様でしよう。でもお若さん！　貴女賣つてあるくにやア、みんな咲きゝつたのより、半分咲いてる方が可いでしよう?』
『そりやアそうですとも……咲きゝつた花よりも、咲ききらない蕾の方を。何誰もお好になりだよ。』
『人間もその通りですわねエ。大人になつてしまうより、私達の様に少女の方が、人に可愛がられるわねエ。』

『全く今が人間の蕾ですねエ……。』
と、お若も合槌打ちましたが、やがて又考え込んで、
『でもその蕾の時分を、たつた一つ離れた所の、谷の陰にボツリと咲いて、雨に打たれたり風に吹かれたり……ちつとも温い日に當らなかつたら、随分可哀そうぢやありませんか。……私なんぞわ丁度そうなの……』
と、果わ溜息を吐きました。
と、不思議でわありませんか。今迄藍の様に晴れ渡つた空が、何時か灰色に曇つて來て、ポツリと落ちて來た一雫が、お赤の額を打ちました。
と、お赤わまるで石にでも打たれた様に、
『アツ、雨が！』
と、云いますと、忽ち元の蝶になつて、さも狼狽えた様に飛びまわりました。
すると先刻から聞えて居た、山の上の歌の調子が、急に又變つて來て、
『花を育てる蕾が岡に、
花を育ての雨が來た。
蝶の羽がいを濡らすまい、
蝶の羽がいを打たすまい。』

と、忙しそうに唱いましたが、それにつれてポツリ〳〵と、雨の脚まで繁くなつて來ますと、山の上から二人許り、慌てて走り下りて來る者があります。

見ると、これわ先刻の玉子と、その友達とでありましたが、その二人の少女に連れて、黄色と白との二匹の蝶も、もつれ合う様にして飛んで來てわ、さも雨をしのぎ度い様に、二人の袂の下え入ろうとしました。

それに又二人の少女わ、少しも蝶々わ庇おうともせず、只頭にかけたリボンを雨に當てゝ濕らすまいと、長い袂をかぶる様にして、

『ア、大變だ、雨が降つて來た。』

『誰か傘を持つて來てエ……』

と、泣く様な聲をして駈けて來ます。

お若わ見ると氣の毒になつて、思わず聲をかけました。

『お嬢様お困りで御座いましよう……私がお傘を持つて參りましようから、しばらく何所かでお待ち遊ばしませ！』

と、云いますと、玉子わ氣がついて、

『オ、お若まだ居たの？　花も無いのに何してたの？』

と、訝かります。

この小山にこの通り、蕾の花が揃つて居るのに、何でそんな事云われたものかと、お若わ不審に思いましたが、それを糺して居る所でありませんから、

『お待ち遊ばせ、直ぐお傘を！』

と、玉子を麓の木の下に待たせ、自分わ甲斐々々しく裳をからげて、玉子の家の方えと急ぎました。

すると又赤い蝶わ、それに追いすがつて飛んで來ましたが、もう雨に羽根を打たれて、思う様に飛べない様です。

『まア可哀そうに……それぢやア此所えお出でよ。』

と、お若わ自分の袖の蔭に、その赤い蝶を入れてやりながら、尚道を急いで行きますと、その後から又黄色と白の、二匹の蝶々もよろめきながら、覺束無くも飛んで行きます。

四　蝶の傘

後になり、又前になり、側を離れずついて來る二匹の蝶わ、よく〳〵疲れて居ると見えて、又してもお若の肩え來て止まりそうにしてわ、また恐れて立つてしまいます。

お若わ心付いて立ち止まり、

『まアお前達も可哀そうに、羽根が濕れて飛びにくゝ成つたんだろう。さア〳〵お出で！　此所え

入れてあげるから。』

と、袖をひろげて蔭え來させ、前から居る赤い蝶に、

『さア、お友達が來たから、仲よく一所に入れておあげ！』

と、云いました。

と、赤い蝶わ、さも物に驚いた樣に、ツと立つて袖の蔭を出ますから、

『アレ、何故逃げるんだろう……一所に居れば可いんぢやないか……。』

と、云つてもその蝶わ元の所え來ないで、更に別の袂の方え來て、その蔭え入りそうにします。

お若わ悟りました。

『ハヽア、それぢやアお前わ、この蝶々達にいぢめられると思つてるの？まア氣が弱いんだねエ。』

と、云いましたが、直ぐと又、先刻の事を思い出しまして、自分もあの玉子達に、初めて途中であつた時わ、何となく心がおくれて、獨りで別物に成る樣な氣がしたが、あれも今から考えれば全く氣の僻みであつた。と、こう氣が付いて見ますと赤い蝶がこの通り、他の蝶々をよけるのを、却つて可笑しくも氣の毒にもなりました。

『何だねエ。お前もおんなし蝶々仲間ぢやないか。仲よく一所に入つておいでな！』

と、又しても袖をかざして、とう〳〵三匹ともその蔭に入れました。

するとその三匹わ、見る〳〵中に巴の樣に、一つ所え頭をよせて、丁度六枚の羽根を合わせ、ピ

クピク振わせて居ましたが、それが又三匹で、何か話して居る樣にも見えます。

と、思うとお若も、見てさえ心地が快いものですから、我知らず立ち止まつて、それに見惚れて居りますと、其間にまた雨わ、段々に強く當つて來ますので、又我に復つた樣に、

『オヽ大變に降り出して來た。こうしちやア居られない。お孃樣が待つてらつしやるだろう、どれはやくお傘を持つて來なけりやア。』

と、急いで歩き出そうとしました。

丁度その途端に、袖の蔭に居た蝶が、一時にパツと飛び出しますから、

『コレそんな事をして濕れるぢやないか。』

と、云つて止めようとしますと、三匹わ見て居る前で、又巴形に飛びまわりましたが、廻れば廻るほど、その羽根が段々大きく擴がつて行つて、しまいにわその羽根で、丁度白黄赤の三色の巾を、巧く張り合わせた樣な、大きな傘の形になつて、お若の頭の上え來ました。

お若わ驚きました。

『まア、お前達が傘になつてくれるの？』

と、云いますと、やがて又何所からか、丁度先刻の樣な聲がして、

『赤、白、黄色と色こそちがえ、
蝶にへだてのあるものか。』

一羽一羽と別れて居れば、
雨に打たれて羽根こそいため。
三つ巴に合わせた羽根わ、
なんの雨にも嵐にも、
濕れるも共よ破れるも、
共よ〳〵友達よ、
共よ〳〵友達よ。』

と、可愛らしく唱うのが聞えます。

お若わ何だか今になつて、又夢を見る様に思いましたが、又しても蝶々のお庇で、傘の代りが出來ましたから、いつそこの中え先刻の二人も、一所に入れてあげる事にしようと思いながら引返えそうとしますと、今の歌がまだ近く聞えて、そしてその歌の主わと見れば、これわ玉子と其友達でした。

『アラまアお嬢さま！　お待ち遠でございましたねエ。でも、丁度こんな風に、蝶々で傘が出來ましたから、さア一所に參りましよう。』

と、云いながら左の手に、二人の手を取りましたら、こわ如何に二人の少女わ、其まゝ白と黄色の蝶々になつてしまつた、玉子とその友達とが、さもお若の前にわ赤い蝶だけさも嬉しそうに飛んで居て、そして自分わ傘でわない、蓮屏風の蔭に居ました。

『まア不思議だ。どうしてこんな夢見たろう？』

と、まだ腑に落ちかねて居ますと、表でやさしい聲がして、

『蕾が岡に花が咲き出したよ。はやく行つて取つておいで私達も一所に行くから。』

と、云うので急いで出て見ましたら、夢でわ蝶々になつてしまつた、玉子とその友達とが、さも親切げに誘いに來て居ります。

これを見た時のお若わ、たとい暫時の間でも、僻味に囚われて居た自分を、只恥かしく思われてなりませんでした。

小船の少女

浮き島御殿

上　小船の少女

梅も二三りんづゝ星のように咲きかけて、それに時々わう、ぐいすの子が、幼稚園の生徒ほどの歌を、きまり悪そうにうたいにくる、日當たりのよい奥庭に、美都子わ友達二三人と午後わ羽根つきに夢中でした。

きれいに敷きならべた松葉の上にわ、キルク草履の音もありませんが、うつてわかえす羽根のひびきわ、カチリカチリと空にさえて、隠居所にいる祖母の耳にも、障子越しにえんりよなくきこえます。

『まあ、子供たちというものわ、よくまアあれでくたびれぬもの

ぢやな。ちと休んだらよさそうなものを……』

と、つぶやきながらのぞこうとするころ、ようやく羽根の音もやんで、

『アラ、まだいゝぢやないの？』

『でも、まだ御年始に行かなけりやならないんですもの……』

『私も、家におばさんがいらつしやるはずですから』

『アラ、それぢやアしようがないわねエ。』

と、こんな會話がかわされましたが、そのまゝ庭口の木戸の方え、友達を送りだした美都子わ、しばらくするとまた庭えかえつてきました。

それを見て祖母の豊枝わ、

『美都や！　よく精がでましたネ。もう皆さんお歸りになつたの？』

と、窓から聲をかけると、美都子わちよつとふりかえつたまゝ、

『エゝ、皆さんお急ぎになるんですもの……私……つまらないワ。』

と、手にもつた羽子を見入りながら、すねるように身をまげました。

『ホゝ、それぢやアまアこちらえはいつて、ちつとお休みな。ちようど好いお菓子もあるよ。お茶もはいつたから御馳走してあげようぢやないか。』

と、優しく云いました。が、美都子わそれに耳もかしませんで、

『でも、私……澤山なの』

と、まだ羽子を見つめていましたが、また思い出したように、

『おばあさんこれ御覽なさい！　いゝ羽子ぢやありませんか。これわこの間買つた中に、たつた一つありましたの！　白鳥の羽子なんですつて、ソラ、こんな奇麗な羽子！　そしてよくはずみますよ。』

と、足ばやに窓の側まできて、そこの豊枝に見せました。

『どれ……なるほど、めづらしい羽子だネ。』

と、祖母わ輕く手にうけましたが、そのくせよく見ようともせず、

『どうだネ、あちらからまわつてお出でな！』

と、その手で緣側の方をさしました。けれども美都子わそれにわ從いません。

『でも私……澤山なんですもの……それより羽子ついてる方がいゝワ。ちよつとそれ返してちようだいな！……』

又自分に取りかえして、

『アラ、おばあさんびどいのねエ。こんなに羽子をまげちまつて……』

『オヤ、それわすまなかつたねエ。』

『……私これ大切なのよ……』

と、はてわキスをするように、その羽子に息をはきかけて、その形を直していましたが、やがてそれが氣のすむまでになると、

『よし、私行つてまた突いて來ますよ。おばあさん、そこから見てゝちようだい！』

と、以前の廣場まで引き返しました。

そこわちようど池の端にもなつていて、岸にわ圓く刈られたまきや、霜除けをきたそてつやらがとび〳〵に植わつております。

『一ト代に二タ代、御代の代々……いつ代のむかし……』

と、いゝながら突きあげる羽子わ、その度にひばりのようにあがつて、さながら青空にも浸みいるようです。

いかにも見事なその羽子の舞さま、それに目をひかれ氣を奪われて、美都子わまたも夢中になりましたが、その中にサツとばかり、彼方の築山の植え込みをゆすつて、池の面にさゞなみをたてた風に、羽子わ途中から横えそれて、そのまゝヒラ〳〵と落ちこんだのわ、たしかに池の中でした。

『アツ、大變な事しちまつた。』

と、美都子わ岸の青石のところまで出て、じつと池の上を見ましたが、あいにく目にわはいりません。

『なんでもこの邊に違いない。』

と、ひとりごとをいゝながら、枯れあしをかきわけて見ましたが、そこにわ羽子わないでわありませんか。

もとよりあんな輕い者、水の上なら浮いているはず、あしの中なら引つかゝつていようと、なお念をいれて見まわりましたが、さてどうしてもありかがわかりません。美都子わひどくよわりました。

『アヽどうしたらいゝだろう。あんないゝ羽子もうありやアしないワ。せつかく大切にしてたのに……ほんとに憎らしい風だよ。』

と、恨めしそうに築山の方を見ましたが、その時わもう風の氣もなく、木々の枝も晝にかいたように、ビリヽとも搖れていません。

『アヽどうしたらいゝだろう？』

と、又しても當惑の吐息をもらして、今度わ池の上を、未練そうにまたながめました。

すると、氣の迷いかその波の上に、ふと白い物が見えました。

『オヽあすこに……』

と、思いますと、その白い物わだん〳〵にのびて羽子どころでわありません。しまいにわ大きな白鳥になりました。

そしてその白鳥の後にわ、同じような白い着物をきた、神々しい少女が一人、銀色の小船に乘つ

て居りますと、その船に朱のなわがつけてあつて、そのなわを白鳥がひいているのでした。

『まア……奇麗だ！』

と、美都子われ知らず聲をたてますと、それを少女わ制すように、

『しづかに〳〵！　そしてあなたにお話があるから、この小船にお乘りなさい！』

と、いゝます。美都子わまるで夢心地！　まだ返事もしない中に、いつか自分わ小船にのつて、少女と列んでしまいました。

『アラ私……どうしたんでしよう？』

と、氣づかわしそうに云う顏を、少女わやさしく見かえりながら、

『あなた、私ご存じでしよう。』

中御殿の小僧

見なれない少女に迎いとられて、不思議な小船に乘せられた美都子わ、たゞ夢心地にあたりを見まわしますのに、景色わたしかに自分の家の、朝夕なれた庭に違いありませんが、この少女がどこの誰だか、少しも見當がつきません。それに先でわなれ〳〵しく、

『ご存じでしよう。』

と、云いますので、こちらも不審の目を見張りながら、

『あなた？　だあれ？』

と、聞いて見ました。

『アラご存じないの？　私さつきまで、つい今まで、あなたと一しよに遊んでましたワ。』

『私と一しよに？　でも私のお友達でわ、あなたのような方ないワ。』

『ホ、、、、お友達ぢやありませんよ、なんといつたらいゝだろう、御家來か知ら？　お相手か知ら？　……まアお相手の方ですワねエ。でも大そう可愛がられて、よくキツスしてもらいましたワねエ。ホ、、、！』

と、さも氣輕に笑いますが、こつちわまだ腑におちません。

『ほんとに誰なのよウ？』

『私？　云つたらお驚きなさるでしよう。けれどちつとも恐かアないのよ。』

『何しろはやく云つてちようだいよ。私、氣になるワ。』

『ぢやア云いましよう。私わねエ……今しがたまであなたにつまゝれていたあの羽子なんですよ。』

『まア……あの羽子だつて？』

『エ、、羽子ですの。しかも白鳥の羽根！　綺麗でしよう。』

『まア白鳥の羽根。ほんとに綺麗だつたわねエ。でも、あなた、人間ぢやないの？』

と、今更のように姿を見まもりましたが、それにわ少女もなんとも云えず、たゞ〳〵笑つてばか

りいました。

その中に船わドン〳〵進みます。て、又もう一度あたりを見ますと、これわ又どうしたのか、今までありく〳〵と見えた自分の家の庭わ、廣い〳〵湖水の上に變つております。

美都子わ思わずのびあがつて、

『アラ、私どこえいくんでしよう?』

と、心元なさに尋ねました。すると羽子の少女わ眞顏になつて、

『これから浮島御殿え行くんです。』

『浮島御殿てどこ?』

『もうじきです。——あれ〳〵、あすこにそろ〳〵見えて來ました。』

と、指でさした方を見ますと、はるかむこうの水平線の上に、まるで畫にかいた蜃氣樓のような、綺麗な御殿が浮いて見えました。

『まア……あすこなの? そしてあすこにわなにがあるの? 何方がいらつしやるの?』

『あすこにわあの島の女王がいらつしやるんです。女王というのわ私達の王さま、やつぱり白鳥の王さまなのです。』

『私達が行つてもいゝの?』

『エゝ、ようございますとも。今まで私を可愛がつてくだすつたお禮に、私がおひきあわせしてあげますから、心配なしにいらつしやい。そしてあすこわ面白いんですのよ、誰でも一度來たものわ歸るのがみんないやになつてしまいますつて、けれども私達のお仲間でないと、いつまでもいる事わできないんです。私だつてそうですの。元の白鳥の時分ならいゝけども、かりにも一度でも羽子になつちまうと、もう人間のお相手ですから、長くわもういられませんの。けどもあんまり懷しいから、ちようどこの地え落ちたのを幸い、ちよつと歸つて來るんですが、あなたがあんまり可愛がつてくださるから、しばらくでもわかれたくないと思つて、それでお連れ申したんです。……アラ、こんなお話する中に、もう來てしまいましたよ。』

と、いうので、はじめて氣がついて見ましたら、船わりつぱな棧橋に着いて、さつき見えたあの御殿わ、もう鼻の先になりました。

『さアおあがんなさい!』

『はい!』

羽子の少女にたすけられて、美都子わ棧橋えあがると、そのまゝ御殿えと案內されました。

まつ白な大理石の樓門をくぐつて、大理石の階段をあがると、中わまた銀色の板に、雪のような床、天井。見るから目もまばゆいばかり。しばらくわ立ちすくんでしまいました。羽子の少女わ美都子をかえりみて、

『それでわ私先え行つて、女王さまに申しあげてきますから、あなたこゝで待つてゝちようだい

よ。どこえも行つちやいけませんよ。』

と、いゝおくとその儘、ヒラリと身を飜えして、奥の方えはいつてしまいました。

あとに美都子わ、またキヨロ〳〵見まわしていましたが、なんにしても美しい御殿の様子に、われ知らず嘆息して、

『まアほんとに綺麗だ、何もかもまつ白で……こんなところえ來ると、私のような色の黒いものわほんとにきまりが悪くなつてしまうワ。』

と、ひとりごとをいゝました。と、どこでか可愛らしい聲で、

『そんな事があるものですか。もつと黒い者がありますもの。』

と、いう者があります。

『オヤ、それぢやアもう歸つて來たのか知ら?』

と、奥の方を見こみましたが、まだ少女の姿わ見えません。

『アラいやだ。他の人か知ら? でもこのまつ白な御殿に、どこを見たつて黒い所わないぢやないの?』

と、今度わ後まで見かえりますと、

『ところがこゝにもたつた一つ、黒い者がおりますよ。』

と、いゝながらチヨコ〳〵と、前え走つて出てきたのわ、なるほどまつ黒でまん圓な、小さな小

僧でありました。

『まアほんとに……お前わ一たいなんなの?』

と、いゝましたら、これもさつきの少女のように、

『あなた、私御存じでしよう?』

と、同じようなことをいゝます。

下 元の白羽子

美都子わすゞしい眼を見はつて、じつとその小僧を見つめましたが、どうしてもおぼえがありません。で、なお不審そうに、

『だつて、私知らないワ。ほんとにお前誰なの? どこの人なの?』

と、聞きますと、小僧わニツコリ笑いながら、

『忘れるのわひどいぢやありませんか。白鳥ばかりで羽子わできませんよ。』

『ぢやお前も羽子だつていうの? まア……』

まだふに落ちないでいゝますと、

『無論私も羽子ですとも。第一私がいなけりやア、羽子わはずまないぢやありませんか。』

と、はてわ少し不平らしい顔をします。美都子わようやく氣のついたように、

『ぢやアお前むくろじだネ。』

『えゝ！　やつとわかりましたネ。そうです、椋郎次という小僧です。』

『それがどうしてこゝえ來てるの？』

『どうしてわひどいぢやありませんか。あなたがお池えお落としなすつたからですよ。そりや白鳥さんにもおきゝでしたろう。あの羽根が來たんなら、私も來たつていゝぢやありませんか。』

『そんならなにしに？』

『なにしにですか？　……それわわけがあるんです。それを話してあげますから、さアこつちえ入らつしやい？』

と、小僧わ側えよつて、美都子の手を取りました。

美都子わなんだか氣味が悪いので、

『だつて私……こゝで待つてなけりやならないんだワ。どこえも行つちやいけないの。』

と、その手をまた放そうとしましたが、椋郎次わ放しません。

『なんでもいゝからいらつしやい。こゝでわお話ができないんですから。』

と、云つてひつぱられたと思うと、いつの間にか自分の體わ、庭の木の下え來てしまいました。

美都子わなんだか心配そうに、

『アラ私、こんなところえ來て可いの？』

と、あたりを見まわしますと、椋郎次わあざわらうように、

『ヘツ、かまうもんですか。こつちえ來りやアこつちの世界です。御覽なさいあの御殿こそ、眞白造りになつてますが、こゝえ來りやア、木の幹でも、庭の土でも、皆黑いぢやありませんか。こうなるとお孃さん？　あなたが一番白いんですぜ。それ、これを御覽なさい！』

と、云いながら引かれるまゝに、二人で池の端に來て、水の上をのぞきましたら、椋郎次の顏わたどんのように、自分の顏わ雪のように、さもありく〳〵とうつるでわありませんか。美都子もさすがに惡い氣わせず、

『まアほんとだワねエ。』

と、われながらその影に見とれておりますと、椋郎次わ得意になつて、

『どうです。あんなまぶしい白いところにいて、きまりの惡い思いするより、こゝのようなところにいて、一番白い者になつてた方が、よつぽど可いぢやありませんか。それだから私、わざ〳〵お迎いに行つたんです。——ほんとにあの白鳥という奴わ、良くない奴なんですよ。一たい羽子といううものわ、自分ばかりではずむようにおもつて、この椋郎次の事なんぞわ、少しも思つてくれないんです。そのくせ羽子板で突かれる時わ、私ばかりが痛いおもいして、コツン〳〵打たれているんです。』

と、さも不平そうに云い出すので、美都子も氣の毒に思いながら、

『まつたくそういやア然うなんだねエ。』

『全くですとも、そうですとも！　私が痛いのを我慢して、コツン〳〵はずめばこそ、羽子が好いあんばいに高く弾んで、あなたも面白く遊べるんぢやありませんか。それにあなたもあなたで、ちつとも私の事を察してくださらないで、羽子にわ時々〳〵キツスしておやんなさいますが、私わさすつてもくださいません。それぢやア片手落ちぢやありませんか。だから私も面白くないから、實わさつきお池え落ちたのも、私がわざと落ちてやつたんです。』

『まア……』

『あなたにわすみませんが、實わ羽子に面當てなんです。すると又羽子の奴め、自分の浮いてるのを幸いに、あなたを白鳥の御殿え連れこんでしまうなんて、あんまり勝手な事をしますから、私も負けない氣になつて、あなたを此方えおつれもうしたんです。ですからあなたもそのおつもりで、もうあんな奴のいう事わ聞かず、これから私の方にばかり始終いらしつてください！　その代り御馳走もしてあげます。面白い事もして見せます。そしてまた好い物を澤山おみやげにあげますよ。』

と、しきりに辯じたてました。

それを聞くと美都子も、ようやく仔細がわかりましたが、たゞし椋郎次のいう事にわ、まつたく感服もできませんから、少し眞顏になつて、

『だが椋郎次！　お前わそうお云いだけれども、お前ばかり威張つたつて、ヤツぱり羽子わできないよ。しかも羽子というからわ、やつぱり羽根がいるんぢやないか。もつとも私の方だつて、今までわほんとに惡かつた。これからわお前も大切にしてあげるから、そんな片意地をはらないで、私と一しよに白鳥の所えお出で！』

と、優しく云い聞かせました。するとその返事を、椋郎次がまだ云わない間に、後の方に聲がして、

『美都子さんよくいゝました。全くそのとうりです。』

と、いうので驚いてふりむきましたら、いつの間にか白鳥の王わ、羽根の少女を連れてきていました。

美都子わわれ知らず身を退いて、その王に禮をしますと、王わかえつてなれ〳〵しく、

『ほんとによく來てくださいましたネ。さアあちらで遊びましよう。コレ椋郎次も一しよにお出で！羽根の少女も仲好くして。』

と、いゝながら双方の手を、自分で取つて引きよせて、和睦の握手をさせました。

と、不思議でわありませんか。二人わたちまち一つになつて、元の羽子になりましたが、白鳥の王わそのまゝ消えて、代りに羽子板が手にきましたから、それで羽子をつきましたら、もうどんな風が來ても、けつして落ちる事わありませんでした。それにしても、浮島御殿わ、一たいどこにあつたのでしよう！　美都子わまるで夢を見たようでした。

二人兎代子

上　留守の鏡

兎代子わ大のおしやれであつた。一日の中に三分の一わ、きつと鏡に向つている。これわ容貌自慢だからだ。その自慢の容貌も、他人の目にわそれほどにわ見えない。たゞ色が白いので、生えぎわの不行儀なのも、鼻の圓いのも、口の大きいのも、それほどの難にわ見えないばかりだ。

それでいておしやれの兎代子わ、まだもちまえの色にわ滿足しない。だから毎日クリイムをつけたり、白粉をぬつたりして、白いが上にも白くぬる。その上にまたほうべにになどさすのだから、一度鏡の前にすわつたら、なるほど急にわ立てないはずだ。

いや、兎代子の鏡の前に來るのわ、そのおけしようの時ばかりでわない。食事がすむとその度にきつとその顏を寫して見てわ、口のまわりを氣にしている。學校から歸るとすぐ鏡の前えきて、髪のくずれをなおしている。

たゞなにがなしに鏡が好きで、閑さえあればその前に來るのわ、ちようど昔からたとえにいわれる、おろの鏡の山鳥のとうりだ。

あゝ始終鏡に寫していたら、しまいにわその姿が、すつかり鏡わ女の魂だから、その影にも魂がはいつて、兎代子が前にいない時でも、鏡に聲をかけたらば、或わ返事をするかも知れない。などゝ氣をもんだ者もあつたが、不思議にもその心配わやがて空想でもないらしくなつた。

ある日兎代子のもとの乳母が、遲まきながら年始をかねて、御機嫌伺いにやつてきた。

その時わまだ午前、兎代子わ學校えいつているので、その間母の室で、兎代子のうわさ話に時を移していた。

『お孃さまもすつかり御成人あそばしまして、さぞお美しくおなり遊ばしてございましよう。この四月でまるお十三でございましたネ。それにしてわ、がらも大きく、それにお姿がよろしくつていらつしやいますから、どんなにお立派でございましよう。はやくお目にかゝりたいものでございますこと。』

と、云うのわ乳毎の世辭でもない。

母わ少し眉をひそめて、

『でもねエ、どうしてあの子わあゝだろうと思うほど、ぼんとにおしやれで困るのだよ。着物なんぞでも、二度ほど着るともういやになつてしまつて、又新らしいのを欲しがるのだもの。』

と、つぶやくのを、乳母わまた辨護して、

『でも、それわ奥さま仕方がございませんよ。だん〳〵お年頃におなりあそばすんでございますものの。それにこの頃のお孃さま方わ、何事もお早うございますからねエ。』

『だつてお前、毎日鏡の前にばかりすわつて、髪や顏ばかりいぢくつてるんだよ。』

『ホゝゝ、それわおちいさい時分からでございましたよ。よくだつこして姿見の前え來て、バアといつておあげ申すと、どんなにおむずかり遊ばした時でも、すぐ御機嫌が直つたくらいでございました。』

『お前がそんなくせをつけてしまうものだから、それであんな鏡好きになつちまつたんだよ。』

『オヤ、今頃になつておしかりでございますか。ホゝゝ。』

と、こんな話も出ていたが、その中に客が來たので、乳母わ、

『また後ほど。』

と、その場を次えとさがつてきた。

が、別に用事もないので、嬢の歸りをまつ間に、せめてわその居間の掃除でもしておこうと、頼まれもせぬのに心づいて、奥の離れのその居間えときた。

見ると、机、本箱、手文庫、飾り棚、さすがに行きとゞいて備わつている。が、その間に一番目にたつのわ、今もうわさの鏡臺である。

『まアお見事な！　まるでお嫁入りでも遊ばすようだよ。……もつとも鏡わ女の魂だというからどんなに立派でもかまわないわけだが……』

と、ついこんなひとりごとまで出たが、鏡にわさらさの蓋い幕がかけてあるので、別にほこりわかかるまいとわ思つたが、とにかく可愛いお嬢さまの姿を、朝夕寫している物と思えば、また懐しさも一しおなので、そつとそのおいをどけて、鏡の面を檢めた。

と、その面に、あり〳〵と寫つたのわ、乳母の自分の顔でわなくて、おさげ姿の兎代子でわないか。

オヤというと乳母わ、急いで後をふりむいた。それわもしや今の間に、嬢がもう歸つてきて、そつと後に立つたと思つたからだ。

が、そこにわ誰もいない。

『まア變だ。』

と、また見直すと、今度わもう兎代子でわなく、自分の顔がうつゝていた。

『なんだねエばか〳〵しい。さつきあんなお話伺つたから、それで氣のせいでお顔が見えたんだろう。それともまたお嬢さまの方でも、はやく乳母に會いたいというので、氣ばかり歸つていらしつたか知らん？　なんにしても變だねエ。』

と、まだ疑いの晴れないながら、それほど又氣にもかけず、そのまゝ居間の掃除をおわり、床の花の少しゆがんでいたのまで、ていねいにためなおしておいて、やがてそこを出ようとした。

『乳母や！』

と、呼ぶ者がある。

『ハイ……。』

と、ふりむくと誰もいない。

『變だねエ。また空耳だよ？』

と、自分の耳を侮りながら、後手に障子を閉めようとすると、又しても、

『乳母や！』

と、呼ぶ。

『アレ、やつぱりお呼びになつたようだよ。』

と、急いで戻つて居間の中を見ると、例の鏡の側のところに、おさげ髪に、銘仙の羽織、紫の袴

をはいた兎代子が、さもにこやかにたつている。

『まアお嬢さまぢやございませんか。』

と、口とともに目を見はつた。

『乳母や、よく來てくれたねエ。』

『お嬢さまあなた、さきほどいらしたんでございますか?』

『はアいたとも!』

『どちらに?』

『こゝに!』

『へエ……』

と、乳母わ兎代子の姿を、髪のさきからつまさきまで、今更のようにじつと見つめた。兎代子わまた笑いながら、

『なんだねエ乳母や、そんなに見ると穴が明いちまうぢやないの。』

と、はにかむように袖を顔えあてた。その様子がまたいかにもあどけないので、乳母わもう他愛もなく、

『ほんとにお嬢さま! お身大きくおなりあそばしましたねエ。』

と、われ知らず側え寄りそつた。

乳母わ可愛さのあまり、われ知らず兎代子の頭に手をかけながら、またつく〳〵とその顔を見こんで、

『お頭髪が大そうこわれましたですねエ。誰がお上げ申すんでございます。』

『誰にも結つて貰やしないワ。』

『まアおひとり? よくおできになりますねエ。』

『だつて、誰に結つてもらうより、自分で結う方が一番好いんだもの、でも、學校でおてんばするもんだから、すつかり破れちまうんだよ。』

と、氣にして又頭え手をあげる。

『そんなら私、ちよつとお上げもうしましようか。』

『いゝよ。何所えも行くんぢやないから……それより彼方え行つて遊ぼうよ。乳母や! お出で!』

と、兎代子わ有り合う庭下駄をはいて、まづ庭えと下りたつた。乳母もそれに引かれて 同じように庭下駄をはき、

『まア久しくうかゞいません中に、お庭のご様子が變つたようでございますこと。』

『エ、そうなの、お前、裏に溫室のできたの知るまい。』

『ハイ、存じませんよ。』

『それからこの東屋も。』

『ほんとに好い物ができましてございますネ。』

と、こんな話をする中にも、二人ともう東屋に來ていた。

『そらネ、こゝからだと溫室も見えるよ。あすこにわ綺麗な花が澤山あるの。後に見せてあげようネ。』

『ヘエ……左樣でございますか。皆はくらいのでございましようねエ。』

『はくらいでなくつても、この頃ぢやア日本で、皆い、西洋花ができるんだよ。』

『そうだそうでございますねエ。その代り日本の物でも、あちらで又よくできるんだそうで。この頃わなんでも僞せ物がよくできるようになりましたそうでございますネ。』

『ナニ僞せ物?……』

乳母の何氣なくいつた言葉を、兎代子わ妙に聞きとがめた。そして語氣も角立つてきこえたので乳母わ訝りながらその顏を見こんだ。

すると兎代子わ、又その顏を見られまいとして、クルリと後をむいてしまう。

『アレお孃さま! どう遊ばしたんでございます?』

と、立ちかゝつて側え寄ろうとすると、それをも兎代子わいとうように、つイと立つて東屋を出

たが、そのまゝ元の居間の方えと行つた、その又足の速さ! 乳母もつゞいてその後を追うのに、どうしても追いつけない……。

が、やつと元の緣側えきて、居間の中をのぞいたが、そこにわ兎代子の影も見えず、かえつてむこうの母の居間の方で、その聲がするようである。

なんというお速い事だろうと、心の中に感歎しながら、まづその母の居間えとゆくと、そこに兎代子わ今がた學校から歸つたという風で、本の包みを側においたまゝ、

『アラ、乳母やがきましたつて……? ドレ、どこに?』

と、云いながら振りむいた拍子に、ちようど自分と顏をあわせた。

『アラ乳母や! よく來たねエ。』

と、はじめてあつたようなあいさつ。少し變だと思いながら、

『ほんとにお孃さまのお身足わ、お速いんでございますねエ。』

『アヽ、蟲が知らしたもんだから、今日わお友達もまたずに、獨りで急いで來たんだもの ……』

『なんでございますか、乳母お後からまいりますのに、どうしても追いつきませんで……。』

『アラ、ぢやアお前後からきてたの?』

『ハイ、まいりましたとも。』

『そんなら呼んでくれりやアいゝのに。』

『お呼び申しましても、知らん顔遊ばして……乳母、ごきげんを損じたかと存じまして、ほんとに心配いたしましたよ。』

『なんでお前がきげんを損じたの？』

『いゝえ、お嬢さまのでございますよ。』

『私の……きげん？　何うして……？』

『只今あちらで……つて學校で？』

『あちらで……つて學校で？』

『いゝえ、お庭で……。』

『お庭で？　おかしいぢやないか。私まだお庭なんぞ出やしないよ。今、學校から歸つたばかりだよ。そうしてたつた今、こゝえ來たばつかりなんだよ。ねエ、お母さま！』

と、初めて母をかえり見るので、母もうなづいて、

『そうなんだよ。乳母どうかしてるんぢやないか。お前のいう事わなんだか變だよ。』

『變でございますつて？　……私よりお嬢さまの御樣子が、なんだか變だと存じますよ。』

『なぜ變？　なにが變なの？』

兎代子わ膝をすゝませた。その顔をじつと見つめて、

『でも只今私と御一しよに、お庭の東屋にいらしつたんでしよう？』

『なに云つてるんだねエ、お前！　私いま歸つたばかりだといつたぢやないか、そしてお前のいる事も、今はじめて知つたんぢやないか。』

『へエまア……それぢやアいよ〳〵變でございますよ。』

と、今更ながら氣味惡そうに、以前の東屋の方を見こんだ。

兎代子わ母と顏見あわせて、

『どうしたんでしよう？　なんだか變ねエ。』

『ほんとに變だよ。』

親子の顏にも不安の雲がかゝつた。

下兩手に孃

あまり變だといわれて見ると、當人の兎代子まで、なんだか變になつてきた。そしてこれわ自分の顏に、なにか異狀があるに違いないと、急いで懷中鏡を出そうとしたが、それよりもいつものあの大鏡に、寫して見るのが一番たしかだと、兎代子わ母の前をたつて、自分の居間えと足をはやめた。

その後からわまた乳母が、心元なさそうについて行く。

『それでもお嬢さま？　ほんとに變な事があるのでございますよ。』

と、聲をかけながら追いすがるようにすると、
『なにがそんなに變なんだろうねエ。私、氣味が悪いぢやないの。』
『まつたく氣味の悪い事があるのでございますよ。』
と、いう中にもう兎代子わ、鏡の前に來てしまつた。
そして兎代子わ、その鏡に自分の姿を寫すと、今朝家をでる前に、こゝで寫したその時とわ、髪こそ少し亂れているが、顏の色や、衣紋の樣子に、少しも變つたところがない。
『乳母や！　ちつともへんな事わないよ。』
と、乳母を顧ると、乳母ものぞきこんで、
『まつたくでございますネ。……』
とわいつたが、今度わまた別の事を、更に不思議に感じるように、また頭をかたむけはじめた。
兎代子わ又むしろ、安堵したように、
『ほんとにおかしな人達だよ。』
と、つぶやきながらそこを離れた。
時その時！　一體なら鏡の中の姿わ、そのまゝ消えこんでしまうべきだ。ところが兎代子がそこを離れるにつれて、鏡の中の兎代子わ、たちまちそのわくを越えて、鏡の外まで出てくるでわないか。

と見た乳母わ、思わずアッと顏を伏せたが、再びそれをもたげた時わ、目の前に二人の兎代子が同じ顏に同じ笑をうかべ、同じ着物の同じ姿勢で、じつとこちらを見て居るでわないか。
乳母わ驚きあきれるばかり、はてわ又氣味の悪さに、急いでそこを退こうとすると、
『乳母や、どこえ行くの？』
とばかりに、二つの口から同じ言を云いながら、左右からその手をとつた。
取られた手わさすがに振りきれない。しかしどちらが眞のお孃さまかと、見張つた眼に双方を見くらべ、ふるえる聲に力を入れて、
『オ、お孃さま！　どつちがほんとのお孃さまでございます？』
と、思い切つて聞いて見ると、
『なにをいうんだねエ。私がほんとうの兎代子で、この人わ鏡の影なんだよ。』
と、いうのがあいにく双方の口から、同じ聲で同じ時に出るのだから、とても見わけも聞きわけもできない。
この上わ仕方がない。鏡わ人の拵えた物、人の迷いで狂いもあろう。水わ天然の物だから、人の力で及ばぬ事を、天の力で判じてもらおうと、乳母わようやく氣付いたから、二人に手を取られたのを幸い、それを双方に捕えたまゝ、庭えと下りて、池の岸まできた。
そして池の水をのぞいて、

『これ正直な水鏡や、お二人の何方が眞か、僞か、こゝで寫して見せておくれ！』

と、云いながらぢつと目を見はつた。

すると、不思議にも池の鏡わ、左の兎代子を正しく寫したが、右にいた孃の姿わ、おぼろげにさえ影を止めない。

『オ、それでわ左のお孃さまが、ほんとの兎代子さまでございましたか。』

と、云いながら又見あげた時、その左の兎代子わ、そこにじつと立つているが、右の孃わどこへ行つたか、足跡さえ殘していない。

『まア、變な事があればあるものだ。』

と、又しても驚く乳母を、兎代子わかえつて笑いながら、

『どうしたのほんとうに、さつきから變な事ばかりいつてるぢやないの。私ちつともわからないワ。』

と、どこまでも仇氣ない。さてわ何も御存じないのと、乳母わ又氣の毒にもなつた。そこでさつきからの不思議な事を、くわしく話して聞かせた上、今も今であの鏡から、あの僞せ物の兎代子が出て、乳母の眼をくらまそうとしたのを、やうやく水鏡の力によつて、たぶらかされずにすんだことまで、殘らず兎代子にうなづかせた。

それを聞いた眞の兎代子わ、しばらくじつと考えていたが、再び池の面に向つて、じつと自分の顏を見ながら、

『アヽ、こんなよい鏡があるのに、何であんな魔物の鏡に、今までだまされていたろう。』

と、悔しそうにつぶやくと、乳母わ又その側から、

『それと申すのもお孃さまが、あんまり鏡がお好きだものですから、それでとう〳〵鏡の中に、そんな魔がさしたのでございましよう。』

『全くそうだよ。鏡わ女の魂だと云うが、それわ心をうつす爲の鏡で、姿を寫す鏡でわあるまい。アヽ、私の今日までの心得ちがいわ、今日のこの水鏡で、氷のようにとけてしまつたよ。ドレあの魔鏡めも、氷のように碎いてやろう！』

兎代子わ居間え走つてかえると、例の鏡を惜し氣もなく、履脫ぎの石にうちつけて、粉微塵にくだいてしまつた。

八千代島

上　玉の行方

玉子わその名のとうり、玉のような美しい少女でした。それでいて、氣性わまるで男のようで、活潑というよりわおてんばで、むしろ冒險好きでありました。ですからふだん遊ぶのにも、同じ年頃の女の子のように、あねさまをこしらえたり、飯ごとをしたりすることわなく、繩飛びだの、ブランコだの、玉投げなぞをしていました。

この夏もある海濱え海水浴に行つて、二週間ばかりいる中に、すつかり泳ぎが上手になつて、後にわ男の子にもめつたにいかれない、沖の離れ岩のところまで、ひとりで泳いで行つたといつて、

皆の評判になつたくらいです。

この玉子にわ、一人のおぢがありました。その人わ海軍の士官で、去年の暮れから南洋の方え行つていましたが、今度の御大禮で、軍艦がみな引き揚げになつたので、おぢもめでたく歸つてきましたが、ふだんからこの玉子を、大そう可愛がつていたものですから、御用がすむとすぐこの家え玉子にあいにやつてきました。

玉子の方でも、このおぢわ大好きですから、この間貰つた横須賀からの繪葉書に、

『無事に歸つてきたよ、二三日中にわ行くよ。そして、面白いお話をしてあげるよ。またお前にわいゝ〳〵おみやげがある。なんだろうあたるかエ？』

と、書いてあつたが、なにより樂しみで樂しみで、夜もろく〳〵寢られないくらいでした。

ところえおぢの聲がしだものですから、まだその靴もぬがない時分から、玄關までとんで出て、おぢの肩にとりついたり、その腕をかゝえたりして、夢中になつて喜んでおります。

『ハヽ、玉ちやん、あいかわらず元氣だネ。』

『エヽ、おぢさんおめでとう！　なんだかまつ黒になつてねエ。』

『そりやア仕方がない。今まで土人とばかりお友達になつてたんだもの、玉ちやんのような可愛い子わ、あいにく南洋にやアいないからねエ。』

と、そのほうべたを撫でながら、ようやく奥えきました。

奥の座敷にわ、父も母も、兄も姉もいて、おぢ一人をとりまいてわ、しばらく話に花をさかせました。が、玉子わむしろ不平です、このおぢさんわ自分のおぢさんだから、なんでも自分一人でつかまえて、自分一人が話をきいて、自分一人がおみやげを貰いたいのです。

その中に、好いおぢさんわ、玉子の方をふりむいて、

『オヽ、玉ちやんお約束だつたネ、お前にやアこのおみやげ！』

と、いゝながらポケツトの中から、紫色につやのある、まるい玉をだしてくれました。

『まア綺麗だ、これなアに？』

と、うれしそうに受け取つてみますと、その大きさわ、玉子の掌にようやく乘るくらいで、妙にドツシリと重みがありますが、そのくせ石でもないようです。

『これなんの玉、おぢさん！』

と、玉子が重ねて尋ねたとき、おぢわニツコリ笑いながら、

『それわお前つばきの實だよ。』

『つばきの實？』

玉子わ今更のように見なおしますと、一座の者も珍らしそうに、

『まア見事なものだねエ。』

と、口を揃えて見いりました。

おぢの士官わまたいゝました。

『もつとも只のつばきぢやない、それがほんとうの玉つばき、八千代の壽命を保つという、世にも貴いつばきの實なのだ。』

『ぢやアこれ食べられるの?』

『いゝえ、それわ食べるものぢやない、たゞ大切にして持つていて、そのつやを消えないようにすればいゝんだ。そしてまたそのつやが、もつと鏡のようになつて、人の顔が寫るようになると、その人わいつても若くいられるという、不思議な力があるのだよ。ネ、お前わちようど玉ちやん、だからこの玉を持つて來てあげたんだ。』

『まアほんとにありがとう。』

と、今更改めて禮をいゝましたが、それにしても氣にかゝるので、又聞かずにわいられませんから、

『ねエおぢさん! この玉どこで買つてきたの?』

と、たゞしますと、おぢわ笑いながら、

『いや、さんご珠や眞珠ぢやアないから、玉屋え行つたつて買えるものぢやない。』

『それぢやアどこで取つてきたの?』

『ウン、それを話してあげなけりやならんネ。一たい南洋というところにわ、小さな島が澤山あるが、中にもわが日本から、眞南に海上八千浬行つたところに、綺麗な島が一つある。島中が皆つばきばかり、しかも六抱え十抱えもあろうという、大きな古本が茂つているのだ。なんという島だと思つて、地圖をしらべても出ていない、さてわ今度の新發見に違いないと、日本風にこの島を、八千代島とつけてやつた。良い玉つばきの八千代という事が、よく歌なぞに出ているからだ。』

と、云いかけます。玉子われ知らずのりだして、

『まア面白いのネ。それぢやアおぢさんが發見して、おぢさんが名をつけてやつたのネ。』

『おぢさん一人で發見したんぢやないが、兎に角日本人が初めて見つけた島だから、日本風の名をつけて、そのまゝ日本の旗もたてゝきたんだ。』

『愉快々々! わたしそんなこと大好きですワ。』

と、さもうれしそうにこおどりするところわ、まるで男の子のようです。

『ところで玉子、その玉わどこで持つて來たとおもう。』

『その島のつばきの實なんでしよう?』

『それわそれにちがいないが、なか〳〵そうむぞうさにわ取れないんだ。なにしろこの實わ、これでもう八千年たつてるのだから。その八千年もの間、風にもとばされず鳥にも食われず、また朽ちも腐りもしないで、こうして立派に殘つているというのが、さすがの八千代島にも、八千個のつばきの實の中に、ようやく一つあるかないのだと、土人が話して聞かせてくれた。そのくらいの珍ら

しい玉だから、まあ不思議の力もあるのだ。それで土人の酋長が、大切に頸にかけていたのを。私わなんでも貰つて來ようと思つて、金貨を出したが賣つてくれない。たゞお前が編んでくれた、あの絹糸の巾着を見せたら、さも欲しそうに手を出したから、そこで巧く取りかえてきたんだ。して見るとお前にわ、よく〳〵緣のある物だから、大切にして取つておゝき。』

と、由來がだん〳〵わかるにつれて、玉子わ不思議の緣のある、不思議の玉をうれしそうに、なお掌上でもてあそんでいますと、どうしたはずみかその玉が、コロリコロリとその手から落ち、膝をすべるとコロ〳〵コロ〳〵　後を追う間に速くも走つて、あれよ〳〵という間に、たちまち影も見えなくなりました。

『アラおぢさんどうしましよう?』

と、玉子わ泣聲になつておぢにとびつきました。おぢわそれに答える勢もなく、夢見る人のようになつております。

『だが不思議だ。まるでひとりでに轉がるようだつたナ。』

『はやく取つて來てちようだいよ。』

と、玉子わおぢの膝を搖ぶりましたが、おぢわたゞ頭をかいて、

『そんな無理をいつても困る。なんしろ海上八千浬……南洋の果なんだからなア。』

中船の正體

せつかくおぢさんに貰つた大切のおみやげの玉が、たゞ掌にのせたばかりで、すぐどこえか落ちていつてしまつたのですから、玉子わ不平でなりません。しかもその玉の轉げ方が、まるでその玉に魂があつて、わざと逃げていつたようにも見えましたから、それがまた玉子わ、いかにも意味のある事らしくてなりません。

『おぢさん!』

と、玉子わ改めておぢを呼びました。そしてその返事も待たず。

『それぢやアあの玉わ、また南洋え行かなけりやアないのネ?』

と、念をおしました。

『ウンそうだよ。ところが海上八千浬……また行くといつたつて大變だからネ。』

『かまわないことよ。八千浬だつて八萬浬だつて、ハア、私取りにゆくワ。』

と、思いこんでいゝました。

『ハ、、。えらい元氣だ、お前のおてんばなら行けるかも知れんねエ。』

と、おぢの方でわじようだんに受けている。

その中に玉子わ、自分の部室えはいつて行きましたが、帶を締めなおして支度をすると、すぐ庭

から飛び出しました。庭にわ古い池があつて、その池の水わ大川から引いてあり、その大川の水わ、やがて海えも注いでいるのです。

『それだからこの水も、遠い〳〵南洋の果まで、ずつとつながつているのに違いない。』

と、玉子わさもなつかしげに、池の岸えきて立ちました。

そしてじつと水を見つめていますと、氣のせいかさつきの玉も、この池に落ちたのでわないかと思われてきました。

すると不思議でわありませんか、見るみる中にその池が、さも大海になつてしまつたように、前がひろ〳〵と開けてきて、目にさえぎる物といつてわ、たゞ際限もない浪ばかり。そして自分わちようど濱邊の岩の上に、ひとり立つているような氣になりました。

『一たい見當わどこだろう?』

と、頭をあげて見まわしますと、空にわちようど一羽のつばめが、何もない海の方えとさして、小石の様に飛んで行きます。

『ア、あのつばめの行く方角だ……つばめが南え歸るのだから、彼方が南に違いない……南、南洋! 南洋わきつとこの見當なんだよ。』

と、玉子わ獨りうなづきますと、思わず膝をのばし、足を爪立てゝ、海のむこうを見こみながら、『あゝ、つばめが羨ましい! こういう時に羽根があつたらねエ……飛行機に乗れたらばねエ!』

と、又しても太息をついていました。

その中に海のむこうえ、ヒヨツコリ浮き出した物があります。初めわ木の葉のようでしたが、だん〳〵それが近くなつてきて、大きくなつたところを見ると、それわ一そうの船でした。

しかもその船わ、奇妙な形をした丸木船で、その上にわ、頭に鳥の羽根をつけ、腰に貝殻の飾りをつけた異様ななりをした人間が、五六人でかいを漕いでおります。

玉子わ自分の手を双眼鏡のようにして、ぢつとその船を見ますと、それわ今まで畫や寫眞で見た南洋の船に違いなく、そしてその上の人間わ、そのゆかないのわ、——土人ならもつと色の黒いはずなのに、この船におる人々わ、いづれも象牙のように白く、そして顏だちの優しさが、どうしても少女らしい事でした。

『ぜんたい何所え行くのだろう?』

と、いぶかりながら見て居りますと、その船わ浪に搖られながら、次第にこちらえ寄つてくるではありませんか。

玉子わとう〳〵われを忘れて、

『オウイ〳〵!』

と、呼んでみました。こう呼ぶとむこうでもきこえたと見えて、上にいた五六人の顏が一時にこちらえ向きなおりました。

その時見るとその顔が、いよ〳〵美しく、愛らしく、そしてなつかしくてなりません。玉子わまた聲をかけて、

『入らつしやいな〳〵！』

と、手まで動かします。

と、船の方の者わ、なにか互にうなづきあいましたが、今度わさきから聲をかけました。

『あなたわそこになにをしているんです？』

『私わまた……おぢさんに貰つた玉をなくなして、こゝまでさがしに來たんです。』

『その玉とわなんの玉です？』

『南洋の八千代島で取つてきた、不思議のつばきの玉なんです。』

と、玉子わなにもかもうちあけました。

それを聞くと船の少女わ、又顔を見あわせて、なにか話しあつていましたが、やがて玉子の方をむいて、

『まア不思議ですねえエ。私達のこゝまで來たのも、やつぱりその玉をさがしに來たんですよ。』

と、云います。

『アラ、それぢやもしやあなた方わ、その八千代島の方ぢやないの？』

『エ、そうです。その八千代島からきたんです。』

『でわその捜していらつしやるのが、私の貰つた玉なのか知らん？』

『きつとそうでしようよ。』

『でもその玉なら、私のおぢさんが頭さんに、絹糸の巾着ととりかえて來たんですもの……！』

『ところがその絹糸の巾着が、あれから間もなくほどけてしまつて、見るみる中にその糸が、風に飛んでなくなつてしまつたのです。だから又あの玉を、取り返しにきたのですが、それぢやアもうないのですか？』

『えゝ、たしかに掌にのせていたのに、ひとりでに轉げ落ちたきり、どこえ行つたか見えなくなつてしまつたんです。』

『まア……！　それぢやアやつぱり玉の奇特で、元の島え歸つたかもしれませんねエ。』

『それなら早く歸りましよう。』

と、こんな事をいう中に、少女達わ又かいをそろえて、もと來た海えと漕ぎ戻そうとします。

玉子わなんで見ていられましよう。

『ア、待つてくださいよ。八千代島え歸るなら、どうぞ私も連れてつてください！』

と、しきりに聲をかけました。

船の少女わそれを聞いても、まるで耳えもはいらないように、さつさと漕いでゆこうとします。

まゝよこの上わ仕方がないと、玉子わたちまち岩の上から、海の中えと飛びこみました。そして逆

まく浪の中を、抜き手をきつて泳ぎました。

『その船待つて〳〵！』

と、聲の限りに叫びながら……。

下絲の救い

玉子わ暑中休暇の間、始終海水浴をしていましたから、泳ぎわなか〳〵上手です。けれども今わ秋の末、水が冷たくなつていますから、手足わ達者に働いても、體が冷えてたまりません。聲をかぎりに呼びたてる、その聲わやがてかれ、精の限り泳ぎたてる、その精もはやつきそうになつてきました。

と、不思議にも波の中から、細い紐のようなものがでてきて、玉子の體にまといつきました。藻にからまれても危いものです。それにこんな紐にまとわれてわ、たちまち手足の自由をうしない、おぼれてしまう他わありません。

今わ玉子も覺悟しました。が、できるだけわ兎れようと、そのまといつく紐を、力の限りひきちぎろうとしますのに、細い割にわいかにも丈夫で、なか〳〵ちぎれないばかりか、かえつていよ〳〵力づよく、こちらの體をからめてしまいます。ところが又不思議にも、その紐わ玉子をからめて、底え引き込むと思いの外、かえつてさもかる〳〵と、船をさして引きよせました。

それを見ると船の中の者わ、又一度にかいを休めて、

『ソレ、その子を助けてやれ！』

『怪我しないように、はやく〳〵！』

と、皆ふなべりに立ちよりました。

ところえ玉子の小さな體わ、波にのせられて浮きあがりましたから、船の上の少女達わ、急いで手をのばしまして、二三人で力をあわせ、玉子をとう〳〵抱きあげました。抱きあげられると氣がゆるんで、玉子わ一時氣が遠くなりますと、少女達わ心配して、

『アラ、もう死んでしまつたのか知らん？』

『まだお腹が溫いようよ。』

『そんならきつと助かるでしよう。』

と、いう中に少女達わ、何かうなづきあつていましたが、それというと、急いで船をこぎ立てゝ、やがてとある小島にこぎつけ、そこの陸え上りますと、玉子の體を皆でかついで、まるで胴揚げでもするように、エイヤエイヤと搖りたてました。

するとその運動で冷えきつて居た玉子の體に、だん〳〵熱が通つてきますと、息もまた吹きかえして、フツと可愛い目をあけましたが、自分わ今見なれない島え來て、さつきの少女達に胴揚げされていますから、まるで夢でも見る心地で、

『まア、私……どうしたんでしよう?』

と、われ知らず叫びました。

それと見て少女達わ、

『オヽ、氣がついた。生きかえつた。めでたい〳〵!』

と、云いながら、はじめて玉子をかきおろして、静かに草の上におきました。

玉子わホツと息をつきました。氣分わどうやら落ちつきましたが、まだ手足がきゝません。でふと氣がつきますと、自分の手足わ、さつきの細紐で、まだくゝられていましたが、よく見るとその細紐わ、綺麗な絹の絲のようで、しかもどうやら見覺えがあります。

と、また少女の方でも、その細紐を見つけまして、

『アラ、妙だ。この絲わ、この間の巾着の絲よ。』

と、一人が云えば又一人が、

『ア、そう〳〵まつたくあの絲!』どうしてこんなところにありましたろう!』

と、いうので玉子も思いだし、

『まア、それぢやア私の編んだ巾着の、これがほつれた絲なんでしたねエ。』

と、我ながら感心してしばらく見とれていましたが、少女達が喜んで、すぐに解きにかゝるので自分でも一しよになつて、體にまといついた絲を、手ばやくほどきにかゝりますのに、鹽氣にぬれた絹の絲わ、なか〳〵ほどけそうも無いはずですが、見る〳〵中に體をはなれて、前に手繰りよせられました。

と、また少女達わ、

『これで絲わ返つたけれど、元の巾着にならなければ、なんの役にもたゝないわねエ。』

と、又當惑そうにいゝます。玉子わこれを見て、

『でわお待ちなさい。私がこゝで元のとうり、巾着に編んであげましよう。その代り巾着ができたら、私の玉も返してくださいますか。』

と、念をおして聞きました。

少女達わ顔見あわせましたが、なんで異存がありましよう?

『それでわ、はやく編んでください。玉わかえるようにしてあげますから。』

と、いう間に玉子わ、絲を手に取りあげましたが、編むにわ道具がいりますのに、それがあいにくありません。

けれども、見ると少女達わ、かみにピンをさしていますから、それを三本かりまして、これを編棒にかえました。少女達わものずきに、玉子の手元を見ております。

なれない道具で困りましたが、玉子わ玉が欲しさの一心、指をこらして編みはぢめました。少女達わ感心して、

『まアお上手ですわねエ。』

『どうしたらあんなにできるのでしょう。』

『私達も習いたいものねエ。』

など〻見とれている中に、間もなく巾着わできあがりました。

『さ、これで可いでしょう。』

『まアほんとによくできました。これならもう王さまも、玉を返しておあげなさるでしょう。』

と、い〻ながら少女達わ、その巾着をうけ取りますと、こわいかに今までの姿わ、たちまち消えてなくなりました。

『アレツ、皆さんひどいのねエ。』

と、玉子わあわて〻聲をたてると、

『コレ、なにをいつてるのだ?』

と、だしぬけにおぢの聲です。驚いてふりむきましたら、こ〻わ自分の家の庭で、池の岸にたつている後に、おぢわちやんとたつていて、その手にわさつきの玉をもち、

『これわ私が拾つておいたよ。』

と、いつて手に持たせてくれました。

『アラおぢさん! よく玉があつてねエ。』

『つい私の座蒲團のしたにあつた。』

『まア、たしかに轉がつておちたとおもつてたのに……』

と、今更不思議そうにその玉を見ましたが、まさしくさつきのに違いありません。それにしても氣になるので、

『おぢさん! 私のあげた巾着、あれがほどけていたんですよ。』

と、今自分のなおした事を話すと、おぢわ手をうつて、

『ウン、それで玉が歸つたのだな。』

と、しきりに感心しておりました。

人形の着がえ

上　君ちやんのお召

玉枝わ大の人ぎようずきでした。たいていの女の子わ、みをかわいがつて、それに君ちやんという名までつけて、まるで自分の妹のようにしていました。それというのも、自分にわかつて君ちやんといふ、かわいゝ妹があつたからです、それが二つの誕生日を過ごすと、間もなく死んでしまつたからです。

で、ほんとうの君ちやんの死んでからわ、この人形の君ちやんを、まつたく自分の妹のようにして、時々わこの人形を相手に、いろ〳〵なお話をしているところわ、はたから見ると、まるで氣

狂のようでもありました。

玉枝さんの好きなのわ、この君ちやんのほかにもう一つありました。それわ一びきの猫でした。猫の名わ『鈴や』といつて、それわ丁度君ちやんのうまれた時分、隣の家でうまれたのを、分けてもらつておいたのですが、たいていの猫わ子供嫌いなのに、この鈴やばかりわ、すぐ玉枝になつきますので、玉枝の方でもかわいがつて、時々わ君ちやんのお相手をさせていたのです。

一たいこの君ちやんの着物わ、今迄わみなお母さまにぬつてもらつていました。ところが玉枝も、このごろわ學校の裁縫で、單衣ぐらいわ縫えるようになりましたから、さアぢつとしてわいられません。

『これから君ちやんの着物わ、みんな私が縫つてあげるワ。』

と、非常な意氣ぐみで、お母さまから巾をもらいまして、直ぐと仕立にかゝりました。それわ友禪の單衣だつたのです。そろ〳〵暖くなつてくるから、もう單衣でもよかろう、もし寒い日があつたら、羽織を着せてやればよいと、精出して縫いましたら、一日半でできあがりました。

玉枝わうれしくてたまりません。

『君ちやんや！　さア好いお召ができましたよ。今までのわばつちくなつたから、着かえさせてあげましようねエ。』

と、いゝながら着せかえますと、それがまたよくにあいますので、一そう喜んでいましたが、もとより人形といつても、自分でわ人間のように思つているのですから、夜になるとまたねまきに着かえさせるようにしていました。

と、せつかくその着物のできあがつた、その晩の事でした。玉枝がよく寢ておりますと、枕元でシク〳〵泣く聲がしました。初めわ耳にわいりませんでしたが、その中に聞いてみますと、

『寒い〳〵！　ア、寒い〳〵！』

と、いうのです。玉枝わ頭をあげて、

『誰？　そんなところに泣いてるのワ？』

と、いゝながらよく見ますと、それわ人形の君ちやんでわありませんか。しかも、その君ちやんわねまきも着ないまる裸ですから、玉枝わびつくりして、

『まあ君ちやん！　どうしたの？　裸で、風邪ひくぢやありませんか。はやくこつちえおはいんなさい！』

と。急いで自分の床の中え抱きこみました。

『おねまきわどうしたの？』

と、聞きますと、君ちやんわまだふるえながら、

『とられちやつたの？』

『ぢやア、縫つてあげたあのお召わ？』

『それも取られてしまつたのよウ。』

と、君ちやんわまた泣きだしました。

玉枝われ知らず身をおこして、

『ナニ、あれも取られてしまつたつて？　まアひどい？　誰がとつたの？　泥棒が？』

と、聞きますと、君ちやんわまた泣きながら、

『誰だか知らないけれども……取られちまつたの。』

『ぜんたいどうして取られたのよウ？』

と、玉枝わせきこんで聞きました。

君ちやんわさも面目無さそうに、

『あの私……好い着物縫つてもらつたんで、うれしくつて〳〵、今夜よく寝られなかつたものだから、また起きだして、もう一度着ようと思つたら、枕もとにもうないの、仕方がないから、またねまき着ようとしたら、たつた今脱いだばかりなのが、また見えなくなつちやつたの。……私……どうしたらいゝでしよう？』

と、また泣きだします。

『まアおかしい……そんなに目の前で取られてるのに、誰がとつたかわからないの？』

『エ、誰だかわからないけれども……なんだか黒いような物が、障子の方え駈けてつたのだけわ

見えたの。』

『ぢやアそれが泥棒なんだよ。けどもほんとに泥棒なら、私の着物を持つてきそうなものを……君ちやんのばかり持つてくつて……よつぽど變な泥棒だわねエ。』

と、玉枝わ少し考えましたが、思いあたつたとみえまして、

『ア、いゝ事がある。待つといで……きつと今にその着物を、ちやんと取りかえしてあげるからもう泣かないで〳〵、さアこつちの着物をお着なさい！』

と、起きていつて古い着物を取りだし、それを君ちやんに着せまして、元の床にいれてやりましたら、君ちやんも安心したように、やがてスヤ〳〵と眠つてしまいました。

そのあとで玉枝わ、鈴やのところえ出かけました。鈴やわいつも夜になると女中部屋の側にいるのです。それわ臺所え出るいたずら者を、そこで見張つているのでした。

『鈴や！　鈴や！』

と、玉枝わ聲をかけますと、

『ニヤア！』

と、輕い返事をしまして、直ぐと鈴やわでてきました。

『お前まア、なにをしてたんだネ。大變な盜人がはいつたのに？』

と、しかるようにいゝますと、

『盜人でございますつて？　そんならポチ（犬の名）さんにおつしやつてください！　私のお役目わ鼠のほうでございますから。』

『その鼠が泥棒なんだよ。可哀そうに君ちやんが、着物を取られて泣いてるぢやないか。お前早く行つて取りかえしといで！』

『ナニ、鼠がお人形のお召を？　それわ大變でございます。』

と、鈴やわ急に眼をまるくすると、グツと天井をにらみました。

中　花嫁の晴れ着

こゝにまた、この玉枝の家の天井裏にわ、大勢の鼠がすんでおりました。中でも梁下の忠右衛門という、物持ち鼠の二番娘の、福子という小鼠が、今度いゝ縁があつて、藏前の根津太郎という、これも家柄の若鼠のところえ、いよ〳〵嫁入りすることになりましたので、いよ〳〵何日の何時にわ、大黒さまの神前で、めでたく式をあげることになりましたが、これについて忠右衛門のところでわ、かわいい娘の一代の晴れに、できるだけ立派な支度をしてやろうと、それにわ金を惜しみませんでした。

ところを見こんでやつてきたのわ、旅商人の忠七でした。

『ヘイ、今日わ。』

『オヽ、忠七か、久しくこなかつたな。』

『ヘイ、ごぶさたしてすみませんでした。實わこないだから上方の方え、仕入れ物にまいつておりましたので、ちつとも存じませんでございましたが、承わればお嬢さまが、今度いよ〳〵お輿いれだそうで、まことにおめでとうございます。』

『イヤ、どうかこうか話がまとまつて、私も安心しましたよ。』

『つきましてわ、支度のところわお出入りの呉服屋さんから、定めし一さいお納め申したろうが、實わ私もちよつとあちらで承わりましたから、ぜひお役にたてたいと思いまして、わざ〳〵持つてまいつた物がございます。』

『オヤそうかい。それわなんだネ？』

『お召でございますよ。しかもこれから夏向きにわ、ぜひ無ければならないと申す、友禪ちりめんのお單衣でござります。』

『ナニ、友禪の單衣ですつて？　イヤ、これわちようどよかつた。實わそういう夏物わ、後からでもよいと思つてたところだが、できればそれに越したことわない。』

『できればどころぢやございません。ちやんとお仕立てまでできておりまして、お手を通すばかりになつております。さアどうぞこれを御覽下ださい。』

と、いゝながら風呂敷包みをといて、中から取り出して見せたのわ、見事な友禪の單衣でした。

忠右衛門わひと目見るなり。

『イヤ、これわすてきだ、りつぱ〳〵！　さぞ娘が喜ぶだろう。オイ、福子や、福子や！』

と、呼びます。福子わ奥の間で本を見ていましたが、父に呼ばれてすぐ來て見ました。

『コレ御覽！　忠七が上方から仕入れてきたんだそうだ。どうだ見事な友禪ぢやないか。』

と、ひろげて見せれば、たゝんであつた時よりも、一そう綺麗に模樣が引つたちます。

『まア好いのね。』

福子わしばらく見とれております。

『どうだ好いがらぢやないか、直ぐに買おうかな？』

『エヽ、どうぞ！』

『だが寸法が合うかしらん？　ちよつと袖をとうしてごらん。』

『エヽ、待つて下ださいよ。』

と、福子わそれを次の間え持つていつて、急いで着かえて見ましたが、ゆきもたけもちやんとあつて、しかも模樣がよくにあいます。

『ネ、お父さま。いゝでしよう。』

と、とろけそうな顏して見せにきました。忠右衛門もうれしそうに、

『オヽ上等々々！　これわなによりだ。忠七わほんとに好い物持つて來てくれたな。』

『ヘヽヽ早速お間にあいまして、私もこんなうれしいことわございません。』

『ついてわ代わいくらだネ？』

『新柄でございますから、ちとお高うございますが、三十六圓いたゞきとうございます。』

『三十六圓が四十圓でも、こんな好いのなら惜しかアないよ。』

と、忠右衛門わ云いなり次第に、金を直ぐとはらつてやりますと、忠七わ大喜びで、その金を懐中に入れると、そのまゝこの家を出ましたが、出るとすぐ舌を出して、

『ハヽ、うまく行つたぞ。』

と、ひとりチユウ〳〵なきながら、どこえか行つてしまいました。

さてその中に日が來まして、いよ〳〵福子わ根津太郎と、大黒天の神前で、めでたく杯をかわす事になりました。双方の兩親親類、なこうど、介添と鼠達わ、みな式場にいならびました。

大黒天の神主わ、神前にお供物をそなえ、祝詞をあげてしまいました。これからいよ〳〵、みこ鼠が、二人の前え杯を運ぼうとしますと、こわいかに表の方で、急に騷がしい音がしましたが、

『ヤア大變だ、猫が〳〵！』

と、いう聲がしますので、居ならんでいた鼠達、思わず顏色をかえまして、みな中腰になりますと、そこえやがて飛びこんできたのわ、大きな一匹の女猫でした。

『ヤイこの泥棒鼠めが！』

と、いうよりはやく花嫁の福子に、たゞひと口におどりかゝりました。

福子わ驚くまいことか！　キヤツというと三寶を蹴倒し、杯も銚子もひつくりかえしたまゝ、神殿の奥えと逃げこみました。

女猫わつゞいておいかけましたが、さすがに神殿にわ踏みこめません。少しためらつておりますと、それを見て神主鼠わ、早速の氣轉でお供物の鯛を、その眼の前え投げ出しました。と、女猫わその鯛に、いきなりグツとかみつきましたが、それを喰べているうちに、鼠達わその場を逃げて、はやくも姿を隱してしまいました。

それとも知らずくだんの女猫わ、大きな鯛の頭から尻尾のさきまで食べ盡して、舌なめずりをしておりましたが、ふと氣がつくと、鼠共わもう一匹もいませんので、さてわ一杯……でわない、うま〳〵一匹食わされたかと思うと、悔しそうに身ぶるいして、食いのこした鯛の骨を、あら〳〵しく蹴飛ばしながら、なおも奥の方え飛びこもうとしますと、たちまち後の天井の方で、

『チウ〳〵チウ！』

と、笑う聲が聞こえます。女猫わ又その方をふり向き、

『にやんだと？』

と、一聲叱りつけますと、又しても、

『チウ〳〵〳〵！』

と、大勢がばかにしているでわありませんか。

下　大黒天の禮物

女猫というのわ玉枝のところの、あの『鈴や』でありました。鈴やわ主人の大切な人形が、せつかくこしらえてもらつた着物を、泥棒に取られて裸になつたのを、てつきり天井裏の、鼠どものしわざとねらいをつけたものですから、さてこそその婚禮の場え、ふいに躍りこんできたのです。

ところが大黒天の神殿にそなえた、お供物の鯛にすつかり氣を取られたものですから、とう〳〵相手を逃がしてしまつて、殘念至極と思つているところを、又ぞろ鼠共に笑われて、さア悔しくてたまりません。

が、思えばそれも自分が惡かつたのだ。この大切な役目の間で、食べ物に氣を取られるなぞという、さもしい心をおこしたからだと思えば、誰をうらむ事もできません。

ことにこゝわ神さまの前。たとい惡鼠をとらまえるにしても、こういう神聖な所を荒らしたのわまつたくこつちの心得ちがいと、ようやく思い返しましたから、仕方がなしにスゴ〳〵と、ひとまづ鈴やわ引さあげました。

鈴やわ、シオ〳〵臺所え歸つて來ますと、誰かわ知らず自分より先に、溝の穴から床の上えと、

忍びこむ者があります。

もとより猫わ眼が速いものです。それを見ると足音をひそめて、そつとその後をつけました。と わ知らず、曲者わやがて玉枝の居間の方えゆきました。が、さすがに直ぐにわはいりかねて、ふすまの外からそつとのぞいていますのに、後にわ眼がありませんから、鈴やがこつちから見ていると わ、少しも氣がつかない様子です。

で、鈴やわ柱の陰から、よくその曲者を見ますと、これわ正しく溝鼠の、しかも劫を經た奴ですから、

『さてわこやつが、盜んだのだナ。それでこの間に味をしめ、今日もまた惡さをしにきたのだろうよし、どうするか見ていろ。』

と、ひそかに爪を磨いていると、それとも知らぬ溝鼠わ、すつかり中の様子をうかゞい、今度わふすまの根のところを傳つて、チヨロ〳〵と中えはいこみました。

それを見ると鈴やわ、すぐとその後え忍びよつて、わざと自分わ中えはいらず、今まで鼠ののぞいていたところに、じつと身をひそめておりました。

と、間もなく以前の溝鼠わ、口に奇麗なリボンをくわえて、そこから忍び出ようとします。ところをすかさず飛びかゝつて、

『おのれツ！』

と、いゝながらおさえつけると、曲者わ不意をくらつて、取つて來たリボンをそこえ投げ出し、あわてゝ逃げようとしましたが、なか〳〵猫わ放しません。

『この泥棒め！　もうこつちの者だぞ。』

と、いうよりはやくそのリボンで、四つの足を縛りあげてしまい、尻尾を持つてグイ〳〵と、逆さに引つ立てゝいきました。

ところえ物音を聞きつけて、玉枝わ驚いてかけつけました。

『まア鈴や！　大出來々々！　よく泥棒をつかまえてくれたネ。』

『オヽ、お孃さま！　うつかり側えよるとかみつかれますよ。なにしろこいつわ太い奴でございます。時もあろうにまつ晝間、物をもあろうにお孃さまのリボンを取つていこうなんて、ほんとに憎い奴でございます。こないだのお人形のお召も、きつと此奴が取つたんでございましよう。これから白狀させてやりますから、そこでお聞きなすつて下ださい。』

と、玉枝にわ席につかせ、これから鈴やわ溝鼠にむかい、

『ヤイ、惡鼠、この間のお人形のお召も、貴樣が取つたに違いあるまい。さア尋常に白狀しろ！』

と、きびしく調べたてました。すると溝鼠わ、ポロ〳〵涙をこぼしながら、

『アヽ、惡いことわできないものでございます。まつたくこの間お人形のお召を、無理にはぎとつたのも私でございます。』

『なんだつて、そんなに惡さをしたんだえ?』

『忠右衛門のところのお嫁入りに賣りつけて、金もうけをしようと思つたのです。』

『でわこのリボンわどうするのだ。』

『これもお嫁さんのところえ持つていつて、頭かけに賣ろうと思つたからです。』

『それでわあの忠右衛門から、お前が頼まれて盜みにきたのか?』

『いゝえ頼まれたのでわございません。忠右衛門わなにもしらずに、たゞ喜んで買つたばかりでございます。』

『それにしてもあのお召を、平氣で着ているとわけしからん。ドレ、行つて取り返してやろう。』

と、鈴やわ天井を見こみますと、その聲がきこえましたか、天井でも聲がして、

『イエ、お出でにわおよびません。只今それえお返し申します。』

と、いうかと思うと大勢の鼠が、ぞろ〳〵天井から下りてきましたが、玉枝の前にズラリとならびますと、中から大きな頭鼠が、一匹前え進みでまして、

『これわ〳〵玉枝さま、存ぜぬ事とわ申しながら、お人形さまの新らしいお召を、娘の衣裳に求めましたのわ、かえすゞも申しわけがござりません。たゞいまお返し申しますから、どうぞお改め下ださいまし!』

と、云いながら、持たせてきた唐びつの中から、以前の衣服を出してかえそうとしますと、玉枝

わそれをとめまして、

『イヤそれにわ及ばないよ。知らずに買つた物ならば、お前の方に科わない。ことにお嫁入りの役にたつたのなら、それわそのまゝお祝いにあげよう。そして私のお人形にわ、別に新らしいのをこしらえるから、けつして心配おしでない。』

と、綺麗にいつてやりました。

それを聞くと鼠共わ、なに思つたか一時に、フツとその場で消えましたが、その代りにわ人形の着物が、幾枚も〳〵山のようになつて、その前に積みあげられました。

『オヤこれわ何うしたのだろう?』

と、玉枝と鈴やわあきれております。その時涼しいこえがして、

『これわ皆私からの禮ぢや。』

と、いうので、初めて氣がつきましたら、そこに大黒さまが立つていらつしやいました。

笹舟草紙

上　夕立の巻

こんもり茂つたしいの木の蔭にわ、晝の日脚もとゞきませんから、清く涼しい風の手わ、いくたびとなく下草をなでにきます。

その草の上に、むしろ二枚ばかりひろげて、今しも飯事に餘念のないのわ、水無子と二人のお友達とでした。

水無子わお母さん、お友達の一人わお嬢さん、今一人わお女中という事になつて、そこにお座敷を片づけたり、こゝに御馳走をこしらえたりしています。

『嬢や！　お料理わできましたか？』

と、お座敷のお母さんわ聲をかけました。

『アイ、今じきなの。』

『奥さま！　少々お待ちあそばしてくださいまし！　只今お皿にもつとりますから。』

と、女中になつた千代子が、いそがしそうに皿をふいて、お嬢さんの登美子がこしらえた、しやくやくの花片をきざんだものを、おさかなのつもりで盛りわけようとしました。

と、ちようどその時、また風がサツと木立を揺ぶつたとおもうと、しいの木の木末から、フラリとばかりに二人の頭の上え、舞いさがつてきた者があります。

そしてその者が、やがて登美子のリボンをすべつて、耳の根方え落ちかゝりますと、登美子わあわてゝ、

『アレツ！』

と、いゝながら拂いましたから、そのはずみで、また千代子のほうも打つて、今皿の上えと落ちました。この時見るとくもの子でわありませんか。千代子わびつくり、

『アラいやだ、こんな虫が……。』

と、そのまゝ皿を投げだしましたから、皿わむこうの木の根にあたつて、眞中から二つに破れ、中の花片わその邊え、パツと散り飛んでしまいました。

『なにをそんなに騒いでるのよウ？』

と、水無子わ大人びて、たしなめるようにいゝましたが、二人わ、その場にもたえないように立ちあがつて、

『くもよ〳〵！　くもが落ちてきたのよ。』

『アラ、まだあすこにいるワ。』

『憎らしいくもだ。お皿破つちまつて！』

『悔しいから殺してやりましようよ。』

と、千代子わ脱いでおいた自分の草履で、手ばやくくもをおさえつけました。水無子わまたそれを見ると、

『およしなさいよ、そんなひどいこと！』

『ナニかまうもんですか。憎らしいんですもの。』

『アヽそうだワ。朝のくもわ敵と思つても助けろ、晩のくもわ親とおもつても殺せつていうぢやないの。』

『今わまだお晝だけども、朝ぢやないから殺したつてかまわないワ。』

と、千代子わもう草履でもつて、くもをにぢりつぶそうとします。

けれども水無子わ、その手をおさえて、

『お晝だつて晩だつて、生き物殺していゝ時間わないワ。お止しなさいよそんなひどいこと！』

『でも私たちのじやまするんですもの。』

『そんな事いつたつて、くもわなにもしらないのよ。さつき私が見ていたら、あの枝からこちらの木え、網をかけようと思つてたのよ。それを風に吹かれたもんだから、糸が外れて落ちてきたんだワ。惡氣でじやまに來たんぢやないから、殺すのわほんとに可哀想だワ。はやく逃がしておやんなさい！』

と、はてわ手をそえて、千代子の草履をのけさせますと、その中になつていたくもわ、さもうれしそうに這いだして、やがてむこうの木の裏の方えと、姿をかくしてしまいました。

『まアよかつた。』

と、水無子わ安心したようにいゝましたが、千代子と登美子わ顔見あわせて、

『惜しいことしたワねエ。奥さまのお庇でとう〳〵逃がしちやつた。』

『お母さんがとめなけりやア、生かしちやおかないのにねエ。』

と、悔しそうにいゝます。

『でもよくいうこと聞いてくれたねエ。ぢやアその御褒美に、お前にも御馳走してあげようねエ。』

と、水無子わ又お母さん氣取りで、再びもとの遊びにはいりました。

で、また一時間ばかりわ、なにも忘れて遊んでいましたが、夏の日和ぐせですから、その中にいつの間にか、空わすつかりくもつてしまい、どこかでゴロ〳〵という音もきこえました。

はやくも聞きつけた千代子が、キツと空を見あげて、

『オヤ……雷さまよ！』

『うそよ、どつかで大砲うつてるんだワ。』

と、二言三言いう中に、大粒の雨が四つ五つ、むこうの土の上にあとをつけました。

『やつぱり夕立ネ！』

『そら御覽なさい！』

と、三人わ驚きながら、並べた玩具を片づけるやら、人形を汚すまいと抱えるやら、はてわ莚を巻きあげるやら、あわてゝ立ち働く間に、雷わもう耳近く鳴つてきて、雨わ遠慮なく額をうちます。

『さア大變だ、はやく行きましようよ。』

と、千代子と登美子わ急いで駈けだそうとする。それをまた水無子わとめて、

『待つてらつしやい。じき止むことよ。』

と、自分わかえつていゝの木の幹にそうて、そこを雨止みの場所にしました。

中湖上の巻

水

無子わ不意の夕立を、なまじ逃げても仕方がないとおもつて、二人の友達をとめましたが、友達わそれを耳にもかけず、

『だつてそんな所にいりやアぬれちまうワ。』

『雷が落ちたらたいへんだ。』

と、袂を頭にのせながら、一さんに逃げてしまいました。その後で水無子わ、一人しいの木の根のところえ來て、身をすくめておりますと、上にわしいの枝や葉が、幾重にも厚くしげつておりますので、そこにわしずくも落ちません。只まわりに降りそゝぐ雨が、少ししぶきを飛ばしながら、しきりに土の香を送るばかりです。

馬の背をわけるという夏の雨、一しきりわまるで鉢の水をかえすように、ひどい勢で降りましたが、その中に雲が行つてしまうと、忘れたようにあがつてしまつて、はや青い空も見えるようになりました。

『まアよかつた。だから急いで逃げなけりやいゝのに。』

と、水無子わやつと安心しましたが、さてまた氣がついてみると、さつきからの雨の量が、思いの外多かつたと見えて、空わ晴れても地の上にわ、まだ水が一面にたまつて、しいの木のまわりを取りまいてしまい、まるで池の中の小島の中に、ひとり島流しにあつたようになりました。

それもせまい巾ならば、飛んで飛べない事もありますまいが、皆一間から一間半ほど、一番狭いところでも、五尺あまりありますので、水無子にわ飛ぶことができません。中にわまるで川のように、木や石の間をぬつて、ずつと遠くまで流れつゞいているところもあります。

『アラ、仕様がないねエ、どつちえも行けなくなつてしまつたワ。』

と、立つたまゝ考えていましたが、いつまでそんな事もしていられませんから、

『アゝいゝ事がある。どうせ雨のたまりなんだから、そんなに深いはずわない。はだしになつてわたつてやろう。』

と、獨り語をいゝながら、着物のすそを高くからげて、はいていた下駄を脱ごうとしました。と、どこからか聲がして、

『水無子さん！　お待ちなさい！　今わたしてあげますから。』

と、いうのではじめて氣がつきますと、いつの間にか自分の前に、小船が一艘來ていまして、その上にわ可愛らしい少年の船頭が、竿をもつて待つています。

『まアありがとう。ぢやア渡してちようだいな！』

『さア入らつしやい！』

少年船頭わ快く迎えました。で、水無子わ、その小船に乗りこみますと、少年わすぐ竿をおして、グツと船を漕ぎだしましたが、不思議なのわその船が、岸を離れたとおもいますと、今までつい雨水のたまつた、狭いところだと思つたのが、たちまちひろい湖水のようになつて、むこうの岸わはるかとうくなり、手も屆くようにおもつたところが、まるで繪のような景色になつてしまいました。

水無子わ眼をまるくして、

『アラどうしたんでしよう?』

と、あたりを見まわしますと、少年わ笑いながら、

『どこでもいゝぢやありませんか。今に好いところえ連れてつてあげます。』

『好いところつてどこなの?』

『どこだか行けばわかります。』

と、少年わ獨りのみこんで、しきりに船を漕ぎますと、船わまるで矢のように、水の上をすべつてゆくので、あたりの景色わだん〳〵に變つて、さつき雨宿りしていたしいの木も、今わ盆栽の木を見るような、小さな物になつてしまいました。

『まアおかしい……なんだか變ねエ。』

水無子わそろ〳〵氣がもめてきましたから、ためしに又聞いてみました。

『ねエあなた! あなた一たいどこから來たの?』

『どこから來たか今にわかります。』

『まだ私、知らない人ですわねエ?』

『いゝえ、知つていらつしやるはずですよ。』

『アラ、……だつて私おぼえがないわ。どこでお目に掛つたのでしよう?』

『ついせんこくお目にかゝりました。』

『どこで?』

『あすこで!』

と、指でさしたところを見ますと、それわ今まで遊んでいた、あのしいの木のところです。

水無子わいよ〳〵わからなくなりました。そしてまた今更のように、少年の顏を見詰めましたが、少年わそれに氣もとめず、かえつて行く手の方をさして、

『アレ〳〵、あすこを御覽なさい! 私の家がもう見えてきました。あすこえあなたを御案內するのです。』

と、いうので又その方を見ますと、遙かむこうの水の上に、七色の虹の橋がかゝつていて、そのちようど下のところに、まるで龍宮の門のようなものが見事に浮いてみえました。

『まア綺麗だ……』

と、われ知らず口走るうちに、はやその綺麗な門の前えきました。

下　おみやげの巻

龍宮えでも來たような心地で、夢のように立ちすくんでいる水無子を、少年わうながしながら、

『さア早くおはいんなさい！』

『はいつてもいゝの？　しかられやしないの？』

『誰がしかるもんですか、わざ〳〵お迎いに行つたくらいぢやありませんか。』

と、いう中に、先に立ちますので、水無子わまだ遠慮しながら、端の方をそつとついて行きます

と、やがてりつぱな玄關のところえ來ました。

するとその玄關のところえ、可愛らしい少女が大勢でてきて、

『オヽ水無子さん！　よくいらしつてくださいましたねエ。』

と、口々にいゝながら、右左から寄つてきて、抱えないばかりに水無子の手をとり、すぐと奥えつれてゆきます。

もとより大きなりつぱな御殿、一室々々〳〵に飾りがちがつていて、青、赤、黃、紫と、ちようどにじにあるだけの色の、見事に織つた絹の巾が、その一室づゝに張つてあります。そこを見とれながらはいつて行きますと、今度わキリ〳〵トン。キリ〳〵トン、といゝ妙な音がきこえてきました。

水無子わ立ちどまつて、

『アツ、あれなんでしよう？』

と、聞きますと、少女達わ答えて、

『あれわ機を織る音よ。』

と、いゝます。

すると又別の方から、ズウイ、ズウイという聲がしてきました。

『あれわなアに？』

と、聞きましたら。

『あれわ糸をつむぐ音よ。』

と、いゝます。

まるでぼうせきの工場えでも來たようだ……それにしてわ建物がりつぱ過ぎると、不思議に思いながら來る間に、綺麗なお座敷にとうされて、そこに席を貰いました。

けれどもまだ落ちつきません。水無子わモジ〳〵キヨロ〳〵、あたりを見まわしておりますと、やがていゝ香いがしてきて、正面のみすがあがると、そこから乙姫のような、りつぱな方があらわれるでわありませんか。

ア、やつぱりこゝわ龍宮なのだワと、思いながらお辭儀をしていますと、お姫さまわ聲をかけて、

『水無子さん、さつきわほんとにありがとうございました。』

と、思いがけないお禮をいゝます。

『アレ、なんでございましよう。お禮なんぞ、うかがう覺えわございませんが……。』

お姫さまわニツコリ笑つて、

『なるほど、まだわからないでしようネ。でわいつてあげましようか。あなたわさつきしいの木の下で、お友達の殺そうとしたくもを、助けてやつたことがありましよう。』

『エ、、あれわ私も覺えております。』

『それからこゝえ來る時に、船に乘せてくれた子供がありましよう。』

『ハイ、それもよく覺えております。』

『その子供わあのくもなのですよ。』

『まア……。』

と、あきれて、見はつた眼で水無子わ、姫をみつめましたが、

『それでわあなたわ？……。』

と、聞きますと、

『私わそのくもの母親です。それであなたにお禮をしたいと思つて、わざ〳〵こゝまでお迎え申したのです。さつきわほんとにありがとうございました。』

又あらためて禮をいゝますので、はじめて水無子もふにおちましたが、それにしてもその女の氣高さと、家のりつぱさとに氣おくれがして、まだあいさつを仕かねておりますと、くもの母わあたりを見かえり、小ぐもの小女を手招きして、なにか小聲でさゝやきましたら、小女わうなずいて、

『それでわ水無子さま！　これからくもの仕事場を、お慰みに御覽にいれましよう。』

と、いゝながら案内にたちました。

くもの仕事場とわどんなところかと、水無子わそれに連れられて、廊下づたいに行きますと、さつきからきこえていた、キリ〳〵トンやズウイ〳〵という音が、だん〳〵近くなりましたが、その中に廣い一間えきたと思うと、そこわつむぎの仕事場で、その隣りの一間わ、機織る仕事場になつていました。

見るとつむぎの仕事場でわ、かわいらしい少女が、大勢雪のような眞白な糸を、しきりにつむいでおりますし、また機織る仕事場でわ、少し大きな女の人が、精だして機を織つております。

水無子わ感心して見ておりますと、そこえまた前のお姫さまがきて、

『御見物がすみましたら、この織物をお土産にあげましよう。』

と、少女達にもたせた絹物を、幾反となく山のようにつんで、水無子の前え出しました。

水無子わ驚いていましたが、歸りにわさつきの船が、見事な千石船になつていましたから、その

太郎々々たんぼ

上

『太郎々々たんぼ、たんぼの中に、かわいや、太郎が、泥たんぼ。』

『たろ〳〵たんぼ、たんぼの太郎、來たれや、ほたろが飛んでいる。』

『たろ〳〵ほたろ、たんぼのほたろ、てらせや太郎の來る路を！』

と、こんな歌がこのごろはやつてきました。そして村中の子供たちわ、日が暮れると、たがいにさそいあつて、手に〳〵さゝの枝やうちわをもつて、たんぼえほたるを取りに行くのに、大聲で節をそろえて、皆でこの歌をうたいます。それを聞くとさも面白

そうですが、これにわ又かわいそうな話があるのです。

ちようど去年の夏の事でした。この村に太郎という、かわいゝ男の子がおりました。ある晩友達に誘われて、やはりたんぼえほたるを取りに行きました。

太郎わかつぱつな子でしたから、誰よりも先え飛んでいつて、手に持つたさゝの枝で、よくほたるをはたきおとしていましたが、あまりよく取れるので、自分も夢中になつて、どん〳〵先え行く中に、とう〳〵皆にはぐれてしまつたのです。つれのものわ心配して、

『太郎さアん〳〵！』

と、呼びますと、どこかで、

『アアイ〳〵！』

と、返事わきこえましたが、少しも姿わ見えません。

その中に、もういくら呼んでも、返事がきこえなくなりましたから、さてわもう家え歸つたものだと思つて、念のためにその家を聞いてみますと、まだ歸つて來ないといゝます。

さてわ迷子になつたのだなと、また皆で出なおして、今度わちようちんで探してまわりますと、まア可哀そうでわありませんか！　とあるたんぼの側の、小さな土橋の下のところに、――定めし踏みはずしたのでしよう――まつさかさまに落ちこんで、泥だらけになつて死んでいました。

さあ大變だというので、すぐその死體を抱きあげて、いろ〳〵に手あてをしましたが、もう迫つ

つきません。』

ほんとにかわいそうな事をしたと、村中の者も氣の毒がつて、泣いて狂うお母さんを慰めながら、りつぱにとむらいをしてやりましたが、それからというものわ、誰が云いだしたともなく、この橋の側から、太郎のゆうれいが出るの、太郎の泣き聲がきこえるのと、氣味の悪い評判がたつて、昨夜まで村中の者が、あんなに面白がつていた、ほたる狩りにも、今わ誰ひとり、出る者がなくなりました。

こうなると、又ほたるの方でわ、少しも取られないもんですから、毎晩數がふえるばかりです。ことに今年わ、去年にもまた增して、ほたるがたくさん出るようになりましたから、村の者わ又惜しくなりまして、これわなまじ遠慮するより、かえつて盛んに狩りたてた方が、太郎の供養にもなるだろう。そのかわりたゞ狩りまわるより、あの太郎の回向になるような、歌を一つこしらえて、皆でにぎやかにうたいながら行つたら、お經よりも佛が喜ぶだろうと、こんな相談からできあがつたのが、すなわちこの歌なのでした。

『たろ〳〵たんぼ、たんぼの中に、かわいや太郎わ、どろたんぼ。』

と、一人がまづうたいだすと、次の者が聲をうけて、

『たろ〳〵たんぼ、たんぼの太郎、來たれやほたろが、飛んでいる。』

と、太郎を呼ぶようにうたいます。すると三人目が、

『たろ〳〵ほたろ！　たんぼのほたろ、照らせや太郎の、來る道を！』

と、うたいます。そして後わ皆の者が、一しよに聲をそろえまして、幾度もこの歌をくり返しますと、不思議な事にわその歌につれて、ほたるわだん〳〵多く群てきて、皆の前え飛んできますがその中にたゞ一つ、主とか王とかいうような、大きな〳〵ほたるが一匹、まるでその歌にあわすように、あるいわ明るく、あるいわ暗く、あるいわ高く、あるいわ低く、さもうれしそうに飛び狂います。

『ヤア、あれを見ろ！　あれわ太郎の人魂ぢやないか知ら？』

と、誰だか一人が云いだしますと、

『私達がよんだんで、太郎が出てきたのかもしれないよ。』

『そんなら、はやく捕まえてやれ！』

『そして皆であつてやろう。』

と、みんなが一しよにかたまつて、その大ぼたるにかゝりました。

するとその大ぼたるわ、たちまちフツと消えましたが、やがてまた高いところえあがつて、再びバツと光りました時わ、氣のせいかその光の中に、太郎の姿が見えたようでした。

この時この子供達の中に、お玉という娘がいました。この娘わ太郎といとこでしたが、去年太郎の死んだ時分わ、よそにいたのでよく知りませんでしたが、今年村え歸つてきて、去年の譯を聞いてからわ、大そう太郎を懐かしがつて、ゆういいでもよいからたゞ一と目、太郎にあいたいと思つていたのです。

ですから、今この大ぼたるを見ると、なんでも自分が捕まえて、ぜひその正體を見なければならないと、一生けんめいに追いまわしましたが、その光で太郎の姿を見てからわ、もう夢中になりまして、

『アレ、太郎さん！』

と、いゝながら、うちわをそれえ投げかけました。

と、そのうちわが、投げたはずのが手を離れず、かえつてこつちの手を釣りあげて。お玉をちうえと引きさらうようにします。

それを見て側にいた者わ、驚いて引きとめようとしましたが、かえつて自分わふり離されてしまい、お玉の體ばかりが、はや地を離れたとおもうと、今まで見えていた幾千のほたるわ、一時にパツと消えてしまつて、あたりわ一面眞の暗！

『アゝどうしたんだろう？　まつくらだわ。』

『鼻をつまゝれてもわからない。』

『ほんとにお玉さんわどうしたんでしよう！』

『たつた今までこゝにいたのに。』

と、闇の中にも聲をたよりに、たがいに尋ねあつていますと、どこからともなくお玉の聲で、

『アレ皆さん！　お逃げなさい〳〵！　こゝに魔物が〳〵！』

と、けたゝましくいゝます。

『ナニ魔物が……どこに〳〵？』

と、恐々ながら聞きますと、

『ソレ、こゝの橋の下に、橋をわたると大變よ。』

と、いうので、はじめて氣がついて見ますと、前にわ橋の欄干のようなものが、やみにも一きわ黒く見えました。

下

やみの中にきこえる聲に、お玉の居所をさがしますと、その黒い橋の欄干の上に、それかと思う人影が見えましたが、その側にわまた人間よりずつと大きい、しかも羽根のはえている、魔物の姿が見えてきました。

それを見ると子供達わ、キヤツと立つて逃げだしましたが、そのはずみに、今まで取つておいたほたるを、かごや袋に入れたまゝ、みんな放りだしてしまいましたから、かごがこわれ、袋が破れて、中から飛びだした大勢のほたるに、またあたりがあかるくなりました。

この時まで、魔物につかまつていたお玉わ、そのあかりで恐々ながらも、魔物の様子をじつと見ますと、こわいかに！　さつきわ恐ろしい顔だと思つたのが、いつか、やさしい相好になつていてお玉を見るとニツコリ笑いながら、

『もうなにもこわいことわアないから、私と一しよに來るがいゝ。好いところえ連れてつてあげるよ。』

と、云います

『好いところつてどこ？』

『お前の探してる太郎のいるとこさ。』

『エツ、太郎ちやんの？』

『ウン、そうよ。』

『ぢやア太郎ちやんも、お前さんがさらつてつたの？』

『イヤ、私がさらつたというんぢやない。自分で勝手に行つたんだ。たが、私だつてまんざら知らないことでもない。さらいわしないが、誘つたことわアさそつた。』

『さらやアしないが、さそつたつて？　……一たいお前さんわなんなの？』

『私か。私わ夜の神の家來の、やみという魔物なんだ。』

『やみ？　あのまつくらなこと？』

『そうだ。』

『ぢやア太郎ちやんをさらつたのわ?』
『誰もさらつたんぢやアない、私がさそつたばかりで、自分で勝手に行つたのさ。けれど今ぢやア後悔して、お前にあつて話したいと云うから、それでまた私が、わざ〳〵お前を迎いに來たのさ。さア來なさい! 太郎が待つてる。』
と、いう中にもう先にたちます。その後からお玉わついて行くと、なにしろ暗い〳〵、ほらあなのようなところを、だん〳〵奥えはいつて行きましたが、その中にたゞ一つ、青い光が見えたかと思うと、その光の下から聲がして、
『アヽ、玉ちやん、よく來てくれたねエ。』
と、云うのがたしかに太郎です。
お玉わわれ知らず駈けよりますと、さきからも歩きよつて、お玉の手にとりつきましたが、その時見ると太郎の顔わすつかりあおざめておりました。
『太郎ちやん、ほんとによく生きてゝくれたねエ。』
と、お玉からまづ口を開きますと、太郎わ頭をふりながら、
『いゝえ、私アいきてやしない、去年の今夜死んじまつたんだよ。』
『まア……そんならどうしてこんなとこに?』
『こんなとこにつて、玉ちやん、こゝを何所だとおもうの?』

『そりやアどこだか知らないけども。』
『こゝわほたるの地獄なのよ。』
『ほたるの地獄?』
『ほたるを取つちやア殺す者わ、みんなこの地獄えおちるんだよ。』
『まア、こゝ地獄なの?』
『そうさ、けれどあのやみの魔物が、しやばとの間をゆきゝしてるから、それでしやばの様子も知れるし、しやばから來る事もできるのさ。』
『しやばツてなんなの?』
『玉ちやんなんぞのいるところを、みんなしやばツていうんだよ。』
『まア……變なのねエ。』
と、お玉わ只あきれていますと、太郎わやがて言葉をあらため、
『それで玉ちやん! 私わいつまでも、こゝにいなけりやならないけども、お前わじき、しやばえかえるんだから、私のことづけを聞いてつて、みんなによくそう云つとくれ!』
『アヽ、云うとも、どんなおことづけ?』
『他ぢやないが、玉ちやん、これから皆氣をつけて、もうほたるを取らないように!』

『ア、一たいほたるつてものわ、夜の神さまのお氣にいりで、やみ夜を飾る星の精なんだよ。』

『まア、星の精?』

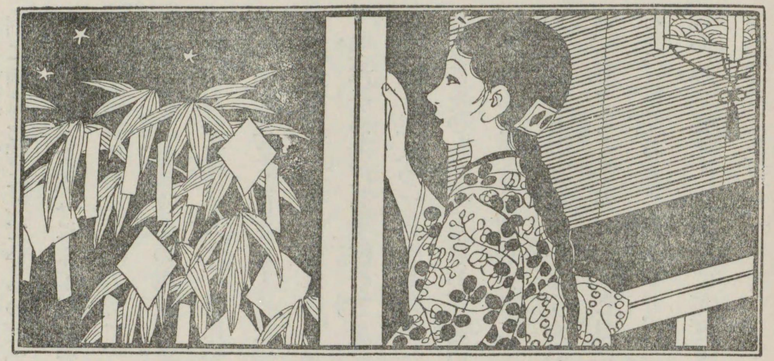
『星の精が夜露と一しよに、草の葉の上え降つてきて、しばらくそこに宿る中に、夜の神さまから魂をもらつて、それから綺麗に飛びまわるのだが、その役目がすんでしまうと、朝の霧と一しよになつて、また天え立ちのぼつてしまうのさ。ところを人間が面白がつて、そのほたるをつかまえてしまうと、もと〳〵魂わ借りものだから、じきぬけ出してしまうので、ほたるわもろくも死んでしまう。そうするともう天え歸れない。これが又星に取つてわどんなに悲しいか知れないのだ。それをまた夜の神さまが、かわいそうに思しめして、少しぐらいわお免しにもなるが、あんまり圖にのつてほたるを取ると、その罰にそのいたずら者を、ほたる地獄えおとしておしまいになる。私なんざア初めつから、ずいぶん面白がつてほたるを取つた。それも可愛がつてかつとくんならいゝが只取るだけが面白いんだから、取る時わ夢中でとるが、とつてしまうと死のうがどうしようが、そんなこたアちつともかまわない……それがまつたく悪かつたんだ。だからこうして地獄え落ちたんだが、今こうして後悔して見ると、後の人がまた私のように、同し罪をつくつて、おんなし地獄に落ちるのが、いかにも氣の毒でならないから、玉ちやんこれから歸つたら、どうかみんなにそういつて、ほたるわ只ながめてるだけで、けつして取るもんぢやないという事を、よく話してあげとくれ!』

と、くわしく話してきかせたと思うと、太郎のすがたわもう見えなくなりましたが、いつの間にか自分の體わ、元のたんぼの土橋の上、そこわ太郎の去年落ちた、ちようどそこに立つていました。

これからお玉わ、急いで又皆を呼んで、太郎のことづてをしましたが、これからわまた村の者わ誰一人ほたるを取らなくなりましたので、ほたるわさかんに飛びまわつて、夜の景色のきれいな事わなんともいわれないくらいです。おかげで村わほたる見物の人で、毎晩大そうにぎわいました。

光りの浦

上　落した指輪



美

津子わこの春から健康を損じて、ずつと學校も休んでいのですが、まだほんとうになおらないので、この冬を越すまでわ、やはりこゝにいるように、という醫者のすゝめをすなおに聞いて、そのまゝに居残る事となりましたが、いまゝで一しよにいる兄や妹や、また近所の友達までが、休暇がすむと、みな引きあげてしまつたので、一しおさびしさを感じました。

たゞさえおとなしい質の美津子わ、病氣のせいで一そう陰氣になりましたが、それわたゞみかけばかりなので、その實自分でわ、

別に病氣を苦にしているのでわなく、かえつて、早く快くなつて前より丈夫になりたいと云う。その事ばかりを頼みにもし、また樂しみにしているのでした。

で、閑さえあれば濱えでて、砂の上を運動しながら、好い空氣を吸うのを日課のようにしていましたが、今日も夕方の御飯の前に、一人庭口からでて、濱えと歩みをはこんできました。

夏中わ海水浴の人で、時にわ芋をあらうようににぎおう濱も、涼しい秋風が吹きだしたからわ、火の消えたようにさびしくなつて、あちこちに引きあげてある漁船の陰に、漁師が網の手入れをしている外にわ、人を恐れない烏どもが、波うちぎわにおりたつて、蟹にからかつてるくらいです。

美津子わしばらく海の方をながめて、空と水との間から、一つづゝ湧き出して見えてくる白帆に、餘念なく見入つていましたが、やがて又きびすをかえして、陸手の景色を眺めようとしますと、弓なりになつた波うちぎわ、遙かのむこうの砂濱から、一人の小娘が來かゝりました。

それわときゞ〳〵別莊え來て、艸を刈つたり木を透かしたりする、この土地の日ようとりの娘の、お玉というのに似ていますから、用もありませんが立ちどまつて、その近づくのを待つていました。と、さきでもやがてそれと見たか、途中から足を速めてきましたが、もう聲のきこえるくらいになると、可愛らしく會釋して、

『お嬢さま！　御運動でござりますか？　今日わお一人でございますネ。大そうお宜しいようでございますこと！』

と、いゝます。美津子もニツコリわらつて、

『アゝ、大そう快くなつたのだよ。そしてお前も、よく精が出るぢやないの？　今日もまた仕事にでたの？』

『エゝ、そりやア私なんぞ、一年中お休みわござい
『だから體が丈夫なんだネ。て、今わどこえ行くの？　またお使？』
『いゝえ、只今わお使ぢやございません。お嬢さまの所えまいつたんでございます。』
『まア私のところえ？　なんの用ができたの？』
お玉わ帶のあいだえ手をいれ、
『いつでしたかお嬢さま！　濱で、指輪をおなくし遊ばしたことがございましたネ。』
と、いう。美津子わちよつと首を傾けながら、
『そんな事があつたようだつたネ。』
『あれ……これでわございませんか？』
と、やがて出して見せたのわ、かなり大きな眞珠のはいつている、純金の指輪でした。美津子わ輕くうけとりましたが、じつと見て、
『オゝ、そう〳〵、これ私がなくした指輪だわ、どこにあつて？』
『さきほど濱で拾つたのでございます。私聞いておりましたから、たしかこれだろうと思いまし

て……。』

『まアよく拾つてくれてネ。』

と、まだ手の上に載せていましたが、その手の指にわ、ちようどそれと同じような指輪が、もうちやんとはまつておりました。

と、美津子わ、またお玉にむかいまして、

『けども私……もう代りを買つていたゞいたの。そして、もうこれわない物と思つてたんだから、もういらないワ。お前にあげよう！』

と、その手え返しかけますので、お玉わびつくりして、飛びのくように身をよけながら、

『アラ、そんな物いたゞいちや大變でございます。』

『ナニ、大變な事があるものかネ。……私この頃やせて指が細くなつたものだから、それでこれが拔けてしまつたんだよ。どうせ合わなくなつたんだから、お前貰つておくれよ。お前ならちようど好いだろう？　ドレ、手をお出し！』

と、なおも遠慮しているお玉の手を、無理にとらえるようにして引きよせ、その指に今の指輪をはめますと、これわフックリ太つているので、すぐにわはまりませんでしたが、やがてシックリありました。

『ソレ、ね、ちようど好いぢやないの？　だから貰つておくれよ。』

『だつて私のようなものが、こんな物はめたつてにあやいたしません。指がまがつてしまいます。』

『でも今にお嫁に行くんでしよう。その時にやアどうせいるんだから、平生わはめないでも、取つておきやア可いぢやないの。』

『でも……。』

と、まためいわくそうにためらつていましたが、

『でわお父さんに聞いてみまして……。』

『アヽ、それでもいゝワ。で、お前が取つておいてくれると、私もほんとに氣がすむのだもの。それにね、……私のとちようどお揃いだから……うれしい！』

と、後わ獨り語のようにいゝましたが、お玉わきいて顏をあかくして、

『アヽ、……そりやア私の方から申す事でございます。けども、私もつたいなすぎて、なんだか罰があたりそうでなりません。』

と、うれしくもあり、また氣味の惡いように、じつと指輪を見いつておりました。

ところえ別莊から女中がきて、美津子に夕飯を知らせましたから、それに迎えられまして、

『でわお玉！　また遊びにお出でネ！』

『ハイ、ありがとうございます。』

お玉のていねいにおじぎする間に、美津子わもう別莊の方えと、そのなよやかな姿を消してしま

いました。

後にお玉わ、今更のようにまだわが手にある、指輪にじつと見入つていましたが、その中に秋の日わ、いつかとつぷり暮れてしまつて、藍色にすんだ空にわ、星が幾つもまたゝきはじめますと、また思い出したように、いそいでそこを引つかえして、わが家の方えと急ぎました。

ちようどその時、お玉わなんの氣なしに、沖の方を見かえりますと、むこうの岬の鼻のところの、ずつと突きだした岩の上に、なにやら光る物があります。

ひとみをさだめて見なおしますと、その光る物わ人でした。しかもその長い髪から、金色の光をはなつているのです。それと見るとお玉わ、なに思つたか大急ぎで、指にはめていた指輪をすてゝ、一さんにそこを駈けだしました。

中　比べる寶玉

お玉が一目見るより、拾つた指輪を驚いてすてゝ、急いで逃げだしたその相手わ、一たいなんでありましたか？

そのゆわれを説くにわ、まづお玉の身の上から、話してかゝらねばなりません。

お玉の親わ、もとわこの濱の漁場を一手に持つていたくらいの、りつぱな身代の者でしたが、數年つゞく大しけに、すつかり家の運が傾いて、はてわ貧しい日ようとりとまで、おちぶれてしまうくらいになつたのです。それでも、根が佛性のお玉の父親わ、別にそれを苦にしませんで、かえつて始終なげいていたのわ、まだ子供のないことでした。

『どうか一人ほしいものだ。』

と、そればかりを願つていますと、ある日、お玉の母親が、濱で貝をひろつていたときのことです。

ついに見た事もない大きなはまぐりが、とある岩の陰にありましたので、それを拾つてかえろうとしますと、後の方で聲がして、

『今こそさづける子寶よ。
寶わ光る眞珠玉！　光が浦の眞珠玉！』

と、いう者があります。

びつくりして振りむいて見ましたら、それわよく畫で見るような、美しい海の女神でありましたが、その頭の髪からわ、金色の光がさしているので、まぶしくて、じつとわ見ていられないくらいです。

と、やがてそのところえ、それよりわ少しちいさな、その家來ともいうような人魚が、都合三びき現われましたが、見るとその手にわ、それ〳〵光る玉をさゝげて、前の女神のところえ持つてくるようです。

お玉の母親わ、夢を見ているようになつて、うつとり見とれておりますと、女神わやがて三びきの人魚から、三つの玉をうけ取りまして、それを自分の掌で、二三度まるめたと思いますと、それが大きな一つの玉となつてしまいました。そして、はじめてこちらをむいて、

『それ子寶をあげますよ。』

と、いゝながら投げたとおもうと、かき消すように見えなくなつてしまいましたが、その代りに自分の拾つたはまぐりわ、なんだか急に重くなりました。

變なこともあるものだと、思いながら家え歸つて、この事を夫に話しますと、

『それこそ海の神さまが、おれ達に子供をさづけてくだすつたに違いない。てわそのはまぐりわ、賣らずに二人で食べてしまおう。』

と、いうので、それからそのはまぐりを割つて、中の肉わ二人で食べましたが、その時見ると肉の中から、大きな眞珠が一つでました。

さてわあの時の眞珠であつたかと、母親わすぐ思いあたりましたが、なにしろ見事な玉ですから、すぐ賣つたら大金になつて、くらしも樂になるはずなのを、これも神さまのおさづけだというので、そんな事をしてわもつたいないと、大切にしまつておく事にしました。

その中に母親わ、だん〳〵お腹が大きくなつて、やがて十月目にうみ落としたのが、可愛い女の子でありました。

さてこそいよ〳〵お授けの子だと、二人わ大そう喜びまして、名もそのまゝお玉とつけましたが、それにつけてもあの時の玉わ、この子の守袋にいれてやろうと、始めて玉を出そうとしますと、こわいかに、たしかにしまつておいたところに、影も形もありません。

それにわ兩親とも顏見合わせて、しばらく言葉もありませんでした。するとまた赤兒の枕邊に、例の女神があらわれまして、

『今こそうまれた子寶よ。

寶わ光る眞珠のお玉！　光の浦の眞珠のお玉！』

と、いうかと思うとまた消えてしまいましたから、さてわあの玉が、そのまゝわが子になつたのかと、一そう不思議に感じるとゝもに、一そう大切にする氣になりました。で、だん〳〵育てゝ行つて見ますと、この子がまた感心な子で、親にも孝行をすれば、友達にも親切に、その名の玉というとうり、少しも角のない良い子になりましたが、この子がちようど十歳になつた時のことです。ある日濱え遊びにいつていますと、そこえまた女神がでてきて、

『光の浦の光のお玉。

光わわが身の中からさすに、よその光を借るまいぞ。』

と、教えるようにうたつてきかせました。

お玉わなんだかわかりませんから、氣味惡そうにかえつてきて、この話を親達にしますと、その

時はじめて親達も、

『お玉の體わ海の女神からさづかつた、大きな眞珠がお母さんのお腹に宿つて、それではじめてできたのだよ。』

と、わけを話してきかせました。

なるほどそれを聞いてみると、この時の女神の言葉も、どうやらわかるようですが、それにしても、

『光わわが身の中から射す。』

とわ、なんの事をいうのだろう？　こんな賤しい身の上で、光りなぞとわ思いもよらないと、一こうふにわ落ちませんでした。

ところがちようど今日になつて、思いがけない眞珠入りの指輪を、美津子からもらう事になりましたから、さてわこれがその事かと、一かど思いあたつた氣になつて、そのまゝもらう事になりました。

で、うれしさに勇みたつて、親達にも喜ばせようと、急いで家え歸ろうとする時、又してもあらわれた女神の姿を見ますと、ふとまた歌の三句目を思いだしました。

『よその光を借るまいぞ。』

よその光!?　なるほど指輪をもらうのわ、つまりよその光を借るのだと、氣がつくと今更のように、女神の髪の毛がまぶしくなつて、まるでしかられでもするように感じ、さてこそ指輪を投げすてゝ、そこを逃げようとしたのです。

ところがなにと思つたか、女神わやがてのびあがつて、海の方をさしまねきました。

すると海の白波の中から、たちまち一尾の人魚があらわれ、見るみるお玉の側えよつたと思うと、いきなりその手をつかまえました。つかまえられたお玉わ、さてまたそれをふり放しもしません。

『アレ、私をどうなさるの？』

『御用があるからいらつしやい。』

『どこえ？』

『よいところ！』

いう中にお玉の體わ、もう水の中え來ていました。

けれども、もとより濱の娘です、海えはいつても驚きません。ちさい時から覺えこんだ泳ぎで、自在に波をきつてゆきますと、人魚わそれを案内しながら、

『まアお前わよく泳げるのネ。まるで私達と同じようだワ。』

『そんなことアありませんけども、一里や二里わわけありません。』

『それぢやア水のなかでも眼が見えて？』

『少しぐらいわ見えるでしよう。』

『そう……それもそのはずだわねエ。光わ自分の體にあるのだから。』

と、またこんなことをいゝますので、お玉わすぐその尾について、

『一たいどうして私の體わ光るの？』

と、きこうとしましたが、それにわ返事もされない中に、また一ぴきの人魚がでてきて、

『オヽ、お玉さんよく入らしつてねエ。ドレこの玉とお玉さんと、どつちが光るかくらべましよう？』

と、いゝながらお玉の前え出したのわ、大きい白い水晶の玉でした。

下　照らす海神

まつ白な水晶の玉、それとくらべられたお玉わ、きまりが悪さに顔をそむけましたが、そむければそむけるほど、身中の光わ度をまして、さらに相手の人魚を射ました。

と、その人魚わ目をかくして、

『オヽ、まぶしい、とても水晶わかなわないワ。』

と、云いながら玉をそこえすてゝ、自分わ急いで逃げてしまいました。

また少し行きますと、今度わ別の人魚がでてきて、まつかに光る玉を出しかけ、

『オヽお玉さん、よくいらつしやつてねエ、私の玉ともくらべてくださいな！』

と、いゝながら見せました。

これわルビイという玉で、いかにも綺麗な光をもつていますから、お玉わとてもかなわないと思つて、よけて側を通ろうとしますと、かえつてまた光がまして、サツと相手の人魚を照らしました。

すると又その人魚わ、

『オヽまぶしい、それでわルビイもかなわないワ。』

と、いゝながら、また玉を投げすてゝ、そのまゝ逃げてしまいました。

お玉わ不思議に思いながら、また前え進んでゆきますと、今度わ三度目の人魚が、金色に光る玉をさゝげながら、

『オヽお玉さんいらつしやい。でわ私のともくらべて見てください！』

と、目の前えつきつけました。

これわ黄金の玉ですから、まるで太陽のように光ります。そのまぶしさにお玉わ、袖で顔をおおうとしますと、その下からまた強い光が、さつと外えさしますので、相手の人魚わびつくりして、

『オヽ、まぶしい、とてもこれでわかなわないワ。』

と、黄金の玉をそこえすてゝ、どんく逃げてしまいました。

妙な事もあるものだと、お玉わ不審にたえませんが、なおも泳いで行こうとしますと、さつきから、自分を案内してくれた人魚わ、この時こつちを振りむきまして、

『もうよろしい。お玉さん！　よくこゝまで來られてねエ。さすがあなたわお玉さんだワ。でわその御褒美に、今の玉をみんなあげましよう。』

と、云つて渡しましたのわ、以前の人魚達がすてゝ行つた、水晶と、ルビイと、黄金の玉とでした。お玉にわまだふに落ちません。

『これわほんとにどうしたんでしよう。』

『あなたが光に勝つたから、それで皆もらえるのぢやないの。』

『光りに勝つとわ？』

『マア、あなた自分でわ氣がつかないんでしよう。さつきからあの人魚達が、あなたを試しに來た時に、もしあなたが、自分の體が光るからと思つて、負けない氣で光り勝とうとしたら、きつと光り負けたのです。それにかえつてけんそんして、あなたわいつも身をよけたり、顔をそむけたり、隱したりなすつた、それだからかえつて光が增して、みんな光り勝つてしまつたのです。ほんとの光りというものわ、包めば包むほど光が增すもの。それにひきかえて附け燒刃の光わ、振りまわすほど光が失せて、ついにわもとのなまくらになつてしまう。さすがにあなたわお玉さん、よく光を持つていらしつた。それが眞の玉というものです。』

と、くわしく云つて聞かされたので、ようやくわけがわかりましたが、それにしても、こう褒められるのが、又一そうきまりが悪くなつて、顔わたれる許りですと、身中の光わいよ〳〵增して、

その掌にのせた三つの玉も、この光の前に出てわ、まるで只の小石のようになつてしまいました。

ところえしづかに現われたのわ、あの海の女神でした。女神わお玉の前え進むと、わが兒のように顔をなでながら、

『オ、お玉！　よく私のいう事を聞いて、餘所の光を借りなかつたねエ。』

と、いゝます。

お玉もこの時わ、氣も落ちつきましたから、こちらからも眞の母に向うように、

『ほんとにあぶなうございました。もう少しであの指輪をもらつてかえるところでございました。』

と、あやまるように云いますと、女神わニツコリ笑つて、

『それも皆私の試み、お前の光を增そうために、わざとなんな事をして見たのだよ。しかしお前にわあの玉より、もつと好い玉が授けてあるから、それで身中が光るのだ。』

『その上にまた只今わ、こんな結構な物をいたゞきまして。』

と、掌の上の玉を見せますと、

『オ、それもそうして持つたまゝでわ、お前の光に負けてしまつて、眞の光が出ていない。しかし水晶わ水晶、ルビイわルビイ、黄金わ黄金と、白、赤、黄にそれ〴〵の光を持つているのだから、そのまた光をそれ〴〵に、身につけなければ役にたゝぬ。さアそれにわこうしてあげよう。』

と、女神わそれをお玉から取つて、掌の上でまるめたと思うと、また元のように光り出しました

が、それをもつてお玉の胸をなでると、そのまゝ身中えはいつてしまいました。

『サアこれでよい。これわお前の身につけておくのだ。』

『ありがとうぞんじます。』

『ついてわもう用わないから、はやく家えかえるがよいが、その前にあの美津子にあつて、今の話を皆するがよい。可哀そうにあの人も、ほんとに好い人にわ違いないないが、せつかく玉を持ちながら、他の光を借りようとするから、自分の玉が光らぬのだ。それもお前の光をうけたら、きつと眞に光りだすだろう。』

と、いう中にもう女神の姿わ、海に沈む月のように、しばらく光を残したばかりで、やがて見えなくなりますと、それにつれて人魚達も、星のように消えてしまい、そして自分わいつの間にか、もとの砂濱にもどつていました。

お玉わ夢からさめた心地、不思議な事もあるものと、思いながら行きかけますと、後からまた呼ぶ者があります。誰かと思つてふりむきましたら、又さつきの美津子でしたが、見るとその手にわ、さつきすてた指輪をもつていて、

『お前なんだつてこれをうつちやつてしまつたの？　せつかく私があげたのに……』

と、恨めしそうにいゝました。

そこでお玉わ、今まで海の中え行つて、光りくらべをした事から、女神に玉を授かつた事まで、くわしく話してきかせました。

それを聞くと美津子わ、やがてなにやらうなづいて、

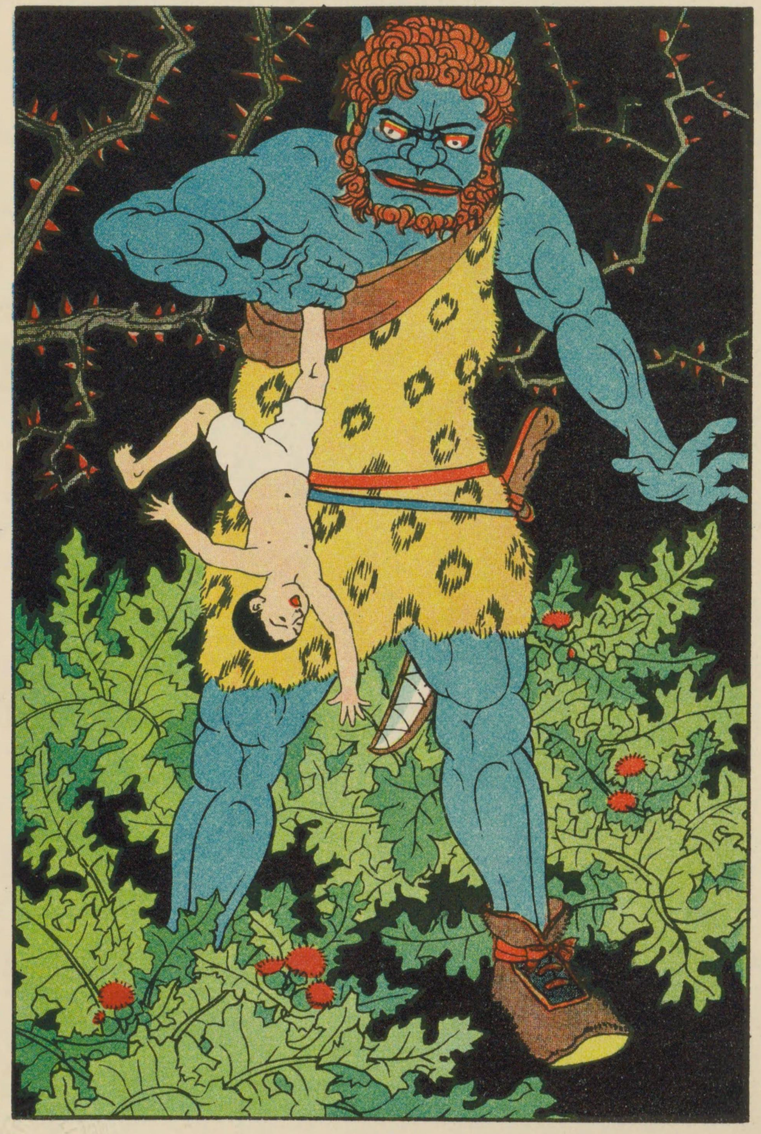
『アゝ、それで私もわかつた。でわ私も餘所の光をかりないで、身中の玉を光らせましよう。』

と、いうかと思うと今の指輪も、また指にあつた指輪も、一しよに取つて海の中え投げこみ、

『アゝこれで、清々した。』

と、手をはらいながらいゝました。

この時、海の波が一時に光つて、濱の二人の體を照らしましたが、その光わいつまでも、その身をはなれようとしませんでした。



光りの油